

高校生の自己愛傾向に関する 実証的研究

(A study on narcissistic personality trait of high school students)

高橋美知子
(TAKAHASHI Michiko)

名古屋大学大学院環境学研究科 (心理学)

2008 年

目次

序章	1
1. なぜ高校生の自己愛傾向と学校不適応の視点からか	1
2. 本論文の構成	3
第1章 自己愛に関する理論的研究の概観	5
1.1 Freud から Kohut までの自己愛論	5
1.1.1 Freud の自己愛論	5
1.1.2 Freud 以後の自己愛論	7
1.1.3 Kernberg の自己愛論	8
(1) Kernberg による自己愛人格障害の特徴	9
(2) Kernberg による正常な自己愛と病的な自己愛	9
1.1.4 Kohut の自己愛論	11
(1) 自己愛人格障害と自己対象転移	11
(2) 自己の障害の一次的障害	13
1.1.5 Kernberg と Kohut の自己愛論の相違について	13
1.2 自己愛の諸概念	16
1.2.1 正常な自己愛と病的な自己愛	16
1.2.2 DSM- に記述される自己愛	17
1.2.3 自己愛人格障害の2類型	20
1.3 自己愛に関する理論的研究を概観して	22
1.4 高校生における自己愛	23
1.4.1 自己の発達と自己愛	24
1.4.2 自己愛と自己中心性	25
1.4.3 自己愛と親子関係	26
1.4.4 自己愛と友人関係	28
1.4.5 高校生の自己愛と学校不適応	29

1.5 自己愛の測定に関する先行研究の概観	31
1.5.1 自己愛の測定方法の変遷	31
(1) 投影法による測定	31
(2) 質問紙法による測定	32
1) Murray による先駆的な自己愛の測定	32
2) 自己愛人格目録(Narcissistic Personality Inventory : NPI)を用いた先行研究	33
自己愛人格目録(NPI)による自己愛の測定	33
NPI と他の尺度との関連	33
3) その他の尺度を用いた先行研究	35
Minnesota Multiphasic Personality Inventory (MMPI)による自己愛の測定	35
O'Brien Multiphasic Narcissism Inventory(OMNI)による自己愛の測定	35
Millon Clinical Multiaxial Inventory(MCMI)	36
4) 日本における自己愛の測定に関する先行研究	36
自己愛人格目録(NPI)を用いた先行研究	36
a. 日本版 NPI(宮下・上地,1985)	36
b. 自己愛人格目録(SNPI:佐方,1986)	37
c. 日本版 NPI(大石,1987)	38
d. 自己愛人格目録(NPI:三船・氏原,1991)	39
e. NPI 短縮版(NPI-S:小塩,1998a)	39
自己愛の2類型に関する先行研究	40
a. ナルシシズム尺度(高橋,1998)	40
b. 自己愛的人格尺度(相澤,2002)	41
c. 自己愛人格目録短縮版(NPI-S :小塩,2002)	41
d. 自己愛的脆弱性尺度(上地・宮下,2005)	42
e. 評価過敏性 - 誇大性自己愛尺度(中山・中谷,2006)	42
1.5.2 自己愛測定の変遷のまとめと本論文で扱う尺度	43
第2章 本論文における問題意識と全体的目的	45
2.1 本論文の問題意識	45
2.1.1 自己愛の下位分類の視点から	45

2.1.2 自己愛の発達と親子関係の視点から	46
2.1.3 学校生活への適応における視点から	47
2.1.4 研究方法	49
2.2 本論文の全体的な目的	50
第3章 本論文における自己愛傾向尺度の作成	53
3.1 自己愛傾向の尺度の作成	54
3.1.1 目的	54
3.1.2 自己の障害目録についての信頼性の再検討(研究1)	54
(1) 目的	54
(2) 方法	55
1) 調査対象及び調査時期	55
2) 測定尺度	55
自己の障害目録	55
自己愛人格目録短縮版(NPI-S)	55
(3) 結果	56
自己の障害目録の因子分析	56
自己愛人格目録短縮版(NPI-S)の因子分析	58
自己の障害目録と NPI-S との相関	59
(4) 考察	60
3.1.3 自己愛傾向尺度の再構成(研究2)	61
(1) 目的	61
(2) 方法	61
1) 調査対象および実施期間	61
2) 測定尺度	61
自己愛傾向尺度	61
新・性格検査法 - モーズレイ性格検査(Maudsley Personality Inventory: MPI)	
3) 調査実施方法	62
(3) 結果	62
1) 自己愛傾向尺度の信頼性と妥当性の結果	62

自己愛傾向尺度の判別力の検討	62
自己愛傾向尺度の因子分析	63
自己愛傾向尺度の再検査信頼性	65
MPI の項目分析	65
自己愛傾向下位尺度と MPI の相関	65
(4) 考察	66
第4章 高校生の自己愛傾向と学校生活満足感	69
4.1 高校生の自己愛傾向と学校生活満足感との関連(研究3)	70
4.1.1 目的	70
4.1.2 方法	70
(1) 調査対象および実施期間	70
(2) 測定尺度	70
自己愛傾向尺度	70
日本版 MLAM 承認欲求尺度	70
学校生活満足度尺度	71
(3) 調査実施方法	71
4.1.3 結果	71
(1) 各尺度の分析	71
自己愛傾向尺度の分析	71
承認欲求尺度の分析	73
学校生活満足度尺度の分析	74
(2) 各尺度間の関連	75
各尺度間の相関	75
因果モデルの検討	76
4.1.4 考察	79
(1) 各尺度間の関係	79
(2) 自己愛傾向を介在する過程について	80
(3) まとめ	82

学校生活満足度尺度	97
6.1.3 結果	98
(1) 各尺度の因子分析結果	98
自己愛傾向尺度の分析	98
親子関係診断尺度の分析	99
学校生活満足度尺度の分析	99
(2) 各尺度得点間の関連	101
各尺度における学校差と性差について	101
各尺度得点間の相関	102
(3) パス解析によるモデルの検討	104
6.1.4 考察	107
(1) 各尺度間の関連	107
(2) 親子関係と自己愛傾向および学校生活満足度との因果関係について	108
(3) まとめ	111
第7章 本論文の総括的討論	113
7.1 本研究で得られた知見	113
7.2 本研究で得られた成果の討論	115
7.2.1 自己愛傾向の3つの下位側面	116
(1) 対人過敏性	116
(2) 回避性傾向	117
(3) 自己愛的な怒り	119
(4) 自己愛傾向全体の諸特徴	120
7.2.2 自己愛傾向と自己および他者との関係について	122
7.2.3 自己愛傾向と親の養育態度との関連	124
7.2.4 自己愛傾向と学校生活への適応との関連	126
7.2.5 自己愛傾向の心理的健康について	128
7.2.6 今後の研究課題	129
要 約	133

引用文献	137
付録	
付録 1	154
付録 2	155
付録 3	156
付録 4	157
付録 5	158
付録 6	159
付録 7	160
付録 8	161
付録 9	162
業績一覧	163

表目次

Table 1-1-1	自己愛人格障害の DSM-Ⅳ 診断基準	18
Table 1-1-2	Gabbard による 2 種類の自己愛の特徴	21
Table 3-1-1	自己の障害目録の因子分析結果(Promax 回転後の因子パターン)	57
Table 3-1-2	NPI-S 尺度の因子分析結果(Promax 回転後の因子パターン)	58
Table 3-1-3	自己の障害目録と NPI-S の各下位尺度得点間の相関	59
Table 3-1-4	自己愛傾向尺度の因子分析結果(Promax 回転後の因子パターン)	64
Table 3-1-5	自己愛傾向尺度と MPI の各下位尺度得点間の相関	66
Table 4-1-1	自己愛傾向尺度の因子分析結果(Procrustes 回転後の因子パターン)	72
Table 4-1-2	仮説的因子パターンと Procrustes 回転後の因子パターン間の一致係数	73
Table 4-1-3	日本版承認欲求尺度項目	74
Table 4-1-4	学校生活満足度尺度の因子分析結果(Promax 回転後の因子パターン)	75
Table 4-1-5	各下位尺度得点間の相関	76
Table 5-1-1	基本的信頼感尺度の因子分析結果(プロマックス回転後の 因子パターン)	87
Table 5-1-2	学校嫌い感情測定尺度の項目ごとの肯定率	88
Table 5-1-3	自己愛傾向尺度得点と各尺度得点との相関	89
Table 5-1-4	学校嫌い感情 3 群別による各尺度得点の平均値と標準偏差	90
Table 6-1-1	学校生活満足度尺度の因子分析結果(Procrustes 回転後の 因子パターン)	101
Table 6-1-2	各尺度の尺度得点と標準偏差および学校差と性差	101
Table 6-1-3	A 校における各下位尺度尺度得点間の相関	102
Table 6-1-4	B 校における各下位尺度尺度得点間の相関	103

目次

Figure 4-1-1	承認欲求,自己愛傾向,学校生活満足感に関する因果モデル図 77
Figure 4-1-2	承認欲求と自己愛傾向が学校生活満足感に及ぼす影響についての パス図 78
Figure 5-1-1	自己愛傾向と基本的信頼感に関するモデル図 91
Figure 6-1-1	自己愛傾向と親子関係,学校生活満足感に関する因果モデル図 104
Figure 6-1-2	自己愛傾向と親子関係,学校生活満足感に関するパス図106

序 章

1. なぜ高校生の自己愛傾向と学校不適應の視点からか

近年，教育現場において，生徒はひ弱になっている反面，頑固でわがままになったと指摘されている(河上,1999)．そのうえ，彼らは，教師の発言をそのまま受け入れるのではなく，自分の要望に見合ったものだけを受け入れるようにしており，日本人の持つ伝統的な謙虚さや控え目という態度はなくなりつつあるといわれている(諏訪,1998a,1998b)．つまり，今の子どもたちは母子密着が強いうえ，幼い頃から大切に養育されている．そのために赤ん坊のころの誇大感が壊されずに成長し，自己愛的になっている．これは自己愛人格障害のような病理までいかなくとも，「自分は特別」という幻想的な自己愛の意識を膨らませるようになるということである．この自己愛の意識は，親しい友達関係のなかでも，お互いが“親しいそぶり”をしながら，相手の自己愛を傷つけないようにすることを重要視するために，対人関係で問題を抱えることが少なくないといわれる．そこで，本論文では，現代における高校生の自己愛の特徴についての実証的研究を行うものである．

さて，Narcissism とは，英語ではセルフ・ラブ self-love といわれ，日本語では自己愛と訳されている．これは，Ellis(1898)が，自体愛と性的倒錯の患者とを関連づけたことに始まった．その後，Näcke (1899)が，ギリシャのナルキッソスの伝説に基づいて自分の肉体をあたかも異性の肉体のように取り扱うという行為を表すために“ナルシズム(自己愛)”という言葉を用いた．なお，Ellis(1898)から Näcke までは自己の身体に対する恋慕の情と理解して，ナルシズム narcissism と自体愛とを未分化に使っていたのである．

一方，20世紀に入ると Freud が「統合された自我が成立し，それが性欲動の対象となって初めて自己愛が成立する」と自己愛について論じたのである．すなわち，Freud(1914)は，ナルシズム(自己愛)を自体愛とはっきり区別して，自己愛とは“自己という統一的な表象 self-representation に対する愛 love”として取り上げたのである(小此木,1985)．Freud

以降も多くの研究者が自己愛について論じているが、1970年代に入ると自己愛についての議論はより盛んになったようである。なかでも、Kernberg(1976)や Kohut(1971)は、「これは理想化された自己に関する表象である」として独自の自己愛論を展開させていった。特に、ミスター・サイコアナリシスと呼ばれた Kohut は独自の理論を唱え、自己愛パーソナリティ障害の治療に専念したのである。つまり、自己愛的な要求や自己の誇示は強いが、他者に対しては共感の能力が欠如しているために対人関係が著しく悪い自己愛患者と、自己愛の傷つきを極度に恐れ、対人場面から引きこもってしまう自己愛患者への治療である。だが、最近では、Kernberg と Kohut は異なる自己愛人格を報告していると指摘されるように、臨床場面や理論上でも、自己愛をいくつかの異なる下位側面で捉えたり、いくつかに分類したりしている(Akhtar & Thomson,1982;Cooper,1981;Gabbard,1989;Masterson,1981)。

なお、この自己愛については、研究者によってさまざまな定義づけがされている。たとえば、Balint(1960)は、「統合失調症(精神分裂病)や深い睡眠状態に見いだされるのは、一次的な自己愛ではなく、未分化な環境に強い備給がなされている原始的な形の対象関係である」としている。Kernberg は、「自己愛とは、統合された自己へのリビド - 備給(正確には、自己へのリビド - 備給が、攻撃性の備給を上回っている状態)」とみなしている。Kohut は、自己愛と対象愛が相互に影響を与え合っているが、別の発達ラインがあるものと捉えている。Stolorow(1975)は、「自己愛とは、自己表象がまとまりと安定性を保ち、肯定的情緒に彩られるよう維持する機能である」とした。このように定義すると多くの研究者が用いた様々な自己愛を包括することができる」と、Stolorow は考えたのである(上地・宮下,1992)。

また、小此木(1981)は「自己愛の基本的な意味は、自分で自分自身を愛することである」と述べている。なぜならば、人は、他人から認められたい 評価されたい、あるいは価値ある人だと思われたいという願望の自己愛を持っており、これが満たされることが自我へのエネルギー源となり、満足した自己像を保つことができるというのである。

一方、近年では、自己愛人格障害は、個人以外の他者への依存と関連があると捉えられ、我が国においても盛んに研究されている。また、「過敏なタイプ」「内気で引っ込み思案」の自己愛人格障害など心の奥底で働く複雑で潜在的な自己愛への理解も進んでいる。この内気で過敏な自己愛に関する研究が示すところによると、彼らの誇大感は通常では表明されず、行動に移されることもない。そして、自分を誇示したいという願望は、幻想のなかで行われ、この強い願望ゆえの内的な羞恥心に悩み、他者との相互関係や他者への関心を抱くことができないでいるという罪責感に苛まれているといわれる(Gabbard,1989; Cooper

& Ronningstam,1992) .こうした感情は、強い自己批判や深刻な劣等感と羞恥心に繋がり、自己愛的葛藤から対人場面での恐怖感を生じさせることになる。この恥と自己愛との関連については、岡野(1998)が脆い自己評価を示唆するものとして報告している。

また、鑑(Tatara,1993)は、対人恐怖症の症状は、母と子の特異な相互作用のパターンから生じていると指摘している。それは、過保護であり、母の延長物としての子どもとの同一化である。それにより彼らは、他者から“見られたい”という欲求がありながら“見られたくない”という症候を発展させるというのである。このように一見すると相反するように見える自己愛だが、その根底では共通の病理を持っているのである。

さて、本論文では、この見かけは異なるが共通の病理を持った2種類の自己愛に焦点をおいて学校生活への適応との関連を研究するものである。

次は、本論文の構成について述べてみる。

2 . 本論文の構成

まず、第1章では、自己愛の理論的概念として Freud の自己愛を系統的に論じ、Freud から Freud 以後へ、そして、Kernberg の対象関係論における自己愛と Kohut の自己心理学からの自己愛を論じる。また、自己愛の測定に関する先行研究について概観することで、本研究の自己愛傾向の測定方法についての基盤を捉える。

第2章では、本研究についてさまざまな視点から問題視することと全体的な目的を述べることとする。

また、第3章から第6章までは、本研究の実証的な研究の結果から自己愛傾向の特徴を明らかにし、これが学校生活へどのような影響を及ぼしているかを検討するつもりである。

第3章の[研究1]では、Kohut 理論に基づいて鈴木(1999)が作成した自己愛の尺度を再検討する。次に、[研究2]では、一部の項目内容を平易なものにするとともに傷つきやすさの項目を加え再構成し、これを用いて高校生の自己愛傾向を調査する。この尺度に探索的因子分析を実施して因子構造を確認する。また、MPI との関連からその信頼性と妥当性について検討する。

第4章の[研究3]では、[研究2]で再構成された尺度を用いて高校生の自己愛傾向を調査する。さらに、この自己愛傾向尺度の35項目に対して確認的因子分析を実施して3因子構造になることを確認する。また、自己愛傾向下位尺度と承認欲求尺度、学校生活満足度尺度の相関分析を実施する。この結果からパス解析を実施して、誇大的な自己愛から過敏な自己愛を介在することで、学校生活満足感に対してどのような影響を及ぼすのかを検討する。

第5章の[研究4]では、高校生を調査対象として、学校への強い忌避感情に焦点をあて、彼らの自己愛傾向と基本的信頼感との関係について検討する。そのため学校嫌い感情の3群別で多母集団の同時分析を実施し、「学校嫌い感情」の高・中・低群により誇大性を伴う過敏で傷つきやすい自己愛傾向と基本的信頼感との関連について検討する。

第6章の[研究5]では、高校生の自己愛傾向と親の養育態度、学校生活満足感がどのように関連しているのかを検討する。そして、これらの尺度得点に相関分析を実施して、その関係を検討する。この結果から各尺度得点を各学校群と男女群の4群別にして多母集団の同時分析を行い、両親の養育態度が誇大性を伴い過敏で傷つきやすい自己愛傾向を介在して学校生活満足感へ、どのような影響を及ぼすのかを検討するものである。

第7章では、本論文の総括的討論を行い[研究1]から[研究5]までに検討された高校生における自己愛の特徴を明らかにする。そのうえで、この自己愛傾向と他の変数との関連で示唆されたことを考察していくつもりである。

なお、本論文には自己愛傾向の裏付けとなる事例研究を載せていないが、本研究の背景には、多くはないが教育現場での臨床経験が基盤となって論じることができると思っている。

第1章

自己愛に関する理論的研究の概観

今日、自己愛についての議論が盛んに行われているのは、自己愛人格という人格障害が問題となっているからである。そこで本論文では、一般的な高校生における自己愛傾向に焦点をあて、この自己愛傾向が学校生活における適応にどのように関連するのかを研究するものである。

まず、第1章において自己愛人格障害の理論的・実証的な先行研究を概観することで、高校生の自己愛の特徴を理解する手段としたい。

1.1 Freud から Kohut までの自己愛論

精神分析学理論としての自己愛論は、Freud によって意外に推敲・発展されていない。それだけに、Freud が統合しないままでおわった自己愛理論は、その後の研究者によっていくつもの構成要素を整理し、推敲・統合されるという作業を通して発展されたのである。ゆえに、ここでは Freud から Kohut までの自己愛という概念の理論的な研究過程を概観するものである。

1.1.1 Freud の自己愛論

Freud は、「ナルシズム入門(1914)」の中で「自己愛は異常な心理状態ではなく、一般的かつ根元的なリビドー発達の一段階である」と述べている。すなわち、Freud は「自己愛 narcissism とは、単なる自体愛 auto-eroticism から対象愛 object-love へとリビドーが発達していく段階の中間に位置するものである」と捉えていたのである。そして、乳児期初期

にみられる外界との関係が未成立で、自我とエスの区別がまだ未分化な原初的時期を、対象関係が発達する以前の状態といい、これを対象のない「一次的自己愛 primary narcissism」と定義した。また、自己と他者の区別が明確になって対象愛を経験した後、対象表象からリビドーの撤回をしてから自己へ向けられる愛を「二次的自己愛 secondary narcissism」と定義した。このように Freud は、自己愛を二つの意味に捉えていた。この「一次的自己愛」は、人間の発達過程上にある全能的な自己愛で、いずれ放棄されるものである。しかし、「二次的自己愛」は外界の対象へのリビドー備給が失敗した後に、再び自我へリビドー備給が向けられるのである。つまり、自己愛とは自我リビドーが増大した状態であると説明している。

なお、この対象愛に向かうリビドーの対象選択について次のように述べている。一つには愛情の対象を、依存対象である母親を原型として選ぶものが委託的对象選択 anacletic object choice、もう一つは愛情の対象を、自分自身を原型として選ぶものを自己愛的対象選択 narcissistic object choice であるというように区別した。この自己愛的対象選択とは、自分と似ているから相手愛するという意味である。それは、自我が他者としての愛情対象を過大評価することであり、理想自我の代役であり、その対象への自己愛的リビドーの流入であると述べている。さらに Freud は、この自己愛的対象選択の研究を発展させ、自己が対象に同一視する自己愛的同一視の構造を明らかにしていった。幼い男児が父親のようになりたいと願う「一次的同一視」が成人になって起こる場合には、対象愛の段階から自己愛の段階への対象関係の退行を意味している。このような同一視は、他者と一体化することであるので、対象愛から自己愛への退行を意味し自己愛的同一視 narcissistic identification とよばれる。この外界から撤回されたりビド - が自我に向けられて誇大妄想を生じるという病的な自己愛的同一視の状態を Freud は統合失調症(精神分裂病)とよんだ。

その他、Freud は、「シュレーバー症例(1911)」を自己愛論モデルによって説明しており、第一には自己愛段階への固着であり、第二には昇華されていた同性愛から自己愛への逆戻りである。これは同性愛願望からの抑圧によって、外界の対象表象に向けていたリビドー備給が撤回されるか、遮断を引き起こすとみなしたのである。さらに、心気症 Hypochondria も自己愛論の考察の端緒とした。つまり心気症は、器質的疾患の苦痛に代わって、対象から撤回されたりビドーが、自己の特定の器官もしくは身体に向けられることによって自我リビドーの過剰な備給による自己愛状態が起こっていると説明した。また、メランコリー(うつ病)の要因の一つに病前素質として自己愛的対象選択の優勢を挙げている。つまり、

うつ病者は愛情対象とのかかわりが自己愛的であり、現実自我のうえでは、自己と他者の境界が確立しているにもかかわらず、快感自我における情緒面では、この事実を否認した自己愛的同一視による愛し方をする病前的な性格を顕著に持っているというのである。それゆえに、対象喪失の際に、その対象への固執が対象に対する取り入れを引き起こすと論じている。

この Freud における自己愛的対象関係の解明こそが、それ以後の自我心理学や英国学派からラカン学派に至る精神分析学の人々が研究課題とした重要な理論といえるのである。

1.1.2 Freud 以後の自己愛論

Freud 以後に、精神分析における自己愛理論はいくつもの構成要素が整理され、推敲・統合されていくことで、さらに発展していった。たとえば、自己表象と対象関係の分化、自己表象に対するリビドー備給としての自己愛論を展開した自我心理学的対象関係論の自己愛理論や Kohut, Winnicott, ラカンの鏡像論などがある(小此木,1985)。ベルリン学派の Abraham も、精神病理学の最も基本的な枠組みである Freud の発生 - 発達論的モデルを確立させていった。

Abraham(1969,1971)は、リビドーの発達段階が進んで、はじめて対象に向かうという自体愛から対象愛へ移っていく過程の研究を行った。さらにメランコリーは、愛の対象喪失に伴う口愛期サディズム段階への退行であり、患者の自責は、喪失した対象に向かうサディズムが自分自身に向け替えられたものであり、攻撃性の向け替えは失われた対象が自己の内に取り入れられて、自己愛的同一視の対象となったために起きると説明している。

次に Ferenczi(1924)の母子関係 - 自我発達論は、フロイト以後の精神分析における母子関係の重視と自我発達におけるその現実的な研究の源となっている。Ferenczi によると、一番初めの愛情対象 = 乳房というのは「最初から母親によって与えられているのであるから、乳児の側では最初の受身的対象愛であるということができよう。この母親の乳房を吸うという活動の律動性は、それ以後に起きるあらゆる性愛活動のなかで本質的な要素として永続的に繰り返されることになる」と述べている。

そして、Ferenczi の弟子である Balint(1968)は、彼独自の「受身的対象愛」の定義づけを試み、さらにユニークな自己愛論へと結びつけていった。その要旨は、「最初の対象関係は、

完全に受身的であって、しかも、この受身的な愛されたい願望は、“官能的 - リビドー的”というよりむしろ“情愛的”である」というのである。また、この受身的対象愛の目標を「いつでもどこでもあらゆる方法で、いかなる非難も受けることなく、自分の側のどんな努力もなしに、自分の全存在について、私は愛されたいという願望」を規定した。すなわち、Balintはこの論議を通して新たな対象関係論的な自己愛論を提示していったのである。

また、Reich(1933)は、精神分析的なパ - ソナリティの障害について概念づけを行っている。それを Reich は「衝動的な性格」で明らかにしており、性格障害と分裂病の境界領域にあり「境界例」とよんでいる。そして、潜伏性分裂病や境界例を Freud の発生 - 発達論モデルに即して捉えることを提唱した。たとえば、分裂病の発達上の固着点は、最初にさまざまな同一化が生じ、現実検討機能が生まれ、現自我から対象への橋が初めてかけられるような段階にあるが、潜伏性分裂病や境界例の固着は、分裂病ポジションとは区別されるナルシズム的ポジションにあるというのである。

Federn(1936)は、自我心理学研究で「特殊で、特異的な備給である自我カテクシス」について次のように述べている。自我カテクシスは、様々な強さで自我境界に備給され、その強さの程度によって、自我感情の強さはそのつど備給される。また、自我カテクシスは自己保存のために働く自我自身の自己愛的リビドーによって生じると仮定される。そして、見慣れないもの、疎遠なものと感じられる疎隔状態が生じるのは、自己愛的カテクシスの減少を示すものであると論じている (Ammon,1974)。

以上のように、Freud が統合しないままで終わった自己愛論は、Freud 以後の多くの研究者によって発展させられることになったのである。

さて、次に最も有名な Kernberg と Kohut の視点から自己愛人格障害の理論を取り上げていくことにする。

1.1.3 Kernberg の自己愛論

Kernberg は、自己愛人格障害について「病的な自己愛とは、病的な発達をしてしまった自己構造へのリビドー備給である。この病的な自己は、リビドー性と攻撃性の備給を受けた原始的な自己と対象イメージに対する防衛機能である。そして、この自己と対象イメー

ジは、愛と攻撃性の両方にまつわる前 性器レベルの葛藤を反映するものである」と唱えている。また、自己愛パーソナリティの患者は、精神症状は示さず、表面的には適応性があり、慢性の空虚感が退屈さ以外の情緒的疾患は認められない。だが、他者からの賞賛や個人的成功を強く求めるが、他者への直感的理解と共感、情緒的投資を示す能力が欠如している」と述べている。

(1) Kernberg による自己愛人格障害の特徴

(上地・宮下,1992; kernberg,1984,西園監訳,1996)

この自己愛人格障害について、Kernberg は以下のような特徴を提示している。

自己概念が肥大化しており、他者から愛され賞賛されたい欲求が強く、自己が偉大で全能であるという空想と極端な劣等感との矛盾を現す。

他者からの賞賛と承認を法外に要求するが、情緒的に深みがなく、他者の複雑な感情を理解することができない。

境界性人格障害に比べて意識的自己体験の統合性はよいが、他者に対する共感性はほとんどない。また、分裂、否認、投影性同一視、全能感、原始的理想化といった原始的防衛操作の優勢を示す。

他者への強い羨望を持つ。自己愛的供給が期待できる人は理想化し、何も期待できない人は侮蔑的な扱いをする。

対人関係は、しばしば搾取的で寄生的である。彼らは、表面的には魅力的で愛嬌があるように見えるが、心の奥には冷酷さを秘めている。

自己尊重を与えてくれる刺激がないと、落ち着きがなくなり退屈してしまう。

他者からの賞賛を強く求めるので、過度に依存的と思われがちだが、他者への不信と侮蔑のために、心底は誰にも頼ることができない。

(2) Kernberg による正常な自己愛と病的な自己愛

Kernberg は、自己愛を「自己構造へのリビドー備給である」と唱える。そして、この自

己は自我の一部であり，正常な自我発達には，自己表象，対象表象，理想自己，理想対象などが統合された状態であるという．この自己の構造化の過程は，次のように説明されている．子どもは，早期幼児期において，母親との間の快適な充足感に満ちた体験のもとで，原始的で未分化な“よい”自己 - 対象表象が形成される．この“よい”自己 - 対象表象の発達とともに，欲求不満をもたらすような苦痛体験のもとで，“悪い”自己 - 対象表象を体験し形成される．“よい”自己 - 対象表象の発達の結果，はじめてリビドーが備給される内的構造が生じ，“悪い”自己 - 対象表象には，攻撃性が備給される構造となっていくのである．だが，やがて自己表象の対象表象からの分化が始まる．それは，“よい”自己 - 対象表象の内部において自己表象の対象表象からの分化に始まり，悪い”自己 - 対象表象においても自己表象の対象表象からの分化が達成される．そして，“よい”自己表象と“悪い”自己表象とが自己概念に統合され，同様に“よい”対象表象と“悪い”対象表象とが“全体”対象表象へ統合される．これらは Mahler ら(1975)の唱える分離 - 固体化段階とほぼ一致している．これにより子どもは，母子関係における充足感とある程度の欲求不満というアンビバレンスなものに耐えられるようになっていくのである．なお，正常な自己愛は，この正常に統合された自己構造に依存し，安定した対象関係と価値システムの中で本能的な欲求を充足でき，正常な自己評価の調節機能によって特徴づけられる．しかしながら，Kernberg(1970,1974)によると，自己愛人格障害にみられる病的な自己愛は，この自己 - 対象が分化する段階で生じる内的構造の病的な圧縮によって特徴づけられ，自己 - 対象表象構造への退行を伴うものであると論じられている．

すなわち，現実自己，理想自己，理想対象が融合し，肥大化した自己（誇大自己）を形成，悪い”自己表象の抑圧と解離あるいはそのいずれか，外的対象表象を無価値化し，それへの依存の拒否，自我と超自我の正常な境界のあいまいさ，などがみられる．そして，かれらの欲求不満と怒りに駆られた自己像の受け入れ難い部分は抑圧され，外的対象に投影されるため，周囲の世界も怒りと復讐心に満ちたものになるといわれる(上地・宮下,1992)．

次に Kohut および自己心理学の立場から自己愛に関する理論を概観する．

1.1.4 Kohut の自己愛論

Kohut は、「自己愛の障害とは、自己の心的構造の欠乏・欠陥である」と考えた。それは母親つまり自己対象 self object の共感不全という外傷と、理想化への過程が損傷なく発達してこなかったことに由来している。そのために、蒼古的幼児的な誇大自己への固着と理想化された自己対象 self object を、際限なく追求める態度をもたらしていると説明している。この Kohut の自己愛論は、患者を治療していく過程で展開していく特徴的な転移によって同定されたものである。その一方で、自己愛の健康的な側面を強調して、従来から精神分析が不可能とされてきた見解に反して、自己愛的障害および自己愛的パ・ソナリティ障害ともに分析可能であることを示唆している (Kohut,1971,Kohut & Wolf,1978)。

(1) 自己愛人格障害と自己対象転移

Kohut は、患者を分析治療していく中で、「鏡転移」、「理想化転移」、という特徴的な自己対象転移が発展することによって自己愛人格障害と診断した。そして、この鏡転移には融合転移、分身転移、狭義の鏡転移が含まれていたが、後に、「分身転移」を自己対象転移の一つに加えた。

「鏡転移」mirroring transference とは、患者が治療者に、肯定、承認、正当化、賞賛を求めてくる現象である。つまり、かれらの脆弱な自己評価を支えてくれるような役割的存在となって欲しいという要求を表明することである。これは、早期幼児期に、自己の価値、能力、達成、興味などを承認し、賞賛してもらった映し返し・響き返しという母親からの応答を十分に味わってこなかったことが背景にあると考えられている。そのために承認・賞賛欲求が幼児的なままにとどまっており、これが治療の中で復活してきたのが鏡転移である。

「理想化転移」idealizing transference とは、患者が治療者を全知全能で完璧な存在として理想化し、その偉大さと完璧さを取り入れ一体化したいという欲求を向けてくる現象である。これは、親のもつ力強さや平静さ、安定性などと一体化・同一化したい、そして、不安や緊張を鎮めて欲しいという幼児的な欲求が、十分な対応を受けずにきたために、治療中に復活してきたと考えられる。

「分身転移」*twinsip transference* とは、自己愛障害の患者は自分に似たものを探し求める。そこで、治療者に、自分と類似性を持つ存在であって欲しい、あるいは、心的構造が似ていると仮定して欲しい - 彼らは、これまで認められなかった自分の技能や才能が治療者により保証されることを期待する - と願うことが、治療中に復活してきたと考えられる (Kohut,1984)。

このような自己愛人格障害者の自己対象転移の背景について、Kohut(1971)が「子どもは自己対象としての共感的な母親を求める。つまり、それは乳幼児期の蒼古的な誇大自己 *grandiose self* を映し出す鏡のような母親の瞳の輝きと、子どもの自己愛的喜びへの母親の参与とが、自己を成熟させ自己評価と自己信頼を発達させる。しかし、乳幼児期の誇大自己が心的外傷によって妨げられ、健全な自己の発達がなされず太古的なままで固着された場合には、自己愛に障害が生じることになる」と説明している。

また、乳幼児は、理想化した自己対象から不安や苦痛、感情などを鎮めてもらう体験を必要としている。そして、これを繰り返すうちに、やがては自分で不安や感情を鎮める能力である自己緩和 *self-soothing* が獲得されるようになる。しかし、親の自己対象としての機能はいつも十分であるとは限らない、ときにはいさめたりして「適度な欲求不満」を与えることもある。このように適度な共感不全は、自己対象の機能を受け継ごうと働くものである。なお、Kohut は、親が子どもに十分な自己対象経験と適度な欲求不満を与えるとき、子どもの心に自己対象としての機能が内在化されることを「変容性内在化」*transmuting internalization* といい、内在化される機能を「心的構造」*psychic structure* と呼んだ。そして、子どもの早期精神発達の過程において、親の共感的応答や鏡映 *mirroring* は子どもの潜在能力を促進させる。ゆえに心的内容の一部は、自己に属するものとして保持されるか付け加えられ、別のものは自己に属さないものとして排除される。この過程の結果として、「中核自己 *nuclear self*」が確立される。また、Kohut は、この中核自己を「われわれの最も中心的な野心と理想とに統合され、また身体と心が空間においてまとまりをなし、時間において連続しているという体験を維持し、自主性と認識の独立した中心であるという感覚の基盤である」と説明している(Kohut,1977)。

そして、自己愛人格障害の場合、「中核自己」は形成されているが、親の共感作用の不十分さから、心的構造、自己評価、健康な野心や理想化などの形成が妨げられている。その結果、自己はストレスや傷つきなどにより弱化、不調和、断片化などを起こすようになるといわれる(上地・宮下,1992)。

(2) 自己の障害の一次的障害

Kohut にとって、自己愛の障害とは、心的構造が形成されるために必要な自己対象機能が得られないこと、不適切であること、安定して与えられないこと(欠損)であり、自己の障害にほかならないと考えたのである(上地・宮下,1992)。そして、Kohut(1977)によると、この自己 self とは「空間的にまとまりをなし、時間的に永続する単位 unit であり、主導性 initiative の中心かつ感覚印象 impression の受容者 recipient」ということである。

この自己の障害の一次的障害 primary disturbance に含まれる自己愛的障害は、中核自己は成立しているが、彼らは一貫性、主体性、活気、内面の調和性、時間的展望がとれておらず、抑鬱的で、エネルギーが枯渇状態になるという一時的な断片化を起こしやすいという特徴が示される。

なお、この自己愛的障害には、自己愛的行動障害と自己愛的パ・ソナリティ障害の2種類がある。一方の自己愛的行動障害は、誇大的で共感能力に欠け、傍若無人な態度をとり、自己の断片化から回復するために性的倒錯、非行、嗜癖に走るといった主として外界変容的症候(Ferenczi,1930)という症状を表したりする自己の一次的な崩壊、衰弱あるいは重篤な歪曲である。もう一方の自己愛的パ・ソナリティ障害は、自己愛の傷付きを恐れ、対人関係から引きこもり、自己の断片化の時には、心気症、抑うつ、批判への過敏さ、熱意の欠如といった主として自己変容的症候(Ferenczi,1930)という症状が表面化したりする自己の一次的な崩壊、衰弱あるいは重篤な歪曲である(Kohut,1977)。この二つの自己愛的障害の病的な部分は、解釈と徹底操作によって治療的に操作でき、自己対象である治療者との限局された転移性融合へと向かうので分析可能であるといわれる。

以上のように Kernberg と Kohut の立場から自己愛に関する理論を概観してきたが、次は彼らの自己愛論の相違について述べる。

1.1.5 Kernberg と Kohut の自己愛論の相違について

Kernberg と Kohut は、異なる背景を有する。一つには患者層の相違があり、異なった自

己愛の病理を論じているともいわれる。つまり Kernberg の患者層は、入院を必要とするボ
-ダ-ラインレベルの人たちで、重症のパ-ソナリティ障害であったといわれている。

一方、Kohut の患者層は、シカゴにおける中流以上の上層階級といわれる人たちで、社
会生活面では比較的適応していたところから、軽症のパ-ソナリティ障害を扱っていたと
もいわれる。そこで Kernberg(1975)と Kohut(1971,1977)の相違について述べてみる。

Kernberg の考えた病的な自己愛とは、「病的な発達をしてしまった自己構造へのリビド-
備給である」とされている。それは乳幼児期に、対象関係で耐え難い欲求不満を経験する
ことで強い愛情飢餓が生じる。そして、超自我は過酷で攻撃的なものとなる。この欲求不
満の体験から、理想自己像や理想対象像が現実自己像と融合して、肥大した自己である誇
大自己が形成される。そして、彼らは、空想の中で外的対象の表象を無価値化するか、そ
れへの依存を拒否する。また怒りと欲求不満にかられた自己表象や対象表象は、抑圧され
たり、投影されたりする。つまり、Kernberg の病的な自己愛というのは、歪んだ内的な自
己イメ-ジと歪んだ内的な対象イメ-ジの葛藤に対する防衛の一つである(和田,1999)。
その背後には、嫉妬、激しい怒り、侮蔑が隠されている。また、自己愛者の治療は、た
びたび中断される。これについて、Kernberg は、治療者を無価値化したり侮蔑化したりする
過程のなかで起きることに関連すると述べている。つまり、治療者は有用な存在であるが、
患者の気づいていない考えを提示できるという能力に対する強い嫉妬心が存在し、これを
防衛するために、治療者の脱価値化や依存への拒否が生じると考えたのである。

このように Kernberg は、病的な自己愛とは歪んだ自己表象と対象表象の葛藤に対する原
始的な防衛形態としてできたものであるから、転移の基礎にある嫉妬や軽蔑の感情につい
て患者に徹底的な解釈を通じて解消させ、健全な自己に変えることの重要性を力説してい
る(Kernberg, 1970,1974)。

これに対して、Kohut 理論での自己愛の障害は、「自己の欠損状態である」と説明されて
いる。この自己の欠損は、乳幼児期において自己対象の共感性の失敗という結果から、誇
大性の承認欲求や理想化された対象との融合欲求が満たされないことで、十分な心的構造
が形成されなかったために起きると考えたのである。すなわち、Kohut による自己愛の病
理は、自己対象の応答不全から心理的安定や自己評価を維持する心的機能が発達し損な
ったことに由来するとしている。しかしながら、このような自己の欠陥状態であっても中核
自己ができあがっていれば、傷ついた野心の極は鏡映してくれる自己対象を求め、傷つい
た理想の極は理想化自己対象を求める(和田,1999)。そして、この自己対象転移に対して、

治療者による適切な共感や治療中におきる適度の欲求不満で自己の欠陥を満たしてやることなどの治療活動が重要であるとした。また、鏡映転移と理想化転移は、双極的な自己(Kohut,1977)が有する誇大自己と理想化された親のイマ - ゴを反映していると考えた。さらに、Kohut は、理想化は解釈するのではなく額面通り受け入れるべきであると述べている。

もう一つの相違点としては、攻撃性の表現様式についてである。Kohut(1971,1977)の述べる自己愛的怒りは、無意識的には、原始的・幼児期的な自己 - 自己対象に対する期待にまつわる失望あるいは挫折の後におこるものであり、一次的なものではなく二次的なものである。しかし、Kernberg は、生物学的なもの、一次的なもののみとしたのである。

Kohut がいうには、通常の場合、自己が傷つきやすいことや誇大性は表面化されてこない。むしろ、それらは解離されており、意識から分裂・排除されている。だが、自己が脅威にさらされると、これらは活性化され、無力感や苦痛を怒りや報復という形で表現するのである。こうした場合に、自己愛的怒りは、次のようなことを表現する役割があるといわれている。自己愛的怒りは無力感と傷つきやすさを告げると同時に、そうした傷つきやすさを表面的には否認するものである。自己愛的怒りは、こうした不愉快な自己発見を引き起こした不当な対象こそ、その存在が末梢されるべきであるという怒りに満ちた要求をになっている。こうした執拗な要求を果たそうとする、全能感に満ちた、魔術的といっているほどの試みとなるのである(Goldberg,1980;岡,1991)。

そして、Kohut は、自己愛が傷つけられたり、恥をかかされたりしたときの激しい怒りとしての攻撃性を、自己愛的憤怒と呼んだ。その攻撃性は、どんな方法をしてしても復讐しないと気が済まないし、その相手に対しても容赦がないのである。その残忍さ、気の収まらないさ、容赦のなさがその他の種類の攻撃性と自己愛的憤怒の違いであると論じている。

だが近年では、Kernberg は、誇大的な自己愛の障害を論じており、Kohut は、誇大的な自己愛と過敏型の自己愛という両タイプの自己愛の障害について論じていると、自己愛人格障害への視点の相違が明らかになってきている。

さて、自己愛人格障害に関する諸理論を概観してきたが、次は自己愛の諸概念について述べることにする。

1.2 自己愛の諸概念

1.2.1 正常な自己愛と病的な自己愛

Pulver(1970)は「健康な自己愛(良い: good)」を防衛的でない本質的な自尊感情に関連し、また「不健康な自己愛(悪い: bad)」とは、好ましくない自己評価に対して自分自身を防衛するという防衛プライドに関連すると区別して述べている。

また、Stolorow(1975)は、自己愛とは「自己表象の情緒的彩りである自己評価を調整し、自己評価の構造的土台である自己表象のまとまりと安定性を維持する精神的操作である」と定義し、それが健康か不健康かは、自己表象を凝集的・安定的にし、肯定的情緒で彩ることに成功するかどうかによって決まると述べている。

一方、Kernberg(1975)による正常な自己愛とは、「正常に統合された自己における肯定的な備給と関連しており、自己評価を調節する適応的かつ健康的な方法である」と定義している。すなわち、子どもは、早期の安全な愛着体験に由来する好ましい体験により、健康状態や容姿を含む身体的自己 body self を肯定的に感じられることで正常な自己評価が形成される。これらは同時に自立欲求と依存欲求の双方を適応的に満足させる能力に繋がっている。つまり、自分には能力があり事態を把握しており安全であるといった肯定的感覚は、人の自己評価を決定させる基盤となりうる。例えば、好ましい側面と否定的な側面を有する自分に関する現実的に統合された感覚が理想自己 ideal self を表す望ましい自己概念と共存するときに、正常な自己愛が成立されるのである(Reich, 1960)。すなわち、正常な自己愛では、主体者の表象は現実自己に含まれる肯定的・否定的な自己の側面を、自分自身と他者の双方で知覚されているとして受け入れられる。そして、好ましい側面と否定的な側面の両者において、現実的には自己と他者は異なるものとして認識し、攻撃性は自己表象の中に統合されている。また、他者からの価値を内在化し、他者に共感できるとともに他者の独立性と自立性を尊重する能力を有している。なお、幼時的自己誇大感を放棄したことでもたらされた理想自己 ideal self と、他者から受け取った価値や理想による理想対象 ideal object が内在化されることで統合され、正常な超自我が存在するといわれる(Kernberg, 1989)。

対照的に、病的な自己愛とは、幼児期の誇大的全能感に固着ないしは退行していることを意味している。自己評価の調節は、ふつう断念されるべき幼時的な欲求充足を表明した

り、それに対して防衛したりすることに過剰に依存するといわれる。そして、自己愛者の自己は対象と同一視され、同時に幼児的な自己の表象は対象に投影される(Kernberg,1984)。これは自己評価を確立するための多様なより所が欠損している状態で、超自我が統合されないままなのである。それゆえ主体は、誇大的な自己が築かれることに対抗して、非現実的な期待を備えた原始的で無慈悲な超自我前駆体のおかれるのである。一方、他者との相互関係は、誇大自己によって妨害される。すなわち、誇大自己は、自己の否定的な側面を他者に投影することで無価値化して排除する。そして、追求すべき理想自己を持ちながら、情緒的に発達することや現実的な成功への努力を認識すること、また乗り越えるべき理想対象などが欠如しているのである。それはあたかも、その人の持てるエネルギー-すべてが自意識過剰の舞台に費やされたかのようなのである(Reich,1960)。

つまり、病的な自己愛では、誇大的な優越・有能感が形成され、成し遂げられないような野心を持つようになる。また、他者からの賞賛・承認を求めながら、他者への不信や侮蔑が強いいため、他者に依存できないでいる。さらに、他者への共感の欠如と他者を搾取する傾向がある。そして、自分自身の自己評価を調節する機能が病的な形態であるため、自己評価は罪より恥意識の影響を受ける。それゆえ、自己評価とプライドを守ることに価値を見だし、慢性的な空虚感や孤立感に苛まれるのである。

1.2.2 DSM- に記述される自己愛

アメリカ精神医学会(APA)の診断分類基準である Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (DSM)には、自己愛性人格障害(Narcissistic Personality Disorder)の診断基準が記載されている。この自己愛性人格障害が、人格障害のタイプとして記述されるようになったのは、第3版(DSM- ,1980)以降である。その後、1994年にはDSM- が提出された。この自己愛性人格障害の診断カテゴリ - は、下記の9項目であり、四つの臨床域に分かれている。それは対人関係(項目番号4, 5, 6, 7, 8), 自己イメージ(1, 3), 認知(2), 行動(9)である。

Table 1-1-1 自己愛人格障害の DSM- 診断基準

誇大性（空想または行動における）、賞賛されたいという欲求、共感の欠如の広範な様式で、成人期早期までに始まり、種々の状況で明らかになる。

- (1) 自己の重要性に関する誇大な感覚（例、業績や才能を誇張する。十分な業績がないにもかかわらず優れていると認められることを期待する）を持つ。
- (2) 限りない成功、権力、才気、美しさあるいは理想的な愛の空想にとらわれている。
- (3) 自分が“特別”であり、独特であり、他の特別な、または地位の高い人たち（または施設で）しか理解されない。または関係があるべきだと信じている。
- (4) 過剰な賞賛を求める。
- (5) 特権意識、つまり特別有利な取り計らい、または自分の期待を自動的に従うことを理由なく期待する。
- (6) 対人関係で相手を不当に利用する。つまり、自分自身の目的を達成するために他を利用する。
- (7) 共感の欠如；他人の気持ちおよび欲求を認識しようとしなない。またはそれに気づこうとしなない。
- (8) しばしば、他人に嫉妬する。または他人が自分に嫉妬していると思ひこむ。
- (9) 尊大で傲慢な行動、または態度。

自己愛性人格障害は、Table1-1-1 に示された9項目のうち、少なくとも5項目（またはそれ以上）が認められることによって診断される。

また、これらの診断基準の詳細を下記に述べる。（APA,1994；Millon,1981；小此木,1981）

- (1) 自己の重要性に対する誇大感とは、自分は特別だとか、自分の能力は人より優れていると思っている。心の中に、人並みはずれて素晴らしい理想的な自己像を抱いている

ことである。

(2) は、理想的な自己像をいつも現実化しようと努力している。限りない成功、権力を獲得すること、才能を発揮すること、より美しくなることなどの理想の現実を休みなく追い求めるのである。

(3) 自分は優れた人物であり、並はずれた権利・特権を与えられている「非常に特別な人」というものである。また、自分は特別な、或いは高いステータスを持つ人々にしか理解されない。そして、そのような人と関係があるべきだと感じることである。

(4) 自分は、他の人々から高い賞賛を受けるに値する人物であるということを信じており、絶えず周囲からの称賛や賛美、好意、親切、特別扱いを得ようとするのである。

(5) の特権意識とは、相互に負うべき責任を引き受けることなく特別扱いされることを期待することである。

(6) 彼らは、他者のことを当然自分のいうことを聞き入れるものとみなし、億面もなくそうした行動を取り、他者を自分の個人的願望を強調するために利用するのである。

(7) 共感性の欠如とは、他者の欲求や他者の感情を認識することが困難である。例えば、友人が重病のために会う約束を果たせないときでも、いらだち、驚きを隠さないことである。

(8) 他者の成功や所有物を妬み、自分がそのような達成、賞賛、特別扱いに値するという感情をもつこととして表れるのである。

(9) 横柄に、傲慢に尊大なやりかたで行動することであり、他者の人格の重要性をないがしろにし、他者の権利にも無関心であるという事を露わにするように振る舞うことである。

なお、DSM- の再編成に携わった Millon(1995, 佐野信也監訳,1997)によると、この診断項目のリストは、最も高頻度に認められるものから頻度の低いものへ、あるいは識別能力の高い項目からそうでない項目へと配列されている。また、DSM の多軸診断において、人格障害に至らないまでも、そのような人格の傾向が認められるならば、これを記載することになっている。そして、この最終版 DSM- は、基本的に多様な診断項目を含むという DSM の伝統が踏襲されているということである。

1.2.3 自己愛人格障害の2類型

近年、自己愛人格障害の特徴として、見かけは異なる外観を持ちながら、根底では共通の病理を持っているという2類型の自己愛に視点が向けられつつある(Akhtar & Thomson,1982;Broucek,1982;Cooper,1981;Cooper & Ronningstam,1992;Gabbard,1989; Gersten, 1991;Masterson,1981;Rosenfeld,1987; Wink,1991)。これらの患者は、誇大的で自己顕示的な幻想を持ち、自己満足が持続できなくなってしまうのではないかという懸念を抱いている。そして、他者との結びつきが保持できないという共通の特徴を持っているが、その表現型は異なっているといわれる (Cooper & Ronningstam,1992)。

まず一つには DSM- に「誇大性、承認欲求、共感性欠如」として診断基準が示されている「顕在型自己愛人格障害」がある。この「顕在型の自己愛」は、自信過剰、自己顕示的、自己耽溺的で、他人を犠牲にする攻撃性、他者から過度に賞賛を求めるのに、他者の欲求を無視することや、共感の欠如などの障害が中心となっている。また、この自己愛者は、外向性、自信過剰、尊敬されたいという願望にもかかわらず、自己満足感、統合感、情緒的健康感を述べることはないといわれている(Wink,1991)。

そして、もう一方は、適切な自己評価の感覚を保持し得ないために、誇大性、賞賛への欲求、自己中心性は防衛反応として現れ、内気さや自己主張の抑制が表面化される「潜在型自己愛人格障害」がある。Cooper & Ronningstam (1992)は、「潜在型自己愛者」について次のように述べている。かれらは、誇大的で非現実的かつ自己中心的な幻想を抱いているが、その幻想は常に達成困難なものとして自覚され、明らかな行動として認められることはない。また、自己顕示性、誇大性、強い攻撃願望を抱いていることを受け入れがたいこととして認識する。そのうえ、このような特徴が自分にあることさえ意識に上らせないように抑圧するところがある。すなわち、かれらの良心は、このような願望を心に抱くことは罪であると意識することを求めてくるからである。

その反面、潜在型自己愛者は、自分が特別であることが十分に評価されていないし、自分の優れたところが理解されていないために、公正かつ公平な扱いを受けていないと感じている。しかしながら、正しく認められるような行動を起こすことはできないでいる。そのために重篤な自己破壊、自己憐憫、抑うつ的な外貌を見せるのである。

また、対人関係においては、他者を搾取するのではなく、利用される側になることが多い。同様に、共感性の欠如を隠すために、自分を犠牲にしても他者への関心を守ろうとす

る態度を見せる。さらに、他人に対する嫉妬心は、追従のお世辞という見せかけの態度の背後に隠されてしまうことがある。ゆえに、彼らの社会的行動は、傷つきやすさから過度に控えめで引っ込み思案であり、恥ずかしがり屋で自己主張もできないところが認められるのである。

この二つのタイプの自己愛人格障害について、Gabbard (1989,1994)も、自己愛は2つの異なるタイプを両極とした連続体上にあるという考え方を提唱した。つまり、他者の反応に鈍感で自己中心的、攻撃的な特徴をもつものを「無関心型 (oblivious type)」、他者の評価に敏感であり、内気で傷つきやすい特徴を持つものを「過敏型 (hypervigilant type)」と呼んでいる(Table 1-1-2)⁽¹⁾。

Table 1-1-2 Gabbard(1989,1994)による2種類の自己愛の特徴

周囲を気につけない自己愛的な人 (無関心型; The Oblivious narcissist)	周囲を過剰に気をつける自己愛的な人 (過敏型; The Hypervigilant narcissist)
1.他の人々の反応に気づくことがない	1.他の人々の反応に過敏である。
2.傲慢で攻撃的である。	2.抑制的で、内気、表に立とうとはしない。
3.自分に夢中である。	3.自分よりも他の人々に注意を向ける。
4.注目の的になる必要がある。	4.注目の的になるのを避ける。
5.「送信者であるが、受信者ではない」	5.侮辱や批判の証拠がないかどうか、他の人々に耳を傾ける。
6.明らかに、他の人々によって傷つけられたと感じることに鈍感である。	6.容易に傷つけられたという感情を持つ。

(1) Oblivious type を「無自覚型」「誇大型」、Hypervigilant type を「過剰警戒型」と訳すこともある。

また、Broucek(1982)は、誇大的で傍若無人な性格を「自己中心型 (egotistical narcissist)」、引きこもりがちで恥の感覚が強い性格のものを「解離型 (Dissociative narcissist)」と呼んでいる。Rosenfeld(1987)は、自己愛的な内的対象関係によって外界を能動的に覆い、外界現実をコントロールしようとするものを「厚皮 (thick skinned)」、自己愛的な内的対象関係を保護しようとして外界を避け、引きこもるものを「薄皮 (thin skinned)」としている。

1.3 自己愛に関する理論的研究を概観して

自己愛に関する諸理論を概観して明らかとなったことは、ヨーロッパを起源とする自己愛は、過度に強調された自己没入、あからさまな誇大性、鈍感さ、露出傾向、傲慢さ、搾取性などとして、また西欧社会の規範として期待されるような環境における自己評価の調節不全として定義づけられてきたことである(Ronningstam,1998,佐野訳,2003)。それゆえに西欧以外の国々、特にアジア圏においては「自己愛」を識別し探求するうえでの障害となっていた。だが近年は、DSM- (APA)の診断基準のおかげで、国々の相違を乗り越えた診断が可能になったといわれている。

しかしながら、それでも自己愛が対象関係の障害ならば、自分の周囲のひとへのかかわり方に違いがあることが示唆されている(鑪,Tatara,1993)。すなわち、鑪は、周囲との調和を大切にする場合には、対人関係において人並みで目立たないようにする必要があることを指摘している。これは現行の自己顕示的な「自己愛」とは異なるように感じており、過敏なタイプの「自己愛」を意識していると思われる。それゆえに、鑪(2003)らは、近年、注目されている「自己愛」には、「恥」と「対人恐怖(または社会恐怖)」が伴うと述べている。それは、われわれが「恥」を感じやすいうえ、羞恥心が強く自己卑下的であり、慎み深く自らの非を認めやすいと形容されてきたことにある。これについて Benedict(1946)は、日本文化を「恥の文化」、アメリカ文化を「罪の文化」として定式化している。しかしながら「この『恥』は、感情そのものではなく、恥の感覚 Sense of shame (つまり自分、ないし他人を感じる恥に対する気づきや敏感さ)であり、それは対人恐怖の症状に似たものである」と、岡野(1998)は力説する。

すなわち、周囲との調和を大切にする場合には、他者の前で自分の持っている能力や強さを誇示するべきではなく、自制し隠すことにより価値が見いだされる。これは個人の能力や力を抑制し、見えにくくすることで、挑戦を受けたり傷つけられたりすることを防いでいるといえる。ところが、その反面、抑圧された自己の能力や強さなどを誇示したい感覚は、他者からの評価に大きく依存することになると考えられる。つまり、これが対人場面における「自分に対する外の評価を気にすること」に繋がっていくのであり、「自分は誰よりも優れた実力を持っているはずである(DSM- ,1994)」という自己イメージを自己愛者にもたらすことになるのである。

一方、このイメージの裏では「自分の考えている自己像と現実自己にズレがあり、実力

が伴っていないのではないか」という自己への不信感も持っているといわれる(鑑,2003)。

この過敏なタイプの自己愛者を生み出す要因について「伝統的な背景のなかで、子どもたちは過保護のもと特別扱いされ養育されてきた。そのために幻想的な全能感が現実にはさらされ傷つけられることなく、そのまま成長してきたことが心理的メカニズムとなっている(町沢,1998)」ことも指摘されている。

さらに、大きな要因の一つとして、人間関係に変化がおきたことも挙げられている。これについて福島(1992)が、「現在は人間関係が希薄となり、周囲の仲間との心の交流が少なくなったことで内的な幻想が肥大化し、現実や他者によって検討されない誇大的な観念を抱きつづけることになる。そのうえ、他者との遭遇が少ない分だけ、対象愛の発達が遅れることにもなる」と述べている。ゆえに、この自己愛的な万能感を維持するために、外界との現実的な接触をなるべく避けるという方法をとることになると考えられる。

このようなことから本研究で取り上げる自己愛は、Kohut(1977)や Gabbard(1994)が論じる誇大性を伴っているが、過剰警戒、抑うつ的な自己愛のほうに優勢に見えるというものである。ゆえに本論文では、この Kohut 理論を基にして自己愛を取り扱うものである。

次に、青年期のただ中にある高校生の自己愛について概観する。

1.4 高校生における自己愛

思春期・青年期には、急激な心身の発達によってさまざまな葛藤が起きるときであり、このようになりたいと願う理想的な自己像と現実的な自己像がそぐわなくなるときでもある。それゆえに自分自身へ強い関心に向け、新たな自己像を形成していかなければならないといわれる。つまり、中学生から高校生にかけては、自己中心的な心性が顕著に表象されるときである。そのうえ、現代の若者は、自己愛的な傾向が強いことも指摘されている。だが、この時期に自己愛的な特性が強くても、必ずしも自己愛人格障害に移行することを意味するものではない。すなわち、病理まではいかなくとも、自己愛的な特徴が表面化しやすいのが青年期といえるのである。

また、自己愛と関連する変数は多くみられ、これらの関連変数から高校生の自己愛について概観してみたい。

1.4.1 自己の発達と自己愛

青年期における発達課題を Blos(1962;野沢訳,1971)は「第二の分離 - 固体化」と呼び、「両親からの精神的な独立（心理的離乳）の時期」と位置づけている。さらに、この時期は、子どもにとっては自我同一性を確立する重要な時期でもある(Erikson,1959;小此木訳,1973)。つまり、この二つの発達課題が達成されて、大人として社会に参加できるようになるといえる。特に、中学から高校にかけては、親に対する「依存と独立」という葛藤を体験したり、アイデンティティの確立などの重要課題を達成したりして段階的に自己を発達させていくのである。

このように青年期に入ると自己を取り巻く対人環境に変化が生じ、あらたな自己像を確立する必要に迫られる。それゆえに、この時期には、同性・同年代の友人との親密な関係に基づいて理想の自己像を形成したり、自己と他者との視点からみた現実的な自己像を確立したりして、両者を照合させた肯定的な自己評価を持つことができるときである。

しかし、この時期には、学業分野などで外からの評価を受けることが多くなるため、主観的な自己評価も大きく揺れることになる。さらに、身体的に成長する時期であり、身体的特徴や運動能力なども社会的評価を受けやすく、これらが自己評価の基礎となりやすいのである。

その一方で、彼らにおける変化の個人差が大きいこと主観的な自己評価が不安定になり、自己愛的な傾向に没入することが多いことも指摘されている(中山・中谷(2006))。

つまり、高校生における自己の発達課題の中心は、自己に対する肯定的な評価の維持に必要な機能としての「自己愛」であるといえる。

この自己に意識が向きやすいことから、Jacobson(1964)は「青年期に入ると、人は乳幼児期の愛情対象から離脱していく程度に応じて自己愛的な没入に浸る長い時期を通過する」ことを示している。小此木(1981)も「親からの受身的対象愛が満たされなくなるため自己愛が高まる時期である」と指摘する。さらに、大淵(2003)も、思春期に入り自意識が高ま

ることや恋愛など誇大的な自己愛を助長する経験が増えること、将来に対する野心から誇大的な夢想到耽ることなどを挙げている。

以上のようなことから「自己愛」は、高校生における自己の発達を理解するのに重要な鍵概念と考えられるのである。

1.4.2 自己愛と自己中心性

最近の若者は、世の中が自分を中心に動くと思っているのではないかと批判されている(井上,1992)ほど、かれらの思考の焦点が他者よりも自己に向かっているのである。

これについて Elkind(1980)が「青年は、自分自身に没頭しており、他者も自分が気にしていること(態度や見た目)に注目していると間違った考えを持つようになる。やがてこの考えは自意識過剰、傷ついた感情、自分のイメージを低く評価するなどマイナス思考へと発展させてしまう恐れがある」などと、青年期に入ることによって自己意識が高揚することから自己中心的になることを論じている。

この自己中心性については、Piaget(1926)が、幼児期特有の心性として「自己と他者の境界線が曖昧で、内界と外界が未分離であるために、自分だけの考えである主観と、他者にも共通する考えである客観の区別がうまくできず混沌としている状態を意味する」と唱えている。しかしながら、Elkind が述べている青年期の自己中心性とは、Piaget とは異なり「自己への関心が集中する」という意味である。つまり、思春期から青年期にかけては、急激な心身の発達に伴い、それまで青年自身が持っていた自己像が現実的自己とあわないものになり、かれらの視点は自分自身に向かい自己中心的になる。これにより新たな自己像が形成されることになるのである。

これについて Frankenberger(2000)が、14歳から18歳の青年は20歳から60歳の大人よりも高い自己中心性を示すことを指摘している。それを裏付けるように、中高生を対象とした調査結果では、個人生活重視で自己中心的な価値観を持つ若者が増えたことが報告されている(中里,松井,1997)。そのうえ、現代の若者は、自分の自己愛を守るために傷つきたくないから人と深くかかわらないようにしているといわれている。それは、あくまで自

分自身を守るために気遣いをしているのであり相手に対する共感性があるわけではないので、友人関係で神経をすり減らしているのである(町沢,1998)。

この自己中心性は青年期における自己中心性であり、自己愛傾向の表出として捉えられている(Blos,1962;野沢訳,1971)。さらに、Kohutも「青年期に入ると自己の再構成が最も重要な課題である。それゆえに、親からの分離に伴い、自己愛人格障害の臨床症状が露呈しやすい時期である」と青年期における自己愛の高揚について述べている(伊藤,1992)。

このように青年期は、自己に焦点を向け自己愛的になることで、彼らの発達課題を達成させようと努力をしているのであろう。

1.4.3 自己愛と親子関係

子どもが身体的・精神的発達をするには、親子関係が重要であることはいうまでもないが、これは子どもの成長過程において変化するのが常である。そして、高校生を含む青年期は、すべての発達において著しく変化に富んだ時期である。したがって、高校生の親子関係は、幼少期とは異なった現象を表すと考えられる。

幼少期における健全な親子関係は、親は子どもたちのさまざまな要求を満足させることを受け入れている。これについて Mahler ら(1975)は、乳幼児期の分離 - 固体化過程において、母親の情緒的供給の必要性を指摘しており、“この過程は生涯を通して反響し、決して終わることなく、常に活動している”，と乳幼児期の親子関係の重要性を説いている。この乳幼児期が健全な親子関係であった子どもたちは、成長する過程において両親に支えられながら自分自身の要求を、どのように満たしたらよいかを学んでいくのである。

そして、Kohut(1971,1977)も、子どもの健全な自己の発達には、養育者である親からの共感的な反応が重要であると述べている。つまり、健全な発達とは、母親からの共感的応答によって十分に満足させられるとともに、適度な欲求不満が与えられることである。そうすることによって親の機能が子どもの機能となり、子どもは外的な他者がいなくても、自己評価を安定させることができるのである。これが不十分であった場合は、主体である子どもの自己は、統一性と連続性を保つことができなくなる。このような自己は、わずかな傷つきやストレスにより断片化を起こすことになる。そして、彼らは誇大的・万能的な自

己愛を持つことになるのである。なお、親からあたえられなかった情緒的な共感性は、他者からの応答性で維持しようとするようになると説いている。また、Kernberg(1975)も、“子どもたちが早期幼児期に冷淡で共感性のない母親によって情緒的に飢餓の状態で養育された場合には、自己愛人格障害に繋がる”と同様の理論を提示している。

一方、Pressman & Pressman(岡堂 監訳,1994)は、この自己愛に障害をってしまう子どもたちが早期に学ぶことは「主として自分がすべきは、親の要求に合わせることであり」と述べている。それは彼らが親の情緒的な欲求を満たす責任を負わされたということである。そのうえ、子どもたちが分離独立への要求と情緒的満足への要求をすると、わがままか欠陥のように受け止められるのである。ゆえに、かれらは、生涯にわたって情緒の安定性を獲得するのが困難になることも容易に想像されるのである。

これら親の養育態度は、青年期においても自己愛傾向に影響を与え続けることが先行研究で示唆されている。

例えば、宮下(1991)の研究によると、女子では、受容的な母親の養育態度が自己愛的傾向を抑制し、男子では、父親の養育態度を支配的・介入的と認知するほど自己愛的傾向が助長されることが示されている。庄司・藤田(1999)も、青年自身からみた「子どもに対する親の期待」の研究で、子どもへの「同一化」が強い親ほど、子どもに対する「社会的評価」を自分自身の「社会的評価」として捉え、子どもに対して「社会的評価」を得ることを期待する傾向が強いことを報告している。すなわち、これは親が自分自身の自己愛的な欲求を、子どもによって満足させるという自己愛的な同一視であり、親の要求に応えることを子どもに期待することである(Pressman & Pressman,岡堂 監訳,1994)。その反対に、親の情緒的支持が高ければ高いほど、子どもは親が「人間的成長」や良好な「友人関係」を築くといった「自己実現」を望んでいると感じている(庄司・藤田, 1999)。

つまり、否定的な親の養育態度は、青年期になっても子どもが自分自身を肯定的に捉えられず、他者評価に依存的になることを助長しているのである。そのうえ、他者評価に依存的なものは、自己像が不確実となり、傷つきやすさの感情を持つようになるといわれる(Kernis et al., 2000)。

このように自己愛傾向と親の養育態度は密接な関係にあり、対人関係に問題を抱きやすいことが推測される。

1.4.4 自己愛と友人関係

中学生から高校生にかけては、両親や家族との関係に比べて、友人との関係が相対的に重要な位置を占めるようになる。すなわち、この時期におけるよい友人関係は、情緒の安定性や社会的スキルの獲得(松井,1990)に必要であり、さらに理想自己像のモデルとしての機能も果たしているといわれている(岡田,1987)。Blos(1962)も、青年期を親から精神的に離れ、自立し、個を確立していく時期であり、彼らの中では両親への無意識的な同一視が失われるときでもあると述べている。これにより不安定化した自己を安定させるために、親密な友人関係を求めていくことになる」と指摘している。

すなわち、彼らが、人格的共鳴や同一視をもたらすような深い友人関係を持つことや自分自身に対する関心(内省)が高まることによって、新たな自己概念が獲得され健康的な人格の成熟が促進されるのである(西平,1973,1990;岡田,1999)。それゆえに、人格的な共鳴のできる深い友人関係を渴望し、また、そのために厳しい友人の選択がなされるといわれている(西平,1973)。

だが、先に記したように、現代青年は自己中心的で自己愛的になっており、人と深く関わらないことが指摘されている(福島,1992;町沢,1998)。例えば、自己愛傾向者は、“互いに分かり合おうとする”ことより“みんなと一緒に”に“楽しく”つきあうような広い友人関係を持つことが報告されている(小塩,1998b)。さらに、栗原(1996)が、現代青年の友人関係は、自他を傷つけることやアイデンティティの問題を回避すること、友人を自分の内面に立ち入らせないこと、群れていることで安心感に支えられていることなど、ナルシシズム的で自己中心的な閉じられたやさしさによって特徴づけられると指摘している。つまり、自己愛的になった現代の若者は、“群れる”という表面的な友人関係を求めるのである。上野ら(1994)も、高校生の対人関係において「皆と一緒にだと安心」という項目に反応する“群れ志向”のものは、自己意識や自己愛が強く、身近な狭い世界を好むという傾向があるとしている。この群れる関係は、内面化の少ない遊び仲間としての浅い友人関係を示している。

Atwater(1992)は、青年期前期までの表面的・活動中心の友人関係が、青年期後期になると情緒的な親密さへ移行することを示唆している。しかしながら、近年、教育現場でも、高校生の友人関係は、児童期から中学時までの表面的な友人関係が、今では高校・大学の時期まで持ち越されているといわれている。

また、今の若者は、自己を客観視したり自他を比較したりすることなく、自分中心の生き方を普通であると思い込んでいる(諏訪,1998a,1998b)。そのうえ、彼らは、自分が特別であるはず、あらねばならないという自己中心的な自己愛の病理を持っているが、その一方で、対人関係において傷つきやすく、人との関わりが下手なために孤立する傾向のあることも指摘されている(大澤ら,1998)。

このように現代の若者の友人関係は、表面的な親密さや楽しさを求める傾向、関係が深まることを恐れる傾向、傷つくことを恐れる傾向などが共通して指摘されている。(岡田,1993; 上野ら,1994)。このような希薄な対人関係しか持てないことが、青年期における自己の発達を遅らせることになり、学校生活に対して適応的に慣れないことが予想されるのである。

1.4.5 高校生の自己愛と学校不適応

先に記したように、特徴的な対人関係を示す自己愛者にとって学校生活への適応は難しくなることが考えられる。福島(1989)によると“適応とは、人と環境との関係を示す概念”であり、“両者が調和した良い関係にある状態を「適応」といい、不幸にして環境と個人の間に関係が緊張や葛藤が生じている場合”が「不適応」あるいは「適応障害」という状態であるという。そして、高校生の適応感には、“学校生活に対する満足感や成績に対する満足によって規定されるところが大きい”ことが示唆されている(高木ら,1981)。

ところが、文部科学省(2001)が「学校生活に適応できない『不適応』といわれる生徒のなかには、不安や緊張などが主因であり、他には直接のきっかけとなるような事柄が見つからないものも増えている」ことを報告している。すなわち、不登校に至るには、さまざまな要因が複合的に関連していることが多いと考えられる。

その一方で、学校生活に満足感をもっている人は、「他者の気持ちを察したり、自分の感情や行動を統制したりして、良い人間関係を維持できるうえ、他者から承認されていると認識している」といわれている(河村,2003)。これらのことから、同じ学校環境にあっても、適応に対する感じ方には個人差があると考えられる。なぜならば、「適応感を規定するのは、環境と個人との主観的な関係である」と定義されているのである(谷井・上地,1994)。その意味で、学校生活への適応には、個人の側面(性格・健康面・学力など)が大きな影響を与えている

ことが考えられる。したがって、個人が自分をどのように価値づけ、どのように見ているかなどという自己評価の内容は、その人の行動や環境への適応に密接に関連すると考えられる。実際の臨床事例においても、学校生活で不適応を起こしている生徒が、自分への自尊心と自信喪失感をあわせもち、他人の前で恥をかくことを極端に恐れることが報告されている(高橋・伊藤,2003)。つまり、人前で恥をかくことは、彼らの自己愛が傷つくのであり、これが不適応を導き出しているといえるのである。これについて岡野(1998)が「自己愛者が自己評価を高揚させるような体験をして自己を『理想自己』へ同一化させた後、なんらかの失望や失敗をきっかけとして『恥ずべき自己』に転じる際に、恥や対人的な傷つきやすさがもたらされる。それゆえに、人からの批判を恐れ、対人関係から引きこもりがちとなる」と指摘している。また、中山・中谷(2006)も、自己愛者が自己評価を高め維持しようとする機能が活性化したとき、注目欲求を強めたり、反対に対人恐怖傾向を強めたりして、他者から距離を置くことで、自己評価を下げる可能性のある対人関係から遠ざかるようとすることを示唆している。このように自己愛者は、他者との関わりの難しさが、学校不適応へ移行する可能性を秘めているといえるのである。

その一方では、中学から高校にかけて自己の発達に関する現実的な問題が反映されて自己愛的な関心を増加させる傾向にある。この自己愛的な関心は、中学から高校へと増えていき高校3年でピークを迎えるといわれている。だが、この自己愛が高揚する時に、対人場面における危機への対処戦略として適応的な自己愛を持つことができる人と、適応的でない自己愛をもつ人が存在することが指摘されている(中山・中谷,2006)。以上のようなことから、対人場面において適応的ではない自己愛者は、学校生活で不適応に陥ることが予想される。

次はこの自己愛に関する実証的な先行研究について概観していくこととする。

1.5 自己愛の測定に関する先行研究の概観

自己愛(narcissism)に対する関心から理論的研究が進むなか、自己愛を実証的に捉えたいという試みが行われてきた。その最初は、Murray(1938)の質問紙(尺度)による測定である。その後、さまざまな測定法が登場してきたが、ここではその変遷について概観する。

1.5.1 自己愛の測定方法の変遷

(1) 投影法による測定

投影法を用いた自己愛の測定法としては、ロ - ルシャッハ・テスト、TAT (Thematic Apperception Test)、SCT (Sentence Completion Test)などがある。そして、Grayden(1958)、Harder(1979)、Young(1959)が TAT を、Exner(1969)、Harder(1979)、Urist(1977)がロ - ルシャッハ・テスト(Rorschach, 1923)を実施して自己愛を測定している。

例としては、Exner(1973)は、Exner(1969)における 50 項目の文章完成検査を、30 項目に構成しなおし、SFSC(Self Focus Sentence Completion)として、大学生と大学院生に実施している。彼は、自分への焦点化反応(*S*) - 反対の反応の場合(*Sn*) 外的世界への焦点化反応(*E*) - 反対の反応の場合(*Ea*) 相反する反応(*A*) 中立的反応(*O*)というカテゴリ - を設定し、被験者に評定させたところ、分類の一致度は高く、信頼性は得られたとしている。また、非臨床群(2592名)と臨床群(273名)を対象に、各カテゴリ - 得点の比較を検討しているが、非臨床群において、*S* 得点がかかなり大きい結果となり、SFSCは“自己中心性バランス(自己愛傾向)”を測定する尺度として妥当性があると報告している。また、Harder(1979)は、EMT(Early Memories Test; Mayman, 1974)、TAT、ロ - ルシャッハ・テストの3種類から野心的・自己愛的性格(Ambitious-Narcissistic character)の指標を捉える項目を探り、それらの妥当性・信頼性を検討した。彼は、先行研究などをもとに、それぞれのテストごとに野心的・自己愛的性格の構成要素を作成した。たとえば、EMTでは、「激しい活動」など8項目の指標、ロ - ルシャッハ・テストでは、「探求者、新しい領土を探求する人物」などの6項目の指標を得ている、また、TATは、ほとんど EMT に近い指標が得

られたとしている。結果として、各テスト間の相関は有意であり、野心的なほど EMT、TAT、ロ - ルシャッハの得点が高くなり、これら3種のテストによる野心的・自己愛的性格は十分に捉えられるとしている。

このように投影法を用いて自己愛を測定するという研究は、被験者の深層心理に焦点を当てたものであり、評価されるものであった。しかしながら、他国における先行研究の数も少ないうえ、日本における研究も少なく、追試や発展的な研究がなされていないのである。ゆえに、信頼性や妥当性が十分であるとは言い難いと思われる。

(2) 質問紙法による測定

1) Murray による先駆的な自己愛の測定

自己愛の理論的研究と平行して実証的な研究が行われてきたが、その最初に使われた尺度としては Murray(1938)の尺度であろう。Murray(1938)は、人格の変数として、顕在的要求を20変数、潜在的要求を8変数、内的因子を4変数に分類している。また、残り12変数を一般的なパ - ソナリティとして分類した。そして、自己愛は内的因子の一つに位置づけられている。彼における自己愛の定義とは、「形式はさまざまであるが、いずれにしても自己を愛することである」としている。その自己愛の直接的な現象として、自己耽溺、自己賞賛、自己憐憫、自体愛、優越感、誇大妄想、自己顕示性、注意・賞賛・名誉・援助・憐憫・感謝を無理に要求する、無視や軽視への恐怖感、過敏性、過度な内気さ、被害妄想などがある。また、間接的に表れる現象として、(1)冷酷な利己主義、利益追求、支配し威力を示したがる、全能的な誇大感、(2)対象軽視(無関心・軽視・搾取・嫌疑や憎悪・人嫌い)(3)自己中心性と投影性(全く個人的・主観的見地から世界を知覚し解釈すること)を挙げている。

Murray(1938)は、これらの定義や内容に沿って自己愛を測定する20項目からなる尺度を開発した。その項目例は「自分がどんなふうに見え、どんな印象を他人に与えるか、しばしば心配になる」「私は成功の名声を他人と分かつことを好まない」などである。これらの内容は、DSM- (APA,1994)の診断基準に類似した自己愛でもあるが、誇大的で自己中心的な自己愛と、抑制的で引きこもりがちな自己愛の2側面を表しているようにも思われる。

後に、この Murray(1938)の定義と内容を、他の研究者が自己愛研究の参考として用いて

いる。たとえば、わが国においては、細井(1978,1981,1984)が、Murray の人格変数から「自己愛 Narcissism」「顕示 Exhibition」「同一性 Sameness」「理想我 Ego Ideal」を取り上げ、自己愛を測定する 25 項目からなる尺度を作成した。さらに、この尺度を用いて、ナルシズム的傾向に関する発展的研究のなかで、成人期中期女性はナルシズム的傾向が強くなることを報告している。また、Hendin & Cheek(1997)が、Murray の尺度から 10 項目を取り上げ、過敏な自己愛尺度(Hypersensitive Narcissism scale : HSNS)を作成している。

2) 自己愛人格目録 (Narcissistic Personality Inventory : NPI) を用いた先行研究

自己愛人格目録(NPI)による自己愛の測定

Raskin & Hall(1979)は、DSM- (1980)における自己愛人格障害の診断基準の記述に従って正常人の人格特性ないし人格傾向をも含めた自己愛を測定するために自己愛人格目録 (Narcissistic Personality Inventory : NPI) を開発した。さらに、Raskin & Hall(1981)は、NPI の 80 項目を二者択一形式の Form A と Form B に分け、164 名の大学生に実施して信頼性と構成概念妥当性について検討を行っている。

その結果、Form A と B の間には高い相関があり、Form B と EPQ(Eysenck Personality Questionnaire,1967)の 4 つの下位尺度との相関もあり、NPI は信頼性と構成概念妥当性があると報告している。この尺度は、自己愛の測定でよく用いられるものであるが、全体として誇大性や優越感・有能感が強調されているように思われる。また、これは自己愛の健康さの側面に関連してと考えられる。

NPI と他の尺度との関連

Emmons(1981)は、NPI (Raskin & Hall,1979)と感覚探求 Sensation seeking との関連を検討し

た結果、「非抑制 disinhibition」,「経験探求 experience seeking」,「退屈への敏感さ boredom susceptibility」などとの正の有意な相関があり,十分な妥当性があると報告している。また, Emmons(1984)は, NPI の 80 項目から 54 項目を選択して因子分析を行い,「搾取・権威づけ Exploitativeness/Entitlement」,「指導力・権威 Leadership/Authority」,「優越・傲慢 Superiority/Arrogance」,「自己陶醉・自己賛美 Self-absorption/Self-admiration」という4因子構造からなることを見いだした。そして, NPI と EPPS(Edwards Personal Preference Schedule, Edwards, 1959), 16PF(Sixteen Personality Factor Questionnaire, Cattell et al., 1970)および EPI (Eysenck Personality Inventory, Eysenck & Eysenck, 1968)などとの関連や, NPI と自己変数の尺度との関連があることを示している。また, 自己愛に関する他者評定などとの関連から, NPI は十分に妥当性があることを示唆している。さらに, Emmons(1987)は, NPI の因子分析を追試しており, Emmons(1984)と同様の4因子を確認している。また, MCMI(Millon, 1987), NPD(Solomon, 1982), Selfish test(Phares & Erskine, 1984), SFSC(Exner, 1973)などと正の有意な相関が認められ, NPI の確かな妥当性が得られたと報告している。

Watson et al. (1984)は, NPI と共感性との関連を検討し,「搾取・権威づけ Exploitativeness/Entitlement」と負の有意な相関を得ており, NPI の妥当性を確認している。

Prifitera & Ryan(1984)は,精神病患者に NPI(Raskin & Hall, 1979)とミロン臨床的多軸目録 MCMI(Millon Clinical Multiaxial Inventory :Millon, 1987)を実施して,その関連を分析した。その結果として, NPI と MCMI の下位尺度の「非社会的 Asocial」「回避的 Avoidant」「服従的 依存的 Submissive-Dependent」とは負の有意な相関,「社交的 演技的 Gregarious-Histrionic」「自己愛的 Narcissism」「攻撃的 反社会的 Aggressive-Antisocial」とは正の有意な相関が示されたことから,臨床群においても NPI の妥当性が認められたと報告している。

Raskin & Terry(1988)は, NPI(Raskin & Hall, 1979)を主成分分析して「権威づけ identified of Authority」「自己顕示癖 Exhibitionism」「優越 Superiority」「虚栄心 Vanity」「搾取 Exploitativeness」「権威 Entitlement」「自己満足 Self – Sufficiency」の7成分を抽出した。また, NPI と CPI(California Psychological Inventory:Gough, 1956)との関連を検討している。その結果,「支配 Dominance」「社交性 Sociability」「社会的安定感 Social Presence」「社会的成就能力 Capacity for Status」と正の相関があり,「女性性 Femininity」「自己統制力 Self – Control」「寛容性 Tolerance」とは負の相関が示され, NPI の妥当性は確実のものであると報告している。

このように Raskin & Hall(1979)によって開発された NPI は、さまざまな研究者によって信頼性や妥当性の検討が行われ、自己愛を測る尺度として確立されたといえる。

3) その他の尺度を用いた先行研究

Minnesota Multiphasic Personality Inventory(MMPI)による自己愛の測定

Solomon(1982)は、MMPI(Graham,1977)の項目から“私は、自分の性生活に満足している”“私は、一つのことに集中することができない”などの19項目を抽出して自己愛人格障害の尺度(NPDS)を構成した。この尺度得点とテナシ - 自己概念尺度得点(Fitts,1965)と Profile Questionnaire の“愛情関係への満足な関わり”と“悪夢の頻度”などとの妥当性検討を行った。NPDS が高得点の学生は、病理的な自己概念を持ち、愛情関係への満足な関わりを欠いているという結果となった、さらに、悪夢をよく見るということであった。このようなことから Solomon(1982)の NPDS は、病理的な自己愛を測定しているといえる。

Raskin & Novacek(1989)は、MMPI の自己愛と Raskin & Hall(1979)の NPI(Narcissistic Personality Inventory)との関係を検討している。彼らによると、NPIは、MMPIの軽そう性(Ma)と正の相関があり、抑うつ性(D)、神経衰弱性(Pt)、社会的内向性(Si)、不安(A)、抑圧(R)、自己統制(Ec)とは負の相関があった。さらに、NPI の7つの構成概念が MMPI と関連があったと報告している。すなわち、MMPI によって自己愛の測定は可能であることを示唆している。

O'Brien Multiphasic Narcissism Inventory(OMNI)による自己愛の測定

O'Brien(1987,1988)は、病理的な自己愛を測定することを目的として、O'Brien 多面的自己愛目録を作成した。彼は、Miller(1981)の理論に基づき「有害な教育」「自己愛的に虐待

された人格」という概念を加味した 自己愛人格 有害な教育 自己愛的に虐待された人格という3因子で41項目からなる尺度を構成した。自己愛人格とは、未分化で搾取的な対人関係、権威主義、自己顕示性などを意味しており、有害な教育とは、他者の健康な自己愛の発達を非難したり、阻止したりすることで他人をコントロールしたいという無意識的な欲求を満足させようとするものである。自己愛的に虐待された人格とは、自己確認のために、他者からの承認を必要とするという他への帰属意識の問題を抱えており、自分自身の欲求より他者の欲求を重要視する傾向があることを意味している。この OMNI は、NPI や EPI などとの関連を分析したり、臨床群と正常群との比較・検討を行ったりした結果、十分に妥当性があったと報告されている。

Millon Clinical Multiaxial Inventory(MCMI)

Millon(1987)により作成されたミロン臨床多軸目録 MCMI は、臨床場面でよく用いられる尺度であり、そのなかには自己愛傾向を測定する尺度が含まれている。この尺度は 42 項目からなっており、誇大な自己像、対人関係上の搾取、認知的拡張、無頓着な気質、社会的な良心の欠如などの特徴を示している。

次に、日本における自己愛の測定に関する先行研究を展望していくこととする。

4) 日本における自己愛の測定に関する先行研究

自己愛人格目録(NPI)を用いた先行研究

a. 日本版 NPI(宮下・上地,1985)

宮下・上地(1985)は、Raskin & Hall(1979)が作成した NPI(Emmons,1984)の、比較的高い負荷量を有する 38 項目を選択し、翻訳した。なお、NPI は強制選択法をとっているが、正常

人のナルシズムを測定するという点を明確にするためには、その程度を問題にしたほうが適切と考えたために7段階評定の日本語版にして調査を行った。そして、項目分析を行い、十分な信頼性を有する35項目からなる日本版NPIを作成した。さらに、宮下・上地は、このNPIを用いて、自己愛の3群とMASの顕在不安・潜在不安(Taylor et al.,1943)及び欲求不満に対する防衛反応(Rosenzweig,1948)の差異について検討を行った。結果として自己愛高群が「潜在不安」及び「外罰的反応」の程度が高いことが見いだされた。

角田(1998)は、宮下・上地(1985)による日本版NPIと共感経験尺度改訂版(Empathic Experience Scale Revised : EESR,角田,1994)を用いて、共感性と自己愛傾向との関連を検討している。このNPIを因子分析した結果、「自己愛的欲求」、「自己愛的確信」という2因子が見いだされた。そして、EESRとNPIとは、共感を構成する共有機能と分離機能の一面的偏りと、自己愛的確信の偏りに関連があることが示された。また、これは共感性と自己愛についての明細化された関連であると報告している。

b. 自己愛人格目録(SNPI:佐方,1986)

佐方(1986)は、個人がどのくらい自己愛人格の特性や傾向を持っているかを測定する目的で、Raskin & Hall (1979)のNPI項目やDSM- (1980)における自己愛人格障害の診断記述およびMillon(1981)の自己愛人格(自己中心性パターン)を参考にして、自己愛人格目録(NPI)を開発した。このNPIの60項目は、項目分析や因子分析などを行った結果、「優越性・指導性・対人影響力」、「自己顕示・自己耽溺」、「自己有能性・自信」という3因子で42項目が見いだされた。さらに、NPIは、Y-G性格検査の「攻撃性」、「一般的活動性」、「支配性」、「社会的外向性」と正の相関が認められ、信頼性・妥当性ともに認められると報告している。

また、佐方(1987)は、NPIの併存的妥当性についてさらなる検証を目的として、Y-G性格検査、MPI(Maudsley Personality Inventory;Eysenck,1959)、MMPI (Minnesota Multiphasic Personality Inventory;Graham,1977)との関連を検討している。その結果、NPI総得点は、「気分の変動(C)」、「攻撃性(Ag)」、「一般的活動性(G)」、「のんきさ(R)」、「支配性(A)」、「社会的外向性(S)」と有意な正の相関があった。MPIとの有意な相関はなかったが、MMPIの「抑鬱症(D)」、「精神病質的偏奇(Pd)」、「神経衰弱(Pt)」、「社会的内向性(Si)」と負の有意な

相関、「偏執症(Pa)」「軽躁症(Ma)」とは正の相関が示された。ゆえに、佐方は、これはNPI尺度が測定しようとした自己愛人格傾向と一致する結果であり、その妥当性が十分に確認されたと報告している。

大平(1988)は、佐方(1986)の自己愛人格目録(NPI)の妥当性を検証するために、不安尺度(C.A.S.)との関連を検討している。そして、NPIを因子分析した結果、「優越感・有能感」、「自己宣伝」、「自己耽溺・魅力の幻想」、「利己的・一方的な権利の主張」、「他者からの評価への敏感さ」という5因子を見いだしている。また、NPI総得点と不安とは相関はなかったが、「優越感・有能感」と不安とは負の相関、「利己的・一方的な権利の主張」と不安とは正の相関があったことを報告している。

葛西(1989)は、佐方(1986)が作成したSNPI 42項目を使用して Narcissistic Personality と対人関係との関連を検討した。その結果、SNPIは、「優越性・指導性・対人影響力」「自己顕示・自己耽溺」「自己有能性・自信」の3因子が含まれていた。また、自己愛的人格と他者からの孤立とは、有意な正の相関があることを報告している。さらに、葛西(1990)は、Narcissistic Personality と対人態度との関連を分析している。この結果として、自己愛人格傾向の強い人は、男女とも他者と対立したり、他者を排除したり、防衛的に孤立する傾向があることと、女子では他者に同調したり、依存する傾向が認められることを示唆している。

細木・板垣(1990)は、佐方(1986)が作成した自己愛人格目録(Narcissistic Personality Inventory: SNPI)の42項目を用いて、自己愛人格と自我機能との関連を検討している。このSNPIを因子分析した結果、「優越性・指導性・対人影響力」「自己顕示的・自己耽溺」「ユニークさの強調・競争的意識」という3因子が見いだされた。さらに、男子の場合に、自己愛は、自我機能の低下と関連することが報告されている。

c. 日本版 NPI(大石,1987)

大石ら(1987)は、Raskin & Hall (1979)のNPIを翻訳して、日本版 NPI (54項目)を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。男女とも4因子が抽出されたが、男子では「リーダーシップ・自己主張」、「身体賞賛・没頭」、「自己有能感」、「顕示性」、女子では「リーダーシップ・自己主張」、「自己確信」、「顕示性」、「優越性」と因子構造が異なる結果となった。そして、大石(1987)は、YG性格検査(矢田部ら,1951)を用いて日本版 NPIの信頼性・妥当性の

検討を行っている。その結果、NPI 得点は、男女ともほぼ同じで差異がなかった。全体的には、「攻撃性」、「一般的活動性」、「のんきさ」、「支配性」、「社会的外向」とは正の相関、「劣等感」とは負の相関が示されたことを報告している。その後、大石(1988)は、CMI(Cornell Medical Index)とMMPIとの関連も検討している。それによるとCMI下位尺度の「筋肉骨格系」、「不適応」、「怒り」といずれも有意な負の相関を示した。MMPIとは、「妥当性」、「抑鬱」、「性度」、「社会的内向性」、「抑圧」とは負の相関、「軽そう性」、「自我強度」、「支配性」、「社会的地位」とは正の相関があることが示されたと報告している。そのうえ、大石(1989)は、共感性との関連を検討しており、共感性とは、ある程度の負の相関があることを見いだしている。しかしながら、このNPI尺度は、抽出された因子構造において、因子数の違いや男女によって因子構造が異なるなど安定した尺度とは言い難いと考えられる。

d. 自己愛人格目録(NPI:三船・氏原,1991)

三船・氏原(1991)は、Raskin & Hall(1979)によって開発されたNPIを用いて、大学生の自己愛と自己拡散との関連を検討している。その結果、NPIから6因子が抽出され、「鏡映的願望」、「リ-ダ-シップ」、「有能感」、「野心」、「優越性」、「感受性」と名づけている。また、自己拡散的になると自己愛的になるということを実証的に明らかにしている。

e. NPI 短縮版(NPI-S:小塩,1998a)

小塩(1998a)は、大石ら(1987)が作成した54項目から30項目を選択し、表現を平易なものに改めてNPI短縮版(Narcissistic Personality Inventory-Short Version: NPI-S)を構成した。因子分析の結果、3因子30項目を抽出し「優越感・有能感」、「注目・賞賛欲求」、「自己主張性」と命名し、再検査を経て信頼性が得られたとしている。さらに、NPI(大石,1987)とS-NPI(佐方,1986)を用いて妥当性の検討を行っている。その結果、NPI-S総得点とNPI総得点およびSNPI総得点とは有意な正の相関を示していた。ゆえに、NPI短縮版は、NPIの特性を保ち、SNPIに対応した意味内容を有しているので、十分な妥当性があると報告している。また、小塩(1998b,1999,2000,2001)は、NPI-S下位尺度の「注目・賞賛欲求」の高い者

は、他者の自分自身に対する評価に非常に敏感であることを報告している。さらに、自己像の不安定性や自尊感情の変動性とは、ある程度の有意な関連があることも報告している。

以上のように日本においても自己愛人格を測定する尺度として日本版NPIが多くの研究者によって構成されている(三船・氏原,1991; 宮下・上地,1985;大石,1987; 小塩,1998a;佐方,1986)。それは DSM- の診断基準に準拠していると思われるが、その下位尺度においては、必ずしも同一の意味や内容を評価しているとは捉えにくいのである。

一方、近年は、自己愛の障害には、自己のまとまりの弱化とか傷つきやすさなどが重要な問題として取り上げられるようになってきた(上地・宮下,1992)。そこで、次は2種類の自己愛についての先行研究を展望していきたい。

自己愛の2類型に関する先行研究

近年は、共通の病理を根底に持ちながら相反する特徴を示している過敏型と無関心型(Gabbard,1989)という自己愛の両側面に関する研究が行われている。

例えば、海外における先行研究では、Wink(1991)が、MMPI に基づく6種類の自己愛尺度の主成分分析から「脆弱性 - 感性」と「誇大性 - 自己顕示性」という2成分を抽出している。この2つの下位尺度とCPI(California Psychological Inventory;Gough,1956,1957,1978)、ACL(Adjective Check List; Gough & Heilbrun,1983)、CAQ(California Q-set; Block,1961)との関係を検討した結果、「脆弱性 - 感性」は、内向性、自己防衛、不安、傷つきやすさと関連があり、「誇大性 - 自己顕示性」は、外向性、自己顕示性、攻撃性と関連があったと報告されている。また、Hibbard(1992)も、複数の自己愛尺度の因子分析から、誇大的なタイプと脆弱なタイプの自己愛を見いだしている。

a. ナルシシズム尺度(高橋,1998)

わが国では、高橋(1998)が、Gabbard(1989)における2種類の自己愛を測定するため、2つの下位尺度からなるナルシシズム尺度の構成を試みた。その結果、「周囲を気にかけないナルシシズム」と「周囲を気にするナルシシズム」という2因子25項目からなる2側面の

自己愛を測定できる尺度を作成した。この尺度は一貫した構成概念を扱っていないという指摘もあるが「周囲を気にかけないナルシズム」は、誇大性や注目欲求などの内容を含んでおり、「誇大型」の自己愛に相当する内容であると思われる。また、「周囲を気にするナルシズム」は、対人恐怖心性や自己主張の弱さなどを含んでおり、「過敏型」の自己愛の内容であるといえる。しかしながら、Gabbard による「過敏型」の中心特性である「他者によって自己価値・自己評価を低められるような証拠がないことを確認することによって自己評価を肯定的に維持しようとする」ことが含まれていないように思われる。

b. 自己愛的人格尺度(相澤,2002)

相澤(2002)は、NPI(Raskin &Hall,1979)、Murray(1938,外林訳,1961)の Personality Inventory の自己愛項目、OMNI(O'Brien,1987)、Mullins & Kopelman(1988)の自己愛項目、高橋芳(1998)のナルシズム的人格尺度などから収集して「誇大特性」と「過敏特性」という2タイプの自己愛的人格を測定する尺度を作成した。これを因子分析した結果、「対人過敏」「対人消極性」「自己誇大感」「自己萎縮感」「賞賛願望」「権威的操作」「自己愛的憤怒」という7因子が抽出された。さらに、自己愛的人格項目群の下位尺度と YG 性格検査との関係を検討した結果、これらの下位尺度は、誇大特性と過敏特性を含む包括的な自己愛人格を評価するものとして十分な妥当性があると報告している。

この尺度における「過敏型」の自己愛を持つ青年は、対人場面で対人恐怖傾向が高まることが測定できる尺度であり、自己愛と対人恐怖傾向との関連を示すものである。

c. 自己愛人格目録短縮版(NPI-S：小塩,2002)

小塩(2002)は、大学生を対象に、自己愛人格目録短縮版(NPI-S)、対人恐怖尺度(内田,1995)、攻撃行動(秦,1990)、個人志向性・社会志向性(伊藤,1993)、精神的健康調査票GHQ(General Health Questionnaire;中川・大坊,1985)を実施した。そして、NPI-S 下位尺度を主成分分析し、第一主成分の自己愛傾向全体の高低と、第2主成分の「注目・賞賛欲求」が優位な群、「自己主張性」が優位な群に分類した、この主成分得点の高低の4群と友人によるイメージ評

定の検討を行った。その結果、自己愛傾向が全体的に高い群を、2種類の自己愛(無関心型・過敏型, Gabbard, 1989)に類似した特徴を示す2群に分類可能なことを報告している。

清水・海原(2002)は、小塩(1998a)の自己愛人格目録短縮版(NPI-S)を用いて対人恐怖心性との関連を検討している。その結果、対人恐怖心性と自己愛傾向には4つのサブタイプがあり、第1は「純粋な」対人恐怖であり、第2には「過敏型」自己愛人格であり、第3は「ふれあい恐怖心性」に類似したものであり、第4には、「無関心型」自己愛人格であることが見いだされ、自己愛の高まりが対人恐怖心性を増大させることが示されたと報告している。

d. 自己愛的脆弱性尺度(上地・宮下, 2005)

上地・宮下(2005)は、Kohutの自己心理学理論から、他者からの承認・賞賛への過敏さ 潜在的特権意識とそれによる傷つき 恥傾向と自己顕示の抑制 自己緩和能力の不全 目的感の希薄さという指標に基づき自己愛的脆弱性という尺度を開発した。その結果、「目的感の希薄さ」、「承認・賞賛への過敏さ」、「自己顕示抑制」、「自己緩和不全」、「潜在的特権意識」という5因子の40項目が見いだされた。

さらに、ナルシズム尺度(高橋, 1998)、GHQ 精神健康調査票(中川, 大坊, 1985)との関連を検討した結果、ナルシズム尺度とは正の相関を示し、また、臨床群は健常群よりも有意に得点が高いことが示された。そこで、この尺度は自己愛的脆弱性を測定するのに十分な妥当性があるものと判断したと述べている。

この尺度においては、臨床群が健常群より不安またはうつ傾向が有意に高いことが示されており、いずれも対人場面での不安や傷つき、自己嫌悪などに関連するものであるから、臨床群のスクリーニングにも用いることができるとされる、また、自己愛障害の軽度から中程度を測定できる尺度として十分に信頼性と妥当性があるといえる。

e. 評価過敏性 - 誇大性自己愛尺度(中山・中谷, 2006)

中山・中谷(2006)は、高橋(1998)の自己愛的に傷つきやすいタイプと小塩(1998a)と相澤(2002)から誇大性・注目欲求の項目、対人恐怖傾向尺度(田中ら, 1994, 相澤, 1997)から対人恐

怖の項目を収集して自己愛を測定する尺度を構成した。これらを因子分析した結果、2因子18項目の評価過敏性-誇大性自己愛尺度を開発した。さらに、作成された尺度を用いて中学生から大学生を対象として、「誇大型」自己愛と「過敏型」自己愛に分類した群について、各尺度得点パターンや精神的健康度(GHQ;中川・大坊,1985)との関連から捉えられる特徴を検討している。その結果、全体として中学から高校にかけて自己愛は高揚し、高校3年生でピークを迎えることが示された。また、自己愛とGHQ得点との関係から、青年期の自己愛が適応と関連していることが示唆されたといえよう。

1.5.2 自己愛測定の変遷のまとめと本論文で扱う尺度

自己愛の障害についてDSM-の診断基準では、支配的で攻撃的、自己顕示的で社会的、他者に対しては搾取的で敵意を持つという特徴が示されている。そして、先行研究では、この自己愛を測定するためさまざまな尺度が作成されてきた。

まず、初期にはGrayden(1958)、Harder(1979)、Young(1959)がTATを、Exner(1969)、Harder(1979)、Urist(1977)がロールシャッハなどの投影法を用いた測定法がある。次には先駆的なMurray(1938)の測定法があり、このMurrayの定義に基づいた細井(1978,1981,1987)、Hendin & Cheek(1997)の測定法がある。また、DSM- (APA,1980)の診断尺度を反映したものとしては、NPI(Emmons,1984;Raskin & Hall,1979;Raskin & Terry,1988; Watson et al.,1984)、MMPIに基づく自己愛測定尺度(Raskin & Novacek, 1989)などがある。その他、各研究者による独自の自己愛の概念に基づく尺度として、MMPIに基づく尺度としてのNPDS(Solomon, 1982)、MCMIに基づく尺度(Millon,1987)、OMNI(O'Brien,1987,1988)などがある。さらに、我が国において作成された日本版NPI尺度(三船・氏原,1991;宮下・上地,1985;大石,1987;小塩,1998a;佐方,1986)を挙げることができる。また、近年は、共通の病理を含みながら相反する特徴を示す2類型の自己愛による測定尺度(相澤,2002;上地・宮下,2005;中山・中谷,2006;小塩,2002;高橋,1998)などを挙げることができる。

そして現在、最も一般的に用いられている自己愛の定義は、DSM- (APA,1980)やDSM- (APA,1994)の記述である。これを反映しているのは、NPI(Raskin & Hall,1979)やその日本版(大石,1987;小塩,1998a;宮下・上地,1985;佐方,1986)であり、国内外においても自己愛

の測定尺度としてよく用いられている。しかしながら、これらの尺度は、誇大性や優越性が強調されているように思われる。例えば、小塩(2002)の NPI 短縮版下位尺度の「注目・賞賛欲求」も「過敏型」に近い部分があるといわれるが、対人恐怖心性と負の相関が報告されている(清水・海塚,2002)。したがって、これら NPI 尺度は、自己愛の肯定的な側面を測るものであると理解された。

一方、2類型の自己愛は、他者からの賞賛や承認への過敏さを持つことから、対人関係において自己愛の傷付きを体験し、不安や抑うつに陥りやすいことが測定できるといわれている。そして、本論文と同様に、Kohut の自己心理学に基づく Robbins & Patton(1985)の尺度は「優越性 Superiority」「目標不安定 Goal Instability」という下位尺度で構成され、Lapan & Patton(1986)の尺度は、「偽自律性 Pseudo autonomy」「仲間集団依存 Peer-Group Dependence」という下位尺度で構成されており、誇大自己と理想化という側面から自己愛を捉えようとしている。ところが、これらの尺度も NPI と正の相関を示すことが認められており、「優越性」の高得点者が自己評価や目標追求で肯定的な印象を受けるなど、NPI と同様に肯定的な側面も見せている。これと同様に、上地・宮下(2005)が、Kohut 理論に基づいた自己愛的脆弱性尺度を作成している。この尺度は、高橋(1998)の「過敏性・脆弱性」とは有意な正の相関を示しているが、「誇大性・顕示性」との相関の値は低いことから、Kohut の自己愛的な脆弱性を測定することができる尺度であるといえよう。

しかしながら、本論文では Kohut 理論における誇大的で傍若無人に振る舞っているが、外的対象からの拒否的・無視的な態度に出会った場合に恥が憤怒として表出し、これが傷つきに繋がる自己愛と、自己愛の傷付きを恐れ、むしろ対人関係から回避するという過敏な自己愛を捉えたいと考えている。以上のようなことから、先行研究における NPI や 2 類型の自己愛を測定できる尺度では、本論文の高校生における誇大性を伴う過敏で傷つきやすい自己愛傾向の側面を捉えることには困難さがあると思われる。ゆえに、本論文では、高校生の自己愛の特徴を測定するため Kohut 理論に基づいた尺度を構成するものとする。

第2章

本論文における問題意識と全体的目的

ここまで、自己愛の理論的および実証的な先行研究について概観してきた。次は、これらの先行研究をふまえたうえで、本論文における問題意識と全体的な目的を示していく。

2.1 本論文の問題意識

2.1.1 自己愛の下位分類の視点から

臨床的な立場で自己愛の理論が展開されるとき、自己愛の下位側面の分類が挙げられる。それは、自己愛のどのような側面が適応的であるのか、不適応的であるのかという分類(Pulver,1970)や、誇大的で自己中心的な自己愛と引きこもりがちで過敏な自己愛(Broucek, 1982;Gabbard,1989,1994;Rosenfeld,1987)などという視点で分類されている。ところが、自己愛を下位分類した側面が、青年期に陥りやすい状態とどのように関連するかは明らかにされていない。そこで、本論文では、青年期中期にあたる高校生の自己中心的で、誇大的な自己愛と対人恐怖的で傷つきやすく他人の視線に過敏な自己愛に注目して検討する。

その理由として、第一には、近年よく問題にされる対人恐怖、不登校、アパシ - などは、「過敏型」の自己愛と関連すると報告されている(岡野,1998;笠原,1984;下山,1992;鑪,2003)ことが挙げられる。

第二には、自己愛は、比較的に対人関係で適応的なものと対人関係で不適応を起こしやすいものがある(小塩,1999;町沢,1998)といわれていることがある。それは誇大的で自己顕示的な自己愛である「無関心型」の自己愛は、他者によらず、自己価値、自己評価を肯定的に維持する機能を持つことで適応的といわれ、過敏で脆弱な自己愛である「過敏型」の自

己愛は、他者によって承認されることで自己価値や自己評価を維持しようとすることから不適応に陥りやすいと報告されている(中山・中谷,2006)。これは、両方の自己愛ともに心の奥に誇大的な自己顕示性を秘めており、共通の病理である自己評価を維持するために闘っているのであるが、その対処の仕方はかなり異なっているといわれている(Gabbard,1994, 館監訳,1997)。

しかし、青年期に学校不適応となりやすい自己愛の状態は、これらのどの自己愛を意味するのかは明らかにされていない。それゆえに青年期のただ中にある高校生の自己愛が、彼らにとってどのような意味をもつのかを検討することは、学校不適応を理解するうえでも重要であると思われる。このためには Kohut のモデルにしたがって、理論を展開する必要があるといえよう。

2.1.2 自己愛の発達と親子関係の視点から

自己愛は、乳児期初期から発達しはじめるといわれる。この時期の自己愛は、自己と外界の区別が分化していない状態で、Freud(1914, 懸田・吉村訳,1969)のいう対象のない「一次的自己愛 primary narcissism」である。

その後、乳幼児期(生後2年目)になると、自己の価値、能力、達成、興味などの誇大性を確認し賞賛してもらう体験を必要とする(Kohut,1971,1977)。そして、子どもが自己の誇大性を十分に確認し賞賛してもらうと、彼らの自己愛的な誇大性は鎮まり、健全な野心や自尊心が生まれてくる。さらに、こどもは、父親の力強さや平静さを理想化し、この理想化された対象と一体化したい欲求が生まれる。これが親から満たされることで自己の発達がなされるという。つまり、幼少期に理想的な自己対象である親から不安、苦痛、感情などを鎮めてもらう体験を繰り返すうちに自己の統合が保たれる機能が形成され、心的平衡を維持できるようになる。ところが、このような発達過程が阻害されると堅固な心的構造が形成されず、自己は自尊感情を傷つけられるような出来事や他人の承認、賞賛、導きを得られないことで不調和を起こして、いつまでも理想的な他者を追い求めるのである。このように Kohut(1971,1977)は、早期乳幼児期における自己対象との関係に問題が生じた場合、幼児の自己は損傷を受け、自己愛の障害が生じると論じている。また、Kernberg(1975)も、母親との情緒的關係がほとんどない状態で養育された場合には、強い愛情飢餓やそれ

に関連する攻撃性や羨望を否認するために自己愛人格障害になると論じている。

しかしながら、最近では、乳幼児期の母子密着が強いことから、乳幼児期の誇大性が未熟なままで鎮静化されることなく成長しているために、自己の限界を知らない自己愛的な青年が増加していることが指摘される(町沢,1998)。

また、思春期・青年期における重要な課題は、親から精神的に分離し自立をすることであるが、それは親からの受身的対象愛が満たされなくなる時でもあり、新たな他者との関係を構築しなければならないことを意味している。これには自己愛(Narcissism)が重要な役割を果たすといわれている。すなわち、父母に向いていた心的エネルギーが自己へ向かうようになることで、同性の友人や意味ある他者、集団との同一化が図れるようになり、新たな対象関係を築けるといっているのである(小此木・平島,1998)。

その反面、青年期には正常な発達過程においてよく経験されるといわれる人見知りや過度の気遣い、対人関係での緊張など対人恐怖的な傾向が認められることも知られている(清水・海塚,2002)。これについて北西(1998)が、対人恐怖に苦しむ人たちは、過剰な自己意識ゆえに鋭く悩み、自己に執着するのであると述べている。すなわち、青年期には、自己意識が高まることなどが自己愛傾向を助長する一方で、そこからくる対人恐怖的な傾向に苦しむことになると考えられる。そのうえ、この時期には、対人関係の問題だけでなく、身体的な変化の個人差も著しいことや学業における分野でも、他者からの評価を受ける機会が多いことから、“自己評価を維持する機能”としての自己愛も青年期の課題と関連して大きく変化することが考えられる。このように青年期には、親子関係が変化することに伴い自己愛的な関心が高まる時期であるといえる。

以上のことから、自己愛に関する研究を行うのに青年期のただ中にある高校生と親の養育態度に注目するのは有用であるといえよう。そこで本論文では、高校生を調査対象として自己愛傾向と親子関係がどのように関連するのかを検討するものである。

2.1.3 学校生活への適応における視点から

環境に対する「適応感」とは「個人が自己を良い状態であると意識していることで、生活における安定感、充実感、生き甲斐感などを意味する」といわれている(加藤ら,1981)。

一方、生徒が「学校生活に適応している」というのは、そのなかで満足感や充実感をも

ち、意欲的に集団活動に参加できることである。そのためには、他者からの受容や承認があること、友人から耐えられない悪ふざけを受けたり無視されたりするなどの侵害行為がないことが挙げられる(河村,1999b)。また、この学校内での承認感を高めたりすることや、被侵害感を得るような事態を回避するためには、友人の気持ちを察して既存の関係を維持しながら、仲間や集団に対して相互的なかわりをもつという“より成熟したつき合い”をすることが重要であるといわれる(河村・田上,1997)。

では、青年期の自己愛と適応とは、どのような関連をするのだろうか。先行研究では、NPIで測定された自己愛と適応の指標となる自尊感情との間に正の相関があることが示唆されている(Emmons,1984; 小塩,1997,1998b)。すなわち、NPIで扱われるような「誇大型」の自己愛の高さが適応と積極的な関連をもつと考えられるのである(小塩,2002; 中山・中谷,2006)。これについて中山・中谷(2006)が、「誇大型」の自己愛はもっとも適応性があり、「誇大型」と「過敏型」の両方を含む「混合型」の自己愛は、これよりも適応性が低く、「過敏型」の自己愛は、最も適応性が低いことを明らかにしている。なお、この「過敏型」の自己愛の適応性が低いのは、他者評価に対して過度に依存しているため自意識過剰となり、かえって自己評価を低める可能性があると指摘している。

しかしながら、他者からみて適応的で問題がないとみられている場合でも、問題行動を示していないだけで主観的に不適応を感じている可能性があることも報告されている(石川ら,2003)。すなわち、毎日登校し適応していると思われる生徒のなかに、学校忌避感情(回避感情)を秘めている不登校潜在群(グレーゾーン)が幅広く存在しているというのである。これについて森田(1991)は「登校への忌避感情(回避感情)」は「不登校への傾斜」の過程であると指摘している。また、不登校生徒の性格傾向である非社会的、非協調的、神経質傾向の強さなどの特徴と学校忌避感情(回避感情)との関連も示唆されている(古市,1991)。また、登校拒否願望を持つ生徒は、親しい友人が少ない、対人関係が狭い、他人への不信感が強い(池田ら,1983)などという対人問題も、自己愛者の特徴に似ているといえよう。このような不適応と共通するものとして Gabbard (1989)が、回避 - ひきこもりと自己愛パ - ソナリティとの間で、ある種の力動的な関連性があることを指摘している。

以上のように自己愛と適応が関連することが明らかになっているが、2類型の自己愛では、適応に対する感じかたに違いがあるように思われる。これについて Gabbard(1989,1994)が「誇大型の自己愛は、他者によって傷つけられたと感じることに鈍感であり、過敏型の自己愛は、容易に傷つけられたという感情をもつという特徴がある」ことを示唆している。

このことから考えると、「傷つきやすさ」の違いが周囲に対する適応への感じかたの相違を生むことになると推測される。この点からも2種類の自己愛が、青年期の自己愛と適応との関連を理解するのに有用であるといえるのである。

2.1.4 研究方法

従来から、自己愛人格障害を研究するのに、NPIを使用した調査方法が行われてきた。このNPIによって測定される自己愛は、いくつかの下位側面で構成される人格特性が見いだされている。

たとえば、日本におけるいくつかの先行研究では、自己有能感や優越感などの自己に対する肯定的感覚の側面と、自己顕示性や自己耽溺など他者に対して自分を見せびらかし、注目されたいことを意味する側面が共通して見いだされている。これらの下位側面は、Kernbergによって論じられる誇大的な自己像である自己愛を測定できるものと思われる。これに対して、Kohutによって論じられる自己愛障害とは、注目を浴びることや自己顕示をする場面に遭遇すると、強い恥意識が生じるために自己顕示を抑制しがちになったり、他者からの特別の配慮や敬意を持って接してくれることを期待し、それが満たされないときには自己愛的な憤怒が生まれたりするなどの対人関係で過敏さを示す特徴がある。なお、日本における臨床例は、過敏型に近い事例が多い(福井,1998)、教育現場における事例研究でも、過敏型の自己愛に近い事例が報告されている(高橋・伊藤,2003)。

以上のことから考えると Kohut の論じる過敏性に焦点を当てることは有意義なことと思われる。しかしながら、Kohut 理論に基づく自己愛傾向の研究は、ほとんどみられないのである。

この理論に近い先行研究における自己愛の特徴としては、心に秘めた自己顕示欲求を持っていることに対する強い恥を感じていることなどが報告されている(Gabbard,1994)。また、対人関係での不安や傷つき、自己嫌悪などとの関連やうつ傾向との関連も報告されている(上地・宮下,2005)が、本研究の誇大性を伴う過敏で傷つきやすさを測定するにはそぐわないと考えられる。ゆえに、Kohut 理論に基づいた自己愛尺度を再構成して、高校生用の自己愛尺度を作成する。この尺度を用いて高校生の自己愛傾向と学校生活への適応との関連要因について研究していくものである。

この自己における心理的機能の不安定さを測定する尺度を構成するときのデータ収集は、一般的な高校生から客観的で、現実的な行動としての自己愛を自己評定で実施させるようにする。そのうえで、高校生の自己愛傾向と他の関連要因を実証的に検討するものである。なお、本調査を実施する際に、コンピュータ処理を行うことと研究以外の目的には利用しないので、調査対象者には後々迷惑をかけることはないというインフォ・ムドコンセントを実施して行いたいと考えている。

2.2 本論文の全体的な目的

先に記した問題を意識しながら、本論文では、高校生を対象として青年期中期における自己愛の構造を分析し、学校不適応との関連を検討することが全体的な目的である。そのために以下の3項目の課題を設定して検討するものである。

(1) 本論文で問題にする自己愛障害の中核的指標は、自然な自己顕示性を表出できないことであり、傷つきやすさを伴うものである。そのために、Kohut(1971,1977)の自己心理学に基づいて作成された2種類の自己愛尺度(大学生用)を、高校生を対象とした傷つきやすさを含んだ過敏なタイプの自己愛傾向尺度に再構成しなおし、見いだされた下位尺度の側面を反映する尺度を作成する、そして、この自己愛傾向尺度と他の尺度との関連を検討し、信頼性と妥当性の基礎的検討を行い、自己愛傾向尺度の下位側面の諸特徴を明らかにすることである。

(2) 自己愛傾向は、他者からの評価を強く欲しており、これが学校生活への適応にも大きな影響を与える可能性があることを検討する。また、学校忌避感情が自己愛傾向と基本的な信頼感に対してどのような影響を及ぼしているのかを検討することで、自己愛傾向者の自己および他者との関係について明らかにできると思われる。すなわち、学校生活では、環境への適応感を得るための関連要因が多く存在するが、その要因の一つである性格傾向の諸特徴はどのような影響を及ぼすのかを検討するものである。

(3) 自己愛傾向と親子関係、学校生活への適応の関連を検討する。Kernberg,(1975)や Kohut

(1971,1977)は、こどもが母親との情緒的關係がほとんどない状態で養育された場合は、自己愛に障害がおきることを指摘している。そのうえ、宮下(1991)も、親の受容的な養育態度が自己愛傾向を抑制することを示している。一方、鈴木ら(1995)は、高校1年生で中途退学する生徒は、親や教師などサポート源を持たないため学校においてストレス反応を起こしやすいことを指摘している。そこで、自己愛傾向と親の養育態度との關係が、学校生活への適応に対してどのような影響を及ぼしているのかを検討するものである。

第3章

本論文における自己愛傾向尺度の作成

現在、自己愛を測定する尺度としては、NPI (Raskin & Hall, 1979) やその日本版(大石, 1987; 小塩, 1998a; 宮下・上地, 1985; 佐方, 1986) がよく用いられる。これらの尺度は、DSM- で診断される自己愛人格障害を測定するには有用であると思われる。しかし、Kohut (1971, 1977) 理論では、自己愛的な要求や自己への誇示を強くもち、共感性欠如がある自己愛と、軽蔑への過敏さや抑うつ傾向、自発性の乏しさ、心気傾向を特徴とする自己愛を挙げており、両タイプの患者を自己愛人格障害として扱っている。すなわち、Kohut の唱える自己愛者は、自己の成熟が小さいことや弱々しく傷ついた自己を抱えていることを隠すため、自己への誇示を表す人々であり、他人のことを考える余裕のない人であると考えられる。

そして、人は成長する過程で、常に周囲からの評価によって自分自身を確かめながら成長している。このように考えると、成長期にある高校生にとって外的な評価を自分自身の評価として捉える機会が多いと思われる。また、先に記したように自我の確立という重要な時期であり、自分への信頼感も揺れ動くことになる。つまり、彼らは、自分で思っている理想自己像と現実的な自己像にずれを感じているので、他者評価を受けなければいけない場面に出会うと自己イメージが揺れることになるのである。ゆえに、自己愛的となり傷つきやすくなる。このように高校生にとって外的自己と内的自己とのギャップは、対人関係での傷つきにつながり、他者とのかわりを避けることになることが予想される。それゆえに、高校生の秘めた誇大性を伴い、過敏で傷つきやすい自己愛傾向を測定するには、NPI やその日本版ではそぐわないと考えられた。

そこで本章では、Kohut 理論に基づく自己愛の尺度を再構成し、その信頼性および妥当性の検討を試みることにする。

3.1 自己愛傾向の尺度の作成

3.1.1 目的

本章では、自然に表出できない自己顕示性を秘める誇大的な自己愛と過敏で傷つきやすい自己愛の2側面を測定できる尺度を作成することである。

3.1.2 自己の障害目録についての信頼性の再検討（研究1）

(1) 目的

鈴木(1999)は、Kohut(1971,1977)の唱える自己愛の傷つきを恐れ、対人関係から引きこもるという「自己愛的パーソナリティ障害」と、誇大的で共感能力に欠け、傍若無人な態度をとる「自己愛的行動障害」を測定しうる質問紙を作成した。これらの項目は、「自己愛的パーソナリティ障害」については、DSM- の「回避性人格障害」診断基準、Gabbard(1989)の「過敏型」の自己愛、O'Brien Multiphasic Narcissism Inventory(OMNI,1987)から「自己愛的に虐待された人格」の項目内容を選択し、また、「自己愛的行動障害」については、DSM- の「自己愛性人格障害」の診断基準、Gabbard の「無関心型」の自己愛、タイプA人格障害の特徴、NPI(Emmons,1984)尺度の特徴、O'Brien Multiphasic Narcissism Inventory(OMNI)から「有害な教育」の項目内容を参考に構成された。そして、構成された尺度は、自尊感情尺度(山本ら,1982)および情動的共感性尺度(加藤・高木,1980)を、同時に施行して構成概念妥当性の検討を行った。その結果、「対人恐怖心性」「回避性傾向」「自己愛的憤怒」の3因子パターン42項目で自己の障害目録が作成された。しかし、この尺度については、大学生用であることと、追試や発展的研究が行われておらず、十分に熟成しているとは言い難いものであった。そこで、他のNPIとの間にどのような関連があるかということと本尺度の信頼性について調査することを目的として高校生に施行し検討を行うこととする。

(2)方法

1) 調査対象及び調査時期

愛知県内の公立高校1年生336名(男子142名,女子194名)に授業時間を利用して2002年4月に実施した。本調査はコンピュータ処理を行い,研究以外には使用しないので,調査対象者には後々迷惑がかかることはないことを説明して実施された。

2) 測定尺度

自己の障害目録

鈴木(1999)の自己愛についての尺度, 自己顕示性と回避性の間を往復する不安定な自己の障害を表す「対人恐怖心性」, 回避性人格障害の冷淡な側面に焦点を当てる「回避性傾向」, 自己愛が満身に承認されないときの怒りを表す「自己愛的憤怒」の42項目3因子からなる自己の障害目録を使用した。本尺度の回答形式は,「まったく当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらともいえない」「だいたい当てはまる」「よく当てはまる」までの五件法で実施された。

自己愛人格目録短縮版(NPI-S;小塩,1998a)

自己の障害目録の特徴を探るために,小塩(1998a)によって作成された自己愛人格目録短縮版(NPI-S)の「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」の3因子30項目からなる尺度を使用した。本尺度の回答形式は,「まったく当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらともいえない」「だいたい当てはまる」「よく当てはまる」までの五件法で実施された。

(3)結果

自己の障害目録の因子分析

信頼性を高めるために、自己の障害目録の 42 項目を総点の中央値で上位群と下位群に分け、各項目について上位群の平均値と下位群の平均値間で、どのくらい離れているかを検討した(GP 分析) 結果として、4項目(項目番号 14,27,31,32)が上位群と下位群の間に 5%の水準で有意差が認められなかったため、弁別力の弱い項目として除外した。その他の項目は有意差(5%水準)が認められた。その後、残りの 38 項目に対して探索的因子分析(主因子法)を実施した。因子回転は、因子間の相関を許容する斜交回転(Promax 回転)を使用した。しかし、複数の因子に同程度に負荷する項目(項目番号 21,28)と、因子負荷量が.40に満たない項目(項目番号 19,25,33,39)を削除して、再度因子分析を実施した。その結果、因子負荷量が.40以上を有することを条件として、3 因子パターン 32 項目を確定した。32 項目による全分散のうち、回転前の 3 因子によって説明できる割合は 44.4%であった。見いだされた因子の命名については、鈴木と同様に、因子 1 は「対人恐怖心性」、因子 2 は「自己愛的憤怒」、因子 3 は「回避性傾向」とした。

以上の項目により各因子に対応する下位尺度を構成し、それらの内的整合性を Cronbach の係数で検討した結果、下位尺度 1 は.86、下位尺度 2 は.81、下位尺度 3 は.78であった。見いだされた各下位尺度の項目得点を合計し、それぞれ「対人恐怖心性」得点(平均=38.5, $SD=9.66$)、「自己愛的憤怒」得点(平均=26.8, $SD=7.36$)、「回避性傾向」得点(平均=25.1, $SD=6.50$)とした(Table 3-1-1)。

自己愛人格目録短縮版(NPI-S)の因子分析

自己愛人格目録短縮版(NPI-S)に対して因子分析(主因子法)を実施した。因子回転は、因子間の相関を許容する斜交回転(promax 回転)を用いた。因子数は、固有値 2.0 以上の 3 因子を抽出した。その結果、因子負荷量が.33以上を有することを条件として、3 因子パターンを確定した。30 項目による全分散のうち、回転前の 3 因子によって説明できる割合は 44.3%であった。

Table 3-1-1 自己の障害目録の因子分析結果(promax回転後の因子パターン; N=336)

項 目 内 容			
対人恐怖心性			
5 人からの評価をいつも気にしている	.80	.08	-.09
2 人からきらわれないかということばかり気になる	.79	-.01	.00
1 人から変な目でみられないかいつも気にする	.76	.10	-.04
4 人から批判されることがとても恐ろしい	.70	.05	.04
3 人と話をするとき、自分が軽蔑されていないか、批判されていないかと常に注意している	.66	.08	.02
7 人から拒絶されないように、あらゆる努力をする	.62	.04	-.19
6 何でも人に合わせようとする	.55	-.10	.19
12 人の反応を、いつも敏感に観察している	.53	.20	-.08
9 人から求められるような自分を演じてしまう	.51	.08	.02
11 自分の考えに自信が持てない	.47	-.10	.26
10 人と衝突することがとても恐ろしい	.47	-.15	.19
35 バカにされることがとても恐ろしい	.45	.21	.04
13 自分を責めてしまいやすい	.43	-.18	.05
自己愛的憤怒			
30 人が自分の期待通りに動かないことで、猛烈に腹が立つことがよくある	.03	.72	-.09
34 周りの人がくだらない人間に思えることがよくある	-.14	.67	.15
38 周りの人が、常に自分の期待に従ったらいいと思う	-.17	.66	-.15
37 気持ちを察してもらえないことで、猛烈に腹をたてることがよくある	.05	.64	.05
24 周りの人に対して腹を立てることが多い	-.01	.63	.15
36 周りの人が自分に対して気が利かないと、腹を立てることがよくある	.14	.58	.03
42 特別に有利な取り計らいをされる事を期待している	.15	.50	-.15
40 自分を批判する人間を敵対視してしまう	.10	.44	.01
41 人に対して影響力を持ちたいという気持ちが強い	-.07	.43	.35
回避性傾向			
15 人とコミュニケーションをとることが苦手だ	-.05	.13	.74
17 自分を出さないようにしている	.03	.11	.65
26 大勢の人の注目を浴びるようなことが大の苦手である	.03	-.09	.65
18 人見知りが激しい	-.09	.12	.65
20 自己主張できない	.24	-.13	.60
29 人といると疲れるので、一人になると心底ほっとする	-.08	-.36	.54
23 人間関係を煩わしく感じる	.05	.28	.54
16 自分は人に対して心を閉ざしている	-.05	.23	.47
8 いつも遠慮がちである	.32	-.11	.43
22 自分は社会に適さない人間だと思う	.09	.26	.40
因子間相関			
	.29		
	.24	.15	

Table 3-1-2 NPI-S尺度の因子分析結果(procrustes回転後の因子パターン;N=336)

項目内容			
注目・賞賛欲求			
23 私は、みんなの人気者になりたいと思っている	.78	-.03	-.02
2 私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある	.77	-.13	.16
8 私は、どちらかといえば注目される人間になりたい	.72	.00	.21
26 私は、人々の話題になるような人間になりたい	.69	.14	.06
14 私は、多くの人から尊敬される人間になりたい	.65	-.08	.01
5 私は、みんなからほめられたいと思っている	.61	.08	-.09
29 人が私に注意を向けてくれないと、落ち着かない気分になる	.57	.05	-.23
11 周りの人が私のことを良く思ってくれないと、落ち着かない気分になる	.50	-.01	-.35
17 私は人々を従わせられるような偉い人間になりたい	.46	.11	-.06
21 このこと言うときには、私は人目につくことを進んでやってみたい	.38	.01	.27
優越感・有能感			
4 私は周りの人たちより優れた才能を持っていると思う	.08	.78	-.01
7 私は周りの人達より有能な人間であると思う	.16	.71	-.01
16 私は周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている	.10	.70	.01
1 私は才能に恵まれた人間であると思う	.09	.69	.04
10 私は周りの人が学ぶだけの値打ちのある長所を持っている	.08	.63	.11
28 周りの人たちが自分のことを良い人間だといってくれるので、自分でもそうなんだと思う	.03	.60	-.12
25 私は、どんなことでも上手くこなせる人間だと思う	.04	.56	.15
13 周りの人々は、私の才能を認めてくれる	-.21	.55	.06
22 私に接する人はみんな、私という人間を気に入ってくれるようだ	.00	.47	.01
19 私が言えば、どんなことでもみんな信用してくれる	-.17	.33	.11
自己主張性			
24 私は、自己主張が強いほうだと思う	.06	-.10	.75
3 私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う	.08	-.09	.75
6 私は、控え目な人間とは正反対の人間だと思う	.16	-.18	.62
15 私はどんなことにも挑戦していくほうだと思う	.02	.08	.57
12 私は、自分で責任を持って決断するのが好きだ	-.12	.11	.57
27 私は自分独自のやり方を通すほうだ	-.27	.19	.53
30 私は、個性の強い人間だと思う	-.01	.15	.50
9 私はどんな時でも、周りを気にせず自分の好きなように振る舞っている	-.08	.12	.49
18 これまで私は自分の思う通りに生きてきたし、今後もそうしたいと思う	-.11	.17	.38
20 いつも私は話しているうちに、話の中心になってしまう	.30	.04	.36
因子間相関			
		.30	
		.30	.32

見いだされた因子は、その項目内容から因子 1 は「注目・賞賛欲求」、因子 2 は「有能感・優越感」、因子 3 は「自己主張性」とした。以上の項目により各因子に対応する下位尺度を構成し、それらの内的整合性を Cronbach の 係数で検討した結果、下位尺度 1 は.82、

下位尺度 は.83 , 下位尺度 は.78 であった . 見いだされた各下位尺度の項目得点を合計し , それぞれ「注目・賞賛欲求」得点(平均=30.0, $SD=7.12$) , 「有能感・優越感」得点(平均=24.6, $SD=6.79$) , 「自己主張性」得点(平均=30.4, $SD=6.53$)とした(Table 3-1-2) .

自己の障害目録と NPI-S との相関

自己の障害目録と NPI-S との関連を検討するために , NPI-S との相関係数を算出した . その結果 , 「対人恐怖心性」と「注目・賞賛欲求」とは弱い正の相関($r=.35, p=.01$) , 「有能感・優越感」とは相関がなく , 「自己主張性」とは弱い負の相関($r= -.25, p<.01$)がみられた . 「自己愛的憤怒」と「注目・賞賛欲求」とは弱い正の相関 ($r=.36, p<.01$) , 「有能感・優越感」とはごく弱い正の相関($r=.16, p<.01$) , 「自己主張性」ともごく弱い正の相関($r=.14, p<.05$)があり , 「回避性傾向」と「注目・賞賛欲求」とは弱い負の相関($r= -.32, p<.01$) , 「有能感・優越感」とも弱い負の相関($r= -.25, p<.01$) , 「自己主張性」とは中程度の負の相関($r= -.49 , p<.01$)がみられた .

Table 3-1-3 自己の障害目録とNPI-Sの各下位尺度得点間の相関(N=336)

自己の障害目録					
対人恐怖心性	-				
自己愛的憤怒	.36**	-			
回避性傾向	.35**	.28**	-		
NPI-S					
注目・賞賛欲求	.35**	.36**	-.32**	-	
有能感・優越感	-.08	.16**	-.25**	.35**	-
自己主張性	-.25**	.14*	-.49**	.32**	.43**

** $p<.01$, * $p<.05$

(4) 考察

本章では、自己の障害目録における自己愛の特徴を探ることと、本尺度の信頼性の再検討を行う目的で実施した、結果として、因子分析により3因子を抽出した。また、NPI-Sとの相関結果から、「対人恐怖心性」が「注目・賞賛欲求」と正の相関を示しながら「自己主張性」とは負の相関を示していた。この「注目・賞賛欲求」の対人関係は、受動的、消極的、他力本願的、願望的なあり方を示すことが報告されている(小塩,2000)が、本下位尺度の「対人恐怖心性」も、注目・賞賛を求めるが得られなかった場合を恐れることから消極的な対人関係しか持てないと考えられる。さらに、「回避性傾向」は、NPI-Sの全下位尺度と負の相関を示しているなど、Kohut(1971,1977)が唱えている他者からの評価で傷つくことを恐れ、過敏な反応をして対人関係を回避するという側面であると思われる。なお、これら2つの下位尺度は「自己愛的パーソナリティ障害」を測定できる尺度であると考えられる。そして、「自己愛的憤怒」はNPI-Sの全下位尺度と正の相関を示しており、DSM-(1994)の診断基準にあるような「誇大性、承認欲求、共感性欠如」など自己中心的な自己愛の特徴を示しており、Kohut(1971,1977)が唱えている「自己愛的行動障害」を測定できる下位尺度であることが示唆された。

これらの結果から、本尺度は、自己愛の誇大的な側面を意味する項目と自己愛の過敏な側面を意味する項目を併せ持つ尺度であると推測されたが、大学生用に構成されたものであるため、一部の項目内容が難解であるという指摘を被調査者から受けた⁽¹⁾。そのうえ、傷つきやすさの項目が加えられていなかったため、これらの項目を加え再構成する必要があると考えられた。

(1)例として対人恐怖心性因子では「人からの評価をいつも気にしている」「何でも人に合わせようとする」といった項目、「回避性傾向」因子では「自分は人から距離を置かれる存在である」「自分は人に対して心を閉ざしていると思う」などの項目で“回答が困難である”とか“意味がよく分からない”という指摘を調査対象者から受けた。

3.1.3 自己愛傾向尺度の再構成（研究2）¹

(1) 目的

大学生用に構成された自己愛の尺度である自己の障害目録をより平易な内容にし、傷つきやすさの項目を加え再構成する。そして、探索的因子分析を試みて因子構造を確定する。さらに、モーズレイ性格検査との相関係数を算出して、その信頼性と妥当性の基本的な検討を行うことを目的とする。

(2) 方法

1) 調査対象および実施期間

2003年6月に、愛知県内の公立高校1年生360名（有効回答344名、男137名、女207名）に対して、授業時間を利用して、一斉に調査を実施した。

2) 測定尺度

自己愛傾向尺度

鈴木(1999)の自己愛についての尺度、「対人恐怖心性」、「自己愛的憤怒」、「回避性傾向」の3因子からなる32項目に、傷つきやすさの項目をアイデンティティ尺度（下山，1992）の「私は、やりそこないをしないかと心配ばかりしている」「私の心は、とても傷つきやすくもろい」などを参考に、10項目を作成して42項目で構成した。本尺度の回答形式は、「まったく当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらともいえない」「だいたい当てはまる」「よく当てはまる」までの五件法で実施された。

¹ 高橋美知子 2006aより

新・性格検査法 - モーズレイ性格検査 (Maudsley Personality Inventory: MPI)

自己愛傾向尺度の項目群の妥当性を検討するためにモーズレイ性格検査(MPI; Eysenck, 1959)を使用した。MPIは、神経症的傾向項目群と外向性-内向性項目群とがあり、広く使用されている妥当性のある性格検査である。なお、Kohut(1971, 1977)が論ずる自己愛の障害は、軽蔑への過敏さや抑うつ傾向、心気傾向を伴うものと推測される。ゆえに、MPIの内向性や抑うつ傾向、神経症的傾向などに関連があると仮定して、この尺度を使用した。回答形式は、「はい」「どちらともいえない」「いいえ」までの三件法で実施された。

3) 調査実施方法

調査は2回に分けて行ったため、学籍番号の記入を求めたが、コンピュータ処理を行うことと、研究以外の目的には使用しないので、調査協力者には後々迷惑がかからないことを明記した。また、成績にも一切関係のないことを事前に説明して実施された。

(3) 結果

1) 自己愛傾向尺度の信頼性と妥当性の結果

自己愛傾向尺度の判別力の検討

信頼性を高めるために、自己愛傾向尺度の42項目を総点の中央値で上位群と下位群に分け、各項目について上位群の平均値と下位群の平均値間で、どのくらい離れているかを検討した(GP分析)。その結果、全項目の上位群と下位群の平均値は5%以上の水準で有意差が認められた。

自己愛傾向尺度の因子分析

自己愛傾向尺度項目群を下位分類するため、全体に探索的因子分析（主因子法）を実施した。因子回転は、因子間の相関を許容する斜交回転（promax 回転）を用いた。因子数は、固有値 2.0 以上の 3 因子を抽出した。その後 40 以上を有していない 7 項目については、十分な負荷量を示さなかった項目（項目番号 26, 31, 33, 34, 38, 40, 41）として除外し、2 回目の因子分析を実施した。その結果 因子負荷量が 40 以上を有することを条件として、3 因子パターンを確定した。35 項目による全分散のうち、回転前の 3 因子によって説明できる割合は 40.5%であった。この結果を Table 3-1-4 に示す。

次に、項目群の内容から、因子の意味について検討した結果、因子 1 に高い負荷量を示した 16 項目は、人から嫌われること、批判されること、拒絶されることなどを恐れることや傷つきやすいことなどの特徴から「対人過敏性」とした。因子 2 の 11 項目は、感受性の鋭さを表しており、自己愛の傷つきを恐れるため、人とのかかわりを避ける傾向があるということで「回避性傾向」とした。因子 3 の 8 項目は、自分の気持ちを察してもらえないことや、批判されることに怒りを感じることを表しているため「自己愛的な怒り」とした。

以上の項目により各因子に対応する下位尺度を構成し、それらの内的整合性を Cronbach の係数で検討した結果、下位尺度 1 は .90、下位尺度 2 は .85、下位尺度 3 は .83 であった。見いだされた各下位尺度の項目得点を合計し、それぞれ「対人過敏性」得点(平均=44.5, $SD=11.9$)、「回避性傾向」得点(平均=26.8, $SD=7.73$)、「自己愛的な怒り」得点(平均=17.8, $SD=5.78$)とするとともに、35 項目全体を合計して「自己愛傾向」総得点(平均=89.1, $SD=19.9$)とした。

これらの尺度得点について男女差の検定を行ったところ、いずれの得点も有意な性差はみられなかった。なお、得られた結果から、各項目と自己愛傾向総得点との相関係数を算出したところ、すべて $r=.50$ 以上の値を示していた。また、下位尺度得点とその下位尺度を構成する各項目得点との相関係数を算出したところ、「対人過敏性」で $r=.56\sim.77$ 、「回避性傾向」で $r=.52\sim.69$ 、「自己愛的な怒り」で $r=.57\sim.70$ であった（すべて $p<.001$ ）。

したがって、本尺度の信頼性は比較的高いものとして、全 35 項目を分析に用いた。

Table 3-1-4 自己愛傾向尺度の因子分析結果(promax回転後の因子パターン; N=344)

項目内容			
対人過敏性			
2 人からきられないかということばかり気になる	.80	.00	-.03
5 人からどう思われているか、いつも気にしている	.75	-.02	-.05
1 人から変な目でみられないかいつも気になる	.73	-.01	-.06
3 人と話をするとき、自分が軽蔑されていないか、批判されていないかと常に注意している。	.66	.12	-.04
4 人から批判されることがとても恐ろしい	.64	.06	.04
37 すぐ感情を傷つけられやすい。	.63	-.09	.22
7 人から拒絶されないように、あらゆる努力をする	.63	-.02	-.14
10 人と衝突することがとても恐ろしい	.62	.04	-.09
13 自分を責めてしまいやすい	.58	-.03	.05
12 人の反応を、いつも敏感に観察している	.58	.00	.10
35 私の心は、とても傷つきやすく、もろい。	.57	-.12	.23
36 何かにつけてよくよ心配する事が多い。	.54	-.01	.07
39 友達から怒りを向けられると、自分が駄目な人間のように感じる。	.53	.00	.08
9 人から求められるような自分を演じてしまう	.52	.05	.08
6 無理しても人に合わせようとする	.50	.25	-.13
42 他人に馬鹿にされると惨めな気持ちになる。	.46	.09	.14
回避性傾向			
16 なるべく目立たなくして、自分を出さないようにしている	-.08	.74	-.05
18 自己主張できない	.05	.70	-.15
22 大勢の人の注目を浴びることが苦手である	-.10	.67	-.10
14 私は、他の人と簡単にうち解けて話せない	.00	.65	.06
15 自分のことはなるべく話ないようにしている。	-.10	.57	.00
23 人といると疲れるので、一人でいる方が好きである	-.15	.53	.30
17 人見知りが多い	.00	.52	.08
8 人に対して、いつも遠慮がちである	.30	.50	-.20
19 自分は社会に適さない人間だと思う	.07	.43	.21
11 自分の考えに自信が持てない	.32	.41	-.18
20 人間関係を煩わしく感じる	.03	.40	.32
自己愛的な怒り			
24 人が自分の期待通りに動かないことで、猛烈に腹が立つことがある	.02	.03	.70
27 周りの人が自分に対して気が利かないと、腹を立てることがよくある	.06	-.01	.66
21 周りの人に対して腹を立てることが多い	.01	.06	.65
25 周りの人がくだらない人間に思えることがある	-.10	.20	.64
28 気持ちを察してもらえないことで、猛烈に腹をたてることがよくある	.15	.02	.62
29 周りの人が、常に自分の期待に従ったらいと思う	-.04	.02	.58
32 特別に有利な取り計らいをされる事を期待している	.24	-.13	.48
30 自分を批判する人間を敵対視してしまう	.08	.06	.47
因子間相関			
	.29		
	.28	.19	

自己愛傾向尺度の再検査信頼性

1回目の調査後、6ヶ月を置いて調査対象者80名に2回目の調査を実施した。そして、自己愛傾向尺度総得点、「対人過敏性」得点、「回避性傾向」得点、「自己愛的な怒り」得点（1回目：「対人過敏性」平均=45.1,SD=9.40「回避性傾向」得点 平均=30.5,SD=6.88；「自己愛的な怒り」得点 平均=16.9,SD=5.13；「自己愛傾向」総得点 平均=92.4,SD=13.9，2回目：「対人過敏性」平均=43.8,SD=10.9；「回避性傾向」得点 平均=32.4,SD=6.72；「自己愛的な怒り」得点 平均=21.6,SD=5.44；「自己愛傾向」総得点 平均=97.7,SD=15.5）をそれぞれ求めた。さらに、これらの得点間の相関係数を算出した。その結果、検査-再検査間の相関係数は、自己愛傾向尺度総得点で $r=.68$ 、「対人過敏性」得点 $r=.69$ 、「回避性傾向」得点 $r=.66$ 、「自己愛的な怒り」得点 $r=.70$ であった（全て $p<.001$ ）。約6ヶ月の間隔を置いて実施された調査でも高い相関が得られたことから、自己愛傾向尺度の再検査信頼性は十分に高いことが示された。

MPIの項目分析

MPIの各下位尺度に、各項目とMPIの総得点間相関を算出したところ、おおむね $r=.40$ 以上の値を示した。各下位尺度のCronbachの係数は、外向性-内向性項目 .89、神経症的傾向項目 .85であった。既存の性格検査尺度であるので、そのまま使用した。

自己愛傾向下位尺度とMPIの相関

自己愛傾向尺度項目群の下位尺度の妥当性を検討するために、MPIとの相関係数を算出した。その結果、「対人過敏性」と外向性-内向性項目とは弱い負の相関($r=-.26, p=.01$)、神経症的傾向項目とは中程度の正の相関($r=.58, p<.01$)がみられた。「回避性傾向」と外向性-内向性項目との間には強い負の相関($r=-.77, p<.001$)があり、神経症的傾向項目とは弱い正の相関($r=.27, p<.01$)が見られた。「自己愛的な怒り」と外向性-内向性項目との相関はなく($r=-.10$)、神経症的傾向項目とは中程度の正の相関($r=.49, p<.01$)がみられた。また、「対人過敏性」と「回避性傾向」($r=.43, p<.01$)、「対人過敏性」と「自己愛的な怒り」($r=.38, p<.01$)

とは弱い正の相関、「回避性傾向」と「自己愛的な怒り」($r=.26, p<.01$)とは弱い正の相関がみられた。

Table 3-1-5 自己愛傾向とMPIの各下位尺度得点間の相関(N=344)

	自己愛傾向尺度		
	対人過敏性	回避性傾向	自己愛的な怒り
自己愛傾向尺度			
対人過敏性	—		
回避性傾向	.43**	—	
自己愛的な怒り	.38**	.26**	—
MPI			
外向性-内向性	-.26**	-.77***	-.10
神経症傾向	.58**	.27**	.49**

*** $P<.001$, ** $P<.01$

(4) 考察

本章では、質問紙法を用いて傷つきやすさを伴う自己愛傾向の特徴を詳しく検討することであった。鈴木(1999)の自己愛尺度項目群に、傷つきやすさの項目を加え再構成し、一般高校生344名に5段階評定で実施した。得られたデータに、斜交回転による因子分析を行った結果、3因子パターンが得られた。この得られた下位尺度の「対人過敏性」と「回避性傾向」は、対人関係において過敏な反応を表す自己愛傾向の内容を示すものと考えられた。一方、「自己愛的な怒り」は、他者からの特別な配慮や敬意を期待し、それが得られない場合には不満や怒りが生じることを表すという、誇大的で傲慢な側面の自己愛傾向の内容を示すものと考えられた。これら下位尺度の内容は、Kohut(1971, 1977)の自己愛的パーソナリティ障害と自己愛的行動障害の特徴におおむね一致すると思われた。

MPIを用いた妥当性の検討では、因子分析で得られた各下位尺度において、ほぼ予想された相関関係が得られた。結果として、下位尺度のすべてが神経症的傾向と関連していた。この神経症的傾向は、神経質、敏感、不安、苦勞性などの情緒的な不安定さを示し、対人関係での過敏性を意味していると考え、本下位尺度が、過敏で傷つきやすいことを示唆しているといえる。そのほかのMPIでは相関関係パターンに相違がみられた。つまり、「回避性傾向」および「対人過敏性」と「外向性-内向性」との関係では、内向性と強く関連しているという結果が示された。これは、控えめで気兼ねしすぎる傾向が強く、抑う

つ的で他者を気にすることを意味しているので、社会への適応が難しいことを示唆しているといえる。

ところが、「自己愛的な怒り」は、「外向性 - 内向性」とは積極的な相関関係が示されていないので、社会への適応と特に関係がないといえる。だが一方で、自己愛人格の心理的要因として、上地・宮下(2005)が、「誇大自己が中心となっている自己愛は、他者からの配慮や特別扱いを期待する。しかし、この自己顕示が与えられないときには傷つきやすくなる」ことを指摘している。このことから考えると、強い恥の意識が表出され、自己顕示を抑えてしまっていることも予想される。つまり、自己顕示性をもちながら、それを自然な形で表すことができない誇大的な自己愛の抑制傾向が、社会への適応について表現することを阻害しているとも考えられる。ただし、誇大的な自己愛の抑制傾向が社会への適応に影響するメカニズムについては、説明が容易ではなく、今後さらに詳しく検討する必要があると考えている。

さらに、本論文の誇大的な自己愛と過敏な自己愛は正の相関を示し、相互に影響し合うという関係にあると推測される。これについて、Kohut(1971, 1977)が、「誇大性と併存する過敏な自己愛は、幼少時の未熟な自己愛を脱却できておらず、自分の不安や情動を調節したり緩和したりする力である『自己緩和能力』が弱い」と指摘している。それゆえ、他者からの調節や緩和がない場合には、情緒の不安定さを示し、自己愛の傷つきを感じやすくなると思われる。

以上のことから、本尺度の項目群は、人とのかかわりで過敏な傾向を示す側面と、誇大的な側面を含み、傷つきやすさを伴う自己愛傾向を評価するものとして、妥当であると判断された。

第4章

高校生の自己愛傾向と学校生活満足感

前章において、Kohut 理論による自己愛傾向尺度を構成した。本尺度は、誇大性を伴い過敏で傷つきやすい自己愛傾向を測定するものとして妥当性があることが示された。そこで、本章では、この自己愛傾向の追試と発展的な検討を行うものである。

さて、自己愛に障害を持つものは、対象関係において承認や賞賛を強く求めるといわれている。これは他者からの評価によって自己評価を維持しようと試みていることが指摘されており、適応との関係も深いと報告されている(中山・中谷,2006)。特に「誇大型」と「過敏型」の2類型を含む自己愛傾向は、他者からの影響を受けやすい自己評価を持っているために、不適応的な要素を含んでいると考えられる。

それは自己愛者には、自分自身の内面にある情緒的側面に目を向けることや自分自身の葛藤から目を背けるという特徴があるからである。自己愛者は、自己への関心が集中するといわれながら、否定的な自己への関心は低下しているのである。すなわち、他者から自分がよく見られたいというこだわりから、自分のネガティブな部分を見ないということであり、自己概念の曖昧さがあると思われる。そして、この自分自身をどのように価値付け、どのように見ているかという自己概念の内容は、その個人の適応と密接な関係を持つといわれている。また、高校生にとって外的対象からの評価は、この自己概念を確かめるための要素として作用しており、学校生活における適応では、これらが重要な位置付けとなっているのである。

一方、自己愛人格障害と承認・賞賛欲求との関連についての研究は多く見られるが、この2つの要素が学校生活への適応とどのように関連するのかという研究は少ないと思われる。そこで本章は、高校生における自己愛傾向と承認欲求との関連を明らかにし、これが学校生活満足感へどのような影響を及ぼすのかを検討するものである。

4.1 高校生の自己愛傾向と学校生活満足感との関連 (研究3)¹

4.1.1 目的

本章では、承認欲求が傷つきやすさを伴う自己愛傾向を介在して、学校生活における満足感へ大きな影響を及ぼしていることを検討する。なお、調査対象者は、自己愛と密接に関連すると思われる高校生の男女を選ぶこととする。

4.1.2 方法

(1) 調査対象および実施期間

愛知県内のA公立高校1年生360名(有効回答332名,男124名,女208名)とB公立高校1年生320名(有効回答261名,男105名,女156名)に、授業時間を利用して一斉に調査を実施した。自己愛傾向尺度は、2002年6月にA高校と2003年の4月にB高校に実施し、承認欲求尺度、学校生活満足度尺度は、高校入学後の学校生活が安定したと思われる2002年10月にA高校と2003年7月にB高校で実施した。

(2) 測定尺度

自己愛傾向尺度

研究2で作成した自己愛傾向尺度35項目を使用した。

日本版MLAM承認欲求尺度

本尺度(植田・吉森,1990)は、人から肯定的な評価を受けたい、あるいは人に悪く評価されるのを避けたいという承認欲求を測定するものである。そして、高校生の承認欲求の

¹ 高橋美知子 2006a より

強さを測定するために、Larsenら(1976)が開発し、Martin(1984)によって修正が施された「承認欲求尺度」(MLAM; Martin-Larsen Approval Motivation Scale, 1984)の日本版尺度(植田・吉森, 1990)20項目を、「まったく当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらともいえない」「だいたい当てはまる」「よく当てはまる」までの五件法で実施した。

学校生活満足度尺度

河村(1999a)は、高校生が自分の存在や行動が、級友や教師から承認されているか否かを示す項目「承認」と、不適応感やいじめ・冷やかしなどを受けているかどうかを示す項目「被侵害・不適応」の2因子からなる学校生活満足度尺度を構成した。本尺度の妥当性は、河村により、ソーシャルスキル尺度(菊池, 1994)と自尊感情尺度(山本ら, 1982)との関連によって

検証されている。この尺度20項目を、「まったく当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらともいえない」「だいたい当てはまる」「よく当てはまる」までの五件法で実施した。

(3) 調査実施方法

調査は2回に分けて行ったため、学籍番号の記入を求めたが、コンピュータ処理を行うことと、研究以外の目的には使用しないので、調査協力者には後々迷惑がかからないことを明記した。また、成績にも一切関係のないことを事前に説明して実施された。

4.1.3 結果

(1) 各尺度の分析

自己愛傾向尺度の分析

自己愛傾向尺度が、尺度作成時に想定された因子構造になるのか否かを検討した。

Table 4-1-1 自己愛傾向尺度の因子分析結果 (procrustes回転後の因子パターン; N=593)

項目内容			
対人過敏性			
2 人からきらわれないかということばかり気になる	.79	.00	-.06
5 人からどう思われているか、いつも気にしている	.73	-.03	-.03
37 すぐ感情を傷つけられやすい。	.70	.00	.18
1 人から変な目でみられないかいつも気になる	.69	-.02	-.09
10 人と衝突することがとても恐ろしい	.66	.02	-.04
3 人と話をするとき、自分が軽蔑されていないか、批判されていないかと常に注意している	.66	.03	.01
35 私の心は、とても傷つきやすく、もろい。	.66	-.04	.13
4 人から批判されることがとても恐ろしい	.64	-.03	.10
7 人から拒絶されないように、あらゆる努力をする	.63	.05	-.17
36 何かにつけてよくよ心配する事が多い。	.61	.08	.08
39 友達から怒りを向けられると、自分が駄目な人間のように感じる。	.55	.13	.03
13 自分を責めてしまいやすい	.53	-.05	.13
42 他人に馬鹿にされると惨めな気持ちになる。	.53	.09	.16
12 人の反応を、いつも敏感に観察している	.52	.02	.12
6 無理してでも人に合わせようとする	.51	.24	-.11
9 人から求められるような自分を演じてしまう	.50	.04	.12
回避性傾向			
16 なるべく目立たなくして、自分を出さないようにしている	-.06	.82	-.08
18 自己主張できない	.07	.76	-.18
22 大勢の人の注目を浴びることが苦手である	-.04	.72	-.20
14 私は、他の人と簡単にうち解けて話せない	-.01	.71	.01
23 人といると疲れるので、一人でいる方が好きである	-.18	.60	.30
17 人見知りが激しい	.01	.58	.11
15 自分のことはなるべく話ないようにしている。	.00	.54	.01
19 自分は社会に適さない人間だと思う	.11	.50	.16
8 人に対して、いつも遠慮がちである	.32	.48	-.13
20 人間関係を煩わしく感じる	.00	.48	.28
11 自分の考えに自信が持てない	.32	.46	-.28
自己愛的な怒り			
28 気持ちを察してもらえないことで、猛烈に腹をたてることがある	.13	.03	.75
25 周りの人がくだらない人間に思えることがある	-.16	.17	.73
24 人が自分の期待通りに動かないことで、猛烈に 腹が立つことがある	.02	.04	.71
27 周りの人が自分に対して気が利かないと、腹を立てることがよくある	.08	.04	.66
21 周りの人に対して腹を立てることが多い	-.08	.14	.63
29 周りの人が、常に自分の期待に従ったらいと思う	-.02	-.03	.61
32 特別に有利な取り計らいをされる事を期待している	.26	-.11	.51
30 自分を批判する人間を敵対視してしまう	.28	-.27	.48
因子間相関			
		.31	
		.28	.20

自己愛傾向尺度の全 35 項目に対して、3 因子に対応する仮説的因子パターンとして 1 または 0 を選び、主因子解、斜交 procrustes 法による確認的因子分析を実施した (Table 4-1-1)。

その結果、仮説通りの 3 因子解が得られた。仮説的因子パターンと回転後の因子パターン間の一致係数 (Harman, 1976) を Table 4-1-2 に示した。当該因子パターン間の一致係数は、.96 から .99 であり十分な値が得られたといえる。また、各下位尺度の内的整合性を Cronbach の係数で検討した結果、下位尺度は .89、下位尺度は .82、下位尺度は .80 であった。各下位尺度得点の平均・標準偏差は、「対人過敏性」得点 (男平均=42.2, $SD=10.9$, 女平均=46.0, $SD=12.2$)、「回避性傾向」得点 (男平均=27.8, $SD=7.45$, 女平均=26.1, $SD=7.97$)、「自己愛的な怒り」得点 (男平均=17.8, $SD=5.73$, 女平均=18.0, $SD=5.69$) であった。

Table 4-1-2 仮説的因子パターンとProcrustes回転後の因子パターン間の一致係数

回転後の因子パターン	仮説パターン		
	.96	.06	.04
	.04	.99	.01
	.05	.04	.99

承認欲求尺度の分析

本尺度 20 項目に因子分析 (主因子法, promax 回転) を実施した結果、1 因子構造を確認した。しかし、因子負荷量 .30 に満たない項目 (項目番号 7, 8, 9, 10, 13, 16, 19, 20) があつたために、これらを除外して、1 因子構造 (12 項目) を確定した。その結果、この因子は、「他人からの励ましがなければ、何事も続けることが困難である」「人を喜ばせるために、自分の意見や行動を変えることがある」など承認を欲する項目が集約されているので、「承認欲求」と命名した。このように因子構造を確認し、残った 12 項目を分析に用いた (Table 4-1-3)。この因子からなる下位尺度の内的整合性を Cronbach の係数で検討した結果、12 項目全体の信頼性係数は .70 であった。これら 1 因子の項目得点を合計して、「承認欲求」得点 (男平均=34.6, $SD=6.78$, 女平均=34.5, $SD=6.41$) とした。この尺度得点について性差の検定を行ったところ、有意差はみられなかった。

Table 4-1-3 日本版MLAM承認欲求尺度項目(男=229,女=364)

項目内容
2 人とうまくやったり好かれるために、人が望むように振る舞おうとする傾向がある
1 人を喜ばせるために、自分の意見や行動をかえることがある。
4 私は、自分の考えがグループの意見と異なるとき、自分の考えを言にくい。
5 私は、友人が自分を支持してくれることがわかっているときだけすすんで議論に加わる
11 私はたいてい、人が反対しても自分の立場を変えない。(*)
3 他人からの励ましがなければ、何事でも続けることが困難である。
18 誰かが私のことを余りよく思っていないことが分かったら、次にその人に合ったとき、印象を良くするために出来るだけのことをする。
14 最もうまい人の扱いは、相手の考えに同意したり、相手の喜ぶような事を言うことである
6 私は、人からよく思われるために自分を変えようとは思わない。(*)
12 重要人物に取り入るのは賢明である。
17 私は、同じ状況であっても、相手が違えば異なる行動をとる。
15 たとえ自分のほうが正しいと分かっているても他人から見れば間違っていると思われるようなことは、人前ですべきではない。

(*)は逆転項目

学校生活満足度尺度の分析

学校生活満足度尺度全 20 項目に対して因子分析(主因子法)を実施した。因子回転は、因子間の相関を許容する斜交回転(promax 回転)を用いた。因子数は、固有値 2.0 以上の 2 因子を抽出した。その結果、尺度の作成者である河村(1999b)による因子分析と同様の「被侵害・不適応」因子、「承認」因子の 2 因子構造が確認された。

また、下位尺度得点と、その下位尺度を構成する各項目得点との相関を算出したところ、「被侵害・不適応」得点では $r=.49 \sim .77$ 、「承認」得点では $r=.47 \sim .67$ の値を示した(全て $p<.001$)。この下位尺度の内的整合性を Cronbach の係数で検討した結果、「被侵害・不適応」得点は.85、「承認」得点は.78であった。したがって、本調査においても、内的整合性が高いことが示された。学校生活満足度下位尺度の平均値・標準偏差は、「被侵害・不適応」得点(男 平均=21.9,SD=6.84,女 平均=18.6,SD=6.60)、「承認」得点(男 平均=28.6,SD=5.62,女 平均=30.8,SD=5.49)で、河村(1999b)で示された得点とほぼ同じ得点であり、差が大きいものでも、標準偏差内の得点であった(Table 4-1-4)。これらの尺度得点について男女差の検

定を行ったところ、「被侵害・不適応」得点は、男子のほうが有意に高かった($t=6.04, p<.01$)。 「承認」得点は、女子のほうが有意に高かった($t=4.64, p<.01$)。

Table 4-1-4 学校生活満足感尺度の因子分析結果(promax回転後の因子パターン;N=593)

項目内容		
被侵害・不適応		
11 私はクラスの人から無視されるようなことがある。	.74	.02
12 私はクラスメートから、耐えられない悪ふざけをされることがある。	.68	.14
16 私はクラスの中で、孤立感を覚えることがある。	.64	-.28
13 私はクラスや部活でからかわれたり馬鹿にされるようなことがある。	.62	.23
10 私はクラスの中で、浮いていると感じることがある。	.61	-.01
7 私は部活などの仲間から無視されることがある。	.60	.01
15 クラスで班を作るときなど、なかなか班に入れずに残ってしまうことがある。	.59	-.29
20 私はクラスにいるときや部活をしているとき、周りの目が気になって不安や緊張を覚えることがある。	.52	-.08
19 私は休み時間などに、ひとりであることが多い。	.52	-.27
3 私は授業中に発言をしたり、先生の質問に答えたりするとき、冷やかされる事がある。	.46	.25
承認		
2 私はクラスの中で存在感があると思う。	.02	.75
14 私はクラスやクラブの活動でリーダーシップをとることがある。	.18	.66
4 仲の良いグループの中では中心的なメンバーである。	.09	.64
8 私はクラスで行う活動には積極的に取り組んでいる。	-.02	.63
5 私は学校・クラスでみんなから注目されるような経験をしたことがある。	.26	.62
1 私は勉強や運動、特技やひょうきんさなど友人から認められていると思う。	-.05	.61
6 学校生活で充実感や満足感を覚えることがある。	-.17	.58
9 在籍している学校に満足している。	-.22	.39
17 学校内に自分の本音や悩みを話せる友人がいる。	-.29	.39
18 学校内で私を認めてくれる先生がいると思う。	-.06	.30
因子間相関		

-21

(3)各尺度間の関連

各尺度間の相関

各尺度の関連をみるために、各尺度得点間の相関係数を算出した。自己愛傾向下位尺度得点間の相関は、「対人過敏性」と「回避性傾向」(男 $r=.55, p<.01$, 女 $r=.40, p<.01$)、「対人過敏性」と「自己愛的な怒り」(男 $r=.39, p<.01$, 女 $r=.38, p<.01$)、「回避性傾向」と「自己愛的な怒り」(男 $r=.24, p<.01$, 女 $r=.36, p<.01$)で弱い正の相関がみられた。各自己愛傾向下位尺度得点と承認欲求尺度得点との相関係数を算出した結果、承認欲求尺度と「対人過敏

性」(男 $r=.54, p<.01$, 女 $r=.56, p<.01$)とは中程度の正の相関, 「回避性傾向」(男 $r=.39, p<.01$, 女 $r=.32, p<.01$)および「自己愛的な怒り」(男 $r=.18, p<.01$, 女 $r=.32, p<.01$)とは弱い正の相関がみられた。

各自己愛傾向下位尺度得点と学校生活満足度下位尺度得点の結果は、「対人過敏性」と「被侵害・不適応」とは、弱い正の相関(男 $r=.31, p<.01$, 女 $r=.18, p<.01$)がみられ、「承認」とは相関がなかった。「回避性傾向」と「被侵害・不適応」とは弱い正の相関(男 $r=.28, p<.01$, 女 $r=.29, p<.01$)がみられ、「承認」とは弱い負の相関(男 $r=-.44, p<.01$, 女 $r=-.41, p<.01$)がみられた。「自己愛的な怒り」と「被侵害・不適応」とは弱い正の相関(男 $r=.19, p<.01$, 女 $r=.40, p<.01$)が見られ、「承認」とは女子のみごく弱い負の相関(男 $r=.04$, 女 $r=-.23, p<.01$)がみられた。学校生活満足度下位尺度得点と承認欲求尺度得点とは、「承認」で女子のみにごく弱い負の相関(男 $r=-.02$, 女 $r=-.13, p<.05$)が見られた。

Table 4-1-5 各下位尺度得点間の相関 (男=229,女=364)

	自己愛傾向尺度						学校生活満足度			
	対人過敏性		回避性傾向		自己愛的な怒り		承認		被侵害・不適応	
	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)	(男)	(女)
自己愛傾向尺度										
対人過敏性	-	-								
回避性傾向	.55**	.40**	-	-						
自己愛的な怒り	.39**	.38**	.24**	.36**	-	-				
学校生活満足度										
承認	-.09	-.06	-.44**	-.41**	.04	-.23**	-	-	-	-
被侵害・不適応	.31**	.18**	.28**	.29**	.19**	.40**	-	-	-	-
承認欲求	.54**	.56**	.39**	.32**	.18**	.32**	.02	-.13*	.10	.06

** $P<.01$, * $P<.05$

因果モデルの検討

Table 4-1-5 の結果から、男女とも自己愛傾向の下位尺度得点間には弱い正の相関関係があった。そのうえ、Gabbard(1994)が「自己愛者は、他者評価に過敏な反応をして、注目されるのを避けるが、心の奥底に誇大性を秘めている」と指摘している。以上のことから、対人場面で誇大自己が満たされないと恥や傷つきが現れ、他者とのかわりを避けようとする」と仮定して、自己愛的な怒り 対人過敏性 回避性傾向と、自己愛的な怒り 回避性傾向へ単方向の矢印をひいた。一方、岡田(1999)らは、「自己愛者は、承認・賞賛欲求が強く、他者評価に依存する」と指摘している。さらに、この他者評価に配慮や特別扱いがな

かった場合には、傷つきやすくなることも指摘されている(上地・宮下, 2005)。このことから承認欲求が自己愛傾向下位尺度を通して学校生活満足感に影響を与えていることが考えられる。ただし、Table 4-1-5 より、女子においては、承認欲求が直接的に学校での承認に結びつくことも考えられる。

そこで、本研究では、承認欲求 自己愛傾向 学校生活満足感、さらに承認欲求 承認という流れで影響が与えられていると予想して仮説因果モデル図を設定し(Figure 4-1-1)、共分散構造分析によるパス解析を行った。なお、学校生活満足度尺度に性差があったので、男女別に分析を行った。

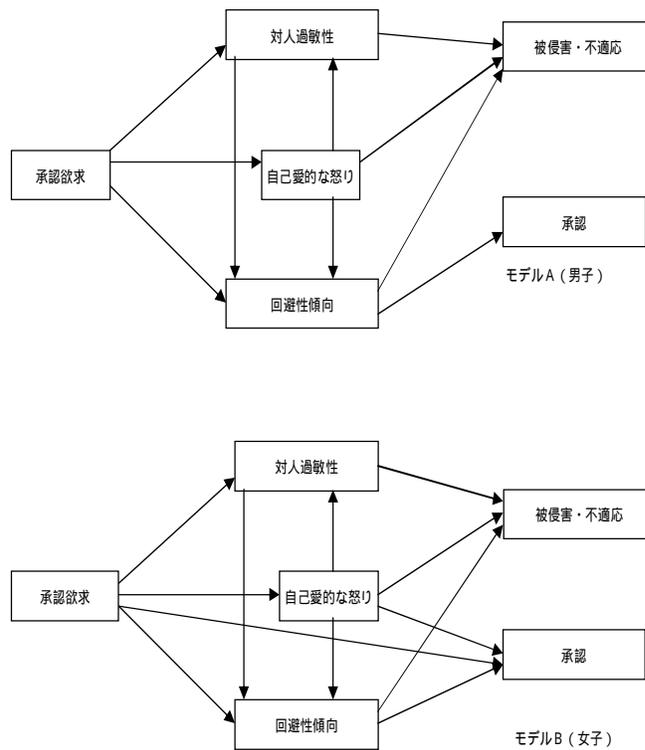


Figure 4-1-1 承認欲求,自己愛傾向,学校生活満足感に関する因果モデル図 (誤差項省略)

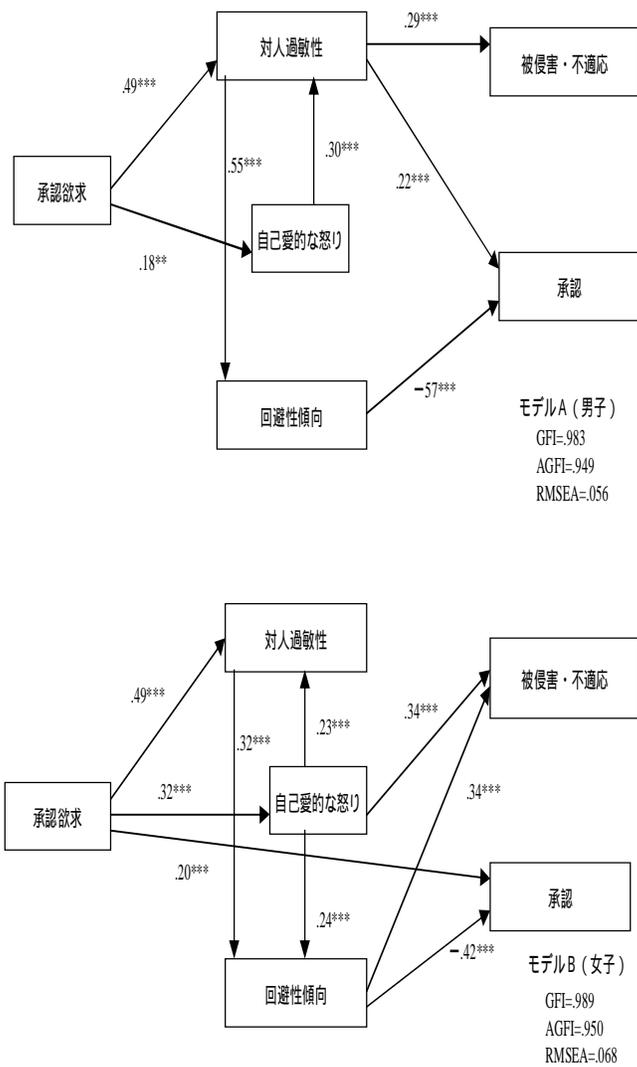


Figure 4-1-2 承認欲求と自己愛傾向が学校生活満足感に及ぼす影響についてのパス図

注) 数値は標準化パス係数, *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

この因果モデル図の検討を重ねた結果、ほぼパスモデル図どおりで GFI(男.983、女.989)、AGFI(男.949、女.950)、RMSEA(男.056、女.068)ともに、十分な適合性を示していた。

Figure 4-1-2 のモデル A は、男子の結果であるが、図中の矢印は有意であったパスを表している。これによると、他者からの承認を欲するという「承認欲求」は、「対人過敏性」と「自己愛的な怒り」へ正の影響を及ぼしており、おおむね単純相関と同様の結果であった。間接効果としては、「承認欲求」から「自己愛的な怒り」への影響は、「対人過敏性」から「回避性傾向」を通じて学校での「承認」に対して負の影響を及ぼしていた。さらに、「対人過敏性」から学校での「承認」へ正の影響を及ぼしていた。もう1つの間接効果としては、「承認欲求」から「対人過敏性」への影響は、「被侵害・不適応」に対して正の影響を及ぼしていた。

Figure 4-1-2 のモデル B は、女子の結果を示したもので、図中の矢印は有意であったパスを表している。その結果、男子と同様に、「承認欲求」は「対人過敏性」と「自己愛的な怒り」へ正の影響を及ぼしていた。さらに、「承認欲求」は学校での「承認」に正の影響を及ぼしていた。そして、「自己愛的な怒り」は、「回避性傾向」と「被侵害・不適応」へ正の影響を及ぼしていた。間接効果としては、「承認欲求」から「自己愛的な怒り」への影響は、「対人過敏性」から「回避性傾向」を通じて「被侵害・不適応」に対して正の影響を及ぼしていた。また、もう1つの間接効果として、「承認欲求」から「対人過敏性」への影響は、「回避性傾向」を通じて学校での「承認」に対して負の影響を及ぼしていた。

4.1.4 考 察

本章の目的は、他者から承認されたいという承認欲求が、傷つきやすさを伴う自己愛傾向を介在して、学校生活における満足感に影響するという因果モデル図を設定して検討することであった。

(1) 各尺度間の関係

自己愛傾向下位尺度のうち、「対人過敏性」は、他者から批判されることや嫌われるこ

とを恐れる内容を表し、「回避性傾向」は、感受性の鋭さから人とのかかわりを避けようとする内容で、ともに対人関係における過敏さを示す自己愛傾向を意味していた。また、「自己愛的な怒り」は、自己愛が満たされないときの怒りを表し、誇大的で傲慢な自己愛傾向を意味していた。この自己愛傾向下位尺度と「承認欲求」との相関係数をみると「対人過敏性」は男 $r=.54$ 、女 $r=.56$ 、「回避性傾向」は男 $r=.39$ 、女 $r=.32$ 、「自己愛的な怒り」は男 $r=.18$ 、女 $r=.32$ であり、過敏な自己愛傾向のほうが高い値を示していた。つまり、他者からの肯定的な評価を受けたいという承認欲求は、過敏な自己愛傾向を高める要因となっていることが考えられる。そして、Kernberg(1975)や Kohut(1971, 1977)が「自己愛者は、承認・賞賛を強く求める」と指摘しているように、本研究でも、自己愛傾向は承認欲求と関連することが示唆された。

自己愛傾向下位尺度と「被侵害・不適応」との相関では、「対人過敏性」は男 $r=.31$ 、女 $r=.18$ 、「自己愛的な怒り」は男 $r=.19$ 、女 $r=.40$ で有意な相関関係を示していた。しかし、その中でも、「対人過敏性」の女子($r=.18$)と「自己愛的な怒り」の男子($r=.19$)の相関係数は低く、回答者数の多さにより有意な相関関係を示していただけで、積極的な相関はなかったといえる。したがって、男子では、「対人過敏性」得点が高いほど、学校生活での不安や緊張などの不適応感が高くなることが示されたのである。一方、「自己愛的な怒り」と「被侵害・不適応」とは、女子が強い相関関係を示していた。また、学校での「承認」との相関は、女子の値 $r=.23$ も低く、男女ともに積極的な相関関係はなかったといえよう。したがって、女子においては、「自己愛的な怒り」得点が高くなるほど、学校生活で不安や緊張感が高くなるという結果が示されたのである。

「回避性傾向」と「被侵害・不適応」とは、男 $r=.28$ 、女 $r=.29$ で正の相関関係にあり、学校での「承認」とは男 $r=-.44$ 、女 $r=-.41$ で負の相関関係にあった。つまり、男女とも、「回避性傾向」得点が高くなるほど、学校生活での承認感は低く、不安や緊張感が高くなるという結果が示されたのである。

以上の結果は、後述する自己愛傾向を介在する過程を反映するものと思われる。

(2) 自己愛傾向を介在する過程について

本研究では、承認欲求 → 自己愛傾向 → 学校生活満足感という因果モデル図を検討した。

Figure. 4-1-2 男女のパス図では、「対人過敏性」と「自己愛的な怒り」は、他者からの肯定的な評価を受けたいという承認欲求から強い正の影響を受けていた。そのうえ、「対人過敏性」は「自己愛的な怒り」からも正の影響を受けていた。

これは、Table 4-1-5 の相関関係の結果や、先行研究（上地・宮下,2005;岡野,1998;小塩,1998b,Takahashi,2004）からも予測される結果であった。したがって、本研究でも、承認への強い欲求は、過敏な自己愛および誇大的な自己愛ともにもつ特徴であることが示唆されたといえる。以上のことから、男女を問わず自己愛者は、常に他者からの承認や賞賛によって自己を定義づけようとしていることが考えられる。

一方、Figure 4-1-2 において男女両方のパス図では、「承認欲求」からの間接効果は、「自己愛的な怒り」から「対人過敏性」と「回避性傾向」を通じて学校での「承認」にマイナスの影響が示されていた。さらに、「被侵害・不適応」へも正の影響が示されていた。ところが、承認欲求が直接的な影響を与えるときには、学校での「承認」にプラスの影響が示されていた。したがって、これらの結果からいえることは、自己愛者の他人に認められたい、評価されたいという人一倍の欲求は、誇大的な自己愛から過敏な自己愛を介在することによって、恥や傷つきやすさの意識を伴うことが推測される。それゆえ、男女ともに、「学校生活における満足感」を抑制する要因となることが示されたといえる。

次に、Figure.4-1-2 における男子のパス図で、「承認欲求」と「自己愛的な怒り」から「対人過敏性」を通じた影響は、学校での「承認」へプラスに作用していた。これについて小塩(1998b)は、「賞賛・承認欲求が強く、誇大的な自己愛を持つ男子は、自分への自信や優越感などの肯定感覚を持ち、その感覚を維持したいという欲求がある。また、友人関係は比較的によいと認識している」と報告しているが、過敏な自己愛傾向の男子も、同様の特徴をもつことが示唆されたといえよう。

一方、Figure.4-1-2 における女子のパス図では、「承認欲求」から「自己愛的な怒り」への影響は「被侵害・不適応」へプラスの作用を与えており、相関の結果と一致していた。この承認を欲する誇大的な自己愛は「他者からの特別扱いや配慮が得られないと自己評価が低下し傷つきやすくなり、強い恥の意識が表出される」と示唆されている(岡野,1998;Kohut,1971,1977)。そのうえ、女子は「他者とのかかわりの中で自己評価を決定している」と指摘されている(山本ら,1982)。つまり、誇大的な自己愛をもつ女子は、他者からの承認欲求が得られない場合には自己評価が低下し、恥や傷つきの感情が強くもたらされ、学校生活での満足感が得られないと考えられる。

以上の結果から、男女とも、承認欲求の強さは、傷つきやすさを伴う自己愛傾向を介在して、学校生活における満足感に影響を及ぼすときには、マイナスの作用を与えることが示唆されたといえる。

(3) まとめ

本章では、傷つきやすさを伴う自己愛傾向尺度を再構成し、信頼性・妥当性の検討を行った。本尺度で測定される自己愛傾向と MPI の神経症的傾向および内向性とは、正の相関を示したことから、一定の妥当性が確認された。また、信頼性も十分であった。そして、本尺度は、対人関係で過敏な自己愛と誇大的な自己愛という自己愛の2側面の特徴を示していた。この尺度を使用した研究では、過敏な自己愛および誇大的な自己愛は、男女とも承認欲求からの影響を強く受けていることが示された。さらに、承認欲求は、傷つきやすさを伴う自己愛傾向を介在した場合には、学校生活における満足感にマイナスの影響を与えることが明らかとなった。

この学校生活への適応には、他者とのかかわりが大きく関係しているといわれる。そのうえ、青年期には、自己の不安定さを支えてくれる友人とのかかわりが必要である。ところが、自己愛の傷つきを多く経験した場合には、その友人関係さえ難しくなることが予想される。

そこで、次は、この対人関係に関連があるといわれる基本的信頼感と自己愛の関係について、検討を行うこととする。

第5章

高校生の自己愛傾向と学校忌避感情， 基本的信頼感との関連

さて，前章では，毎日登校している一般高校生の自己愛傾向と承認欲求，学校生活満足感との関連を明らかにした．その結果として，承認欲求が強く誇大性を伴う過敏で傷つきやすい自己愛傾向者は，学校生活における適応が難しいことが認められた．

一方，先行研究でも同じように学校へは登校しているが，学校嫌い感情を抱いている不登校潜在群（グレーゾーン）の生徒が増えていることが報告されている(古市,1991)．そして，いずれ不登校にいたるかも知れない生徒たちの抱える問題は，さまざまな要因が複合的に関連していることが多く，われわれ教員は，その対応に苦慮しているのが現状である．そこで次は，この要因の一つである基本的な信頼感と自己愛との関係を検討したい．

この信頼感とは，自分の能力や他人の存在の一貫性についての確信であり，個人の健康なパーソナリティの発達と密接に結びついている．すなわち，安定した信頼感を持つ場合，人は他者をより支持的であると感じられる(Grace & Schill,1986;Schill et al. 1980)．そのうえ，信頼感とは，他人に対しての肯定的な概念を形成し，これはまた自己概念の発達にも有効的な役割を果たすと考えられている．そして，一般的に，青年期になると人は自我同一性の獲得という重要な時期に入るため，安定した自己への信頼感と他者への信頼感が必要である．ところが，自己愛者の自己信頼は，他者評価によって容易に崩れ去るような不安定なものであると指摘されている．

そこで，本章では，学校には登校しているが，登校への忌避感情(回避感情)を感じたことのある不登校潜在群の生徒に焦点をあてて，彼らの自己愛傾向と基本的信頼感との関連について検討する．

5.1 高校生の自己愛傾向と学校忌避感情，基本的信頼感との関連（研究4）²

5.1.1 目的

本章では，一般高校生を対象として，傷つきやすい自己愛傾向と学校への忌避感情および基本的信頼感との関連について検討することを目的とする．

5.1.2 方法

(1) 調査対象及び実施期間

愛知県内の公立高校1年生320名（有効回答300名，男104名，女196名）に授業時間を利用して一斉に調査を実施した．下記の自己愛傾向尺度は，2004年5月に実施した．学校嫌い尺度，基本的信頼感尺度は，学校生活に慣れたと思われる2004年7月に実施した．

(2) 測定尺度

自己愛傾向尺度

研究2で作成した自己愛傾向尺度(高橋,2006a)35項目を使用した．下位尺度は，「対人過敏性」16項目，「回避性傾向」11項目，「自己愛的な怒り」8項目からなっている．回答形式は「まったく当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらともいえない」「だいたい当てはまる」「よく当てはまる」までの5件法で実施された．

基本的信頼感尺度

本尺度(谷,1996)は，自己に対する信頼感を表す「基本的信頼感」6項目と，他者に対する信頼感を表す「対人的信頼感」5項目の2つの下位尺度からなっている．基本的信頼感とは，第一段階の基本的信頼が，その後どのような形の信頼として現れるかという Erikson (1959;小此木訳,1973)の理論に基づいて構成された．対人的信頼感とは，Rasmussen(1964)の自我同一性尺度の第一段階の項目を参考に作成された．回答形式は「まったく当てはまらない」「あまり当てはまらない」「だいたい当てはまる」「よく当てはまる」までの4件法で実施された．

学校嫌い感情尺度(古市,1991)

本尺度(古市,1991)は12項目からなり，実際には登校している一般生徒が，学校に対して抱いている強い忌避感情から不登校傾向(グレ-ゾ-ン)を測ることを目的として用いた．回答形式は「まったく当てはまらない」「あまり当てはまらない」「だいたい当てはまる」「よく当てはまる」までの4件法で実施された．

(3) 調査実施方法

調査は2回に分けて行ったため，学籍番号の記入を求めたが，コンピュータ処理を行うことと，研究以外の目的には使用しないので，調査協力者には後々迷惑がかからないことを明記した．

5.1.3 結果と考察

(1) 各尺度の因子分析結果

自己愛傾向尺度の分析

自己愛傾向尺度の全35項目に対して，3因子に対応する仮説的因子パターンとして1

または0を選び，主因子解，斜交 procrustes 法による確認的因子分析を実施した。その結果，仮説通りの3因子解が得られた。当該因子パターン間の一致係数(Harman,1976)は，.97 から.95 であり十分な値が得られた。また，自己愛傾向尺度の各下位尺度に相当する項目の得点を合計し，それぞれ「対人過敏性」得点(男平均 43.4,SD 10.5，女平均 49.9,SD 12.9)，「回避性傾向」得点(男平均 29.0,SD 7.73，女平均 28.3,SD 8.66)，「自己愛的な怒り」得点(男平均 18.6,SD 6.06，女平均 17.5,SD 6.72)とした。内的整合性を Cronbach の α 係数で検討した結果，下位尺度 は .90，下位尺度 は .88，下位尺度 は .87 であった。なお，IT 相関係数を算出したところ「対人過敏性」で $r=.53 \sim .79$ ，「回避性傾向」で $r=.57 \sim .79$ ，「自己愛的な怒り」で $r=.61 \sim .80$ であり(全て $p < .001$)，この尺度の内的整合性が高いことが示された。

基本的信頼感尺度の分析

本尺度は，谷(1996)によって内容的妥当性の確認は行われているが，大学生用に構成されたものであり，高校生への使用であったために，さらに信頼性を高める目的で GP 分析を行った。逆転項目(項目 4,7,8,9,10,11)の処理を行った後に，各項目を総点の中央値で分け，各項目の上位群と下位群の平均値の間がどのくらい離れているかを検討した。その結果，1項目(項目番号 6)が上位群と下位群の間に5%の水準で有意差が認められなかったため，弁別力の弱い項目として除外した。また，その他の項目は5%以上の水準で有意差が認められた。残り10項目について因子分析(主因法，promax 回転)を実施した。その結果，因子負荷量が.40以上を有することを条件として，2因子パターンを確定した。10項目による全分散のうち回転前の2因子によって説明できる割合は49.7%であった。各因子の解釈は，因子 1 に高い負荷量を示した5項目が，自分自身に対する信頼感を表していることから「基本的信頼感」，因子 2 の5項目が，対人的な信頼感の特徴を表していることから「対人的信頼感」とした。以上の項目により各因子に対応する下位尺度を構成し，それらの内的整合性を Cronbach の α 係数で検討した結果，下位尺度 は .77，下位尺度 は .70 であった。また，見いだされた各下位尺度の項目得点を合計し，それぞれ「基本的信頼感」得点(男平均 13.8,SD 2.85,女平均 13.2,SD 3.40)，「対人的信頼感」得点(男平均 13.7,SD 2.56,女平均 14.9,SD 2.65)とした。下位尺度得点とその下位尺度を構成する各項目得点との相関

係数を算出したところ「基本的信頼感」は $r=.67 \sim .77$ 、「対人的信頼感」は $r=.57 \sim .75$ であったため(全て $p < .001$)、信頼性は比較的高いものとして全 10 項目を分析に用いた。

Table 5-1-1 基本的信頼感尺度の因子分析結果(プロマックス回転後の因子パターン; N=300)

項目内容	IT 相関		
基本的信頼感			
9 人から見捨てられたのではないかと心配になることがある。*	.79	-.15	.74
10 物事がうまくゆかなくなると、自分のなかに引きこもってしまうことがある。*	.77	.00	.77
8 自分自身のことが信頼できないと感じることがある。*	.74	.04	.73
7 失敗すると、二度と立ち直れないような気がする。*	.67	-.06	.67
11 人生に対して、不信感を感じるがある。*	.59	.29	.69
対人的信頼感			
4 私には頼りにできる人がほとんどいない。*	.06	.75	.74
3 一般的に、人間は信頼できるものであると思う。	.11	.72	.75
5 周囲の人々によって自分が支えられていると感じる。	-.21	.67	.63
1 普通、人はお互いに誠実にかかわりあっているものだと思う	.00	.62	.65
2 自分が困ったときには、まわりの人々から援助が期待できる。	.00	.56	.57
因子間相関			
		.20	

(*)は逆転項目

本尺度の自己への「基本的信頼感」とは、自己に関しては信頼(reasonable trustfulness)に値するという単純な感覚を意味していた。谷は、この「基本的信頼感」が十分に得られていない場合には、自分自身の過去を受け入れることができず、現在における充実感も感じることができないために、自己への同一性の感覚が得られないと報告している。また、「対人的信頼感」は、より現実の人間関係に基づく一般的な他者に対する信頼感を意味するものであった。

学校嫌い感情尺度の分析

本尺度は，中学生・児童用に構成されたものであり，高校生への使用であったために信頼性を高める目的で GP 分析を行った．その結果，全項目の上位群と下位群の平均値は5%以上の水準で有意差が認められた．そして，因子分析の結果，固有値から1因子パターンを示していた．この1因子の内的整合性を Cronbach の 係数で検討した結果，信頼性係数は .82 であった．この12項目を合計して「学校嫌い感情」得点(男 平均 26.1, *SD* 6.70, 女 平均 25.3, *SD* 6.86)とした．また，性による有意差は見られなかった($t=1.04$)ため，以下の分析は，男女合わせて全体で行うことにした．下位尺度得点とその下位尺度を構成する各項目得点との相関係数は $r=.57 \sim .74$ であったので(全て $p < .001$)，信頼性は比較的高いものとして全12項目を分析に用いた．なお，本尺度は，一般の生徒が抱く学校に対する忌避的な感情，即ち学校嫌いの感情を意味するものであった．

(2) 高校生における学校忌避感情の広がりについて

Table 5-1-2 学校嫌い感情測定尺度の項目ごとの肯定率

	質問項目	係数	肯定率
1	私は学校に来て何も楽しいことがない。	.82	18%
2	朝、何となく学校に行きたくないと思うことがある。	.78	63%
3	学校さえなければ、毎日楽しいだろうと思う。	.79	27%
4	学校にいるとき、よくゆううつになってくる。	.79	36%
5	学校では嫌なことばかりある。	.79	21%
6	日曜の夜、また明日から学校かと思うと気が重くなる。	.79	64%
7	学校をやめたくなくなることがある。	.78	31%
8	学校にいるのがいやで、授業が終わったらすぐに家に帰りたくなる	.79	29%
9	私はこの学校が好きだ。(R)	.88	31%
10	今のクラスは良くないので、他のクラスに変わりたいと思う。	.81	19%
11	今の学校が嫌で転校したいと思うことがよくある。	.79	16%
12	出来れば学校なんかなくなればよいのと思う。	.79	28%

注1) (R)は逆転項目

注2) 肯定率は「よく当てはまる」と「だいたい当てはまる」を選択した者の割合

注3) 係数は当該項目を削除した場合の 係数

Table 5-1-2 は、本尺度における項目ごとの肯定率の結果であるが「2.朝、何となく学校に行きたくないと思うことがある」は63%、「6.日曜の夜、また明日から学校かと思うと気が重くなる」は64%であり、この2項目に対する肯定率が高いことが分かる。また、「3.学校さえなければ、毎日楽しいだろうと思う(27%)」、「4.学校にいるとき、よくゆううつになる(36%)」、「7.学校をやめたくなくなることがある(31%)」、「8.学校にいるのがいやで、授業が終わったらすぐに家に帰りたくなる(29%)」、「12.出来れば学校なんかなくなればよいのと思う(28%)」など直接的な登校忌避感情の質問に多くの者が肯定的な回答をしていた。この学校への忌避感情について肯定的な回答率が高いということは、学校嫌い感情が高校生に広がっているということが示されたのである。これが直接的に不登校へ繋がっていくというわけではないが、その前駆症状として見られるものと捉える必要があると思われる。

(3) 各尺度間の関連について

各尺度間の関連をみるために、各尺度間の相関係数を算出した。自己愛傾向下位尺度得点と「学校嫌い感情」得点との相関を算出した結果、「対人過敏性」($r=.15, p<.05$)、「回避性傾向」($r=.36, p<.01$)および「自己愛的な怒り」($r=.26, p<.01$)とは正の相関が見られた。以上の結果から、自己愛傾向下位尺度と「学校嫌い感情」との間には有意な相関が見られ、自己愛傾向と学校嫌い感情とが相互に関連することが示唆されたといえよう。

また、基本的信頼感下位尺度得点と「学校嫌い感情」得点とは負の相関を示していた。この結果から基本的信頼感と学校嫌い感情の間には相互に負の関連があると考えられる。

Table 5-1-3 自己愛傾向尺度得点と各尺度得点との相関(N=300)

	自己愛傾向尺度			基本的信頼感尺度	
	対人過敏性	回避性傾向	自己愛的な怒り	基本的信頼感	对人的信頼感
対人過敏性	-				
回避性傾向	.44**	-			
自己愛的な怒り	.30**	.27**	-		
基本的信頼感	-.56**	-.47**	-.19*	-	
对人的信頼感	-.06	-.38**	-.28**	.24**	-
学校嫌い	.15*	.36**	.26**	-.35**	-.44**

** $p<.01$, * $p<.05$

自己愛傾向下位尺度得点と基本的信頼感下位尺度得点の相関関係の結果は，「対人過敏性」($r = -.56, p < .01$)および「回避性傾向」($r = -.47, p < .01$)と自己への「基本的信頼感」は中程度の負の相関，「自己愛的な怒り」と自己への「基本的信頼感」とは弱い負の相関($r = -.19, p < .05$)が見られた。また「回避性傾向」($r = -.38, p < .01$)および「自己愛的な怒り」($r = -.28, p < .01$)と「対人的信頼感」とは弱い負の相関が見られた。「対人過敏性」とは相関はなかった。

以上の結果から，自己愛傾向各下位尺度と自己へ基本的信頼感及び対人的信頼感とは比較的高い負の相関を示しており，本研究における自己愛傾向と基本的信頼感とは負の関連があることが示された。

(4) 学校嫌い感情の3群別による自己愛傾向と基本的信頼感との関係の検討

学校嫌い感情が高校生の中で広がっているという結果から，学校嫌い感情得点をもとに平均 + 1/2 標準偏差以上にあるものを高群，平均 ± 1/2 標準偏差以内にあるものを中群，平均 - 1/2 標準偏差以下にあるものを低群として3群を設定した。

Table 5-1-4 学校嫌い感情3群別による各尺度得点の平均値と標準偏差

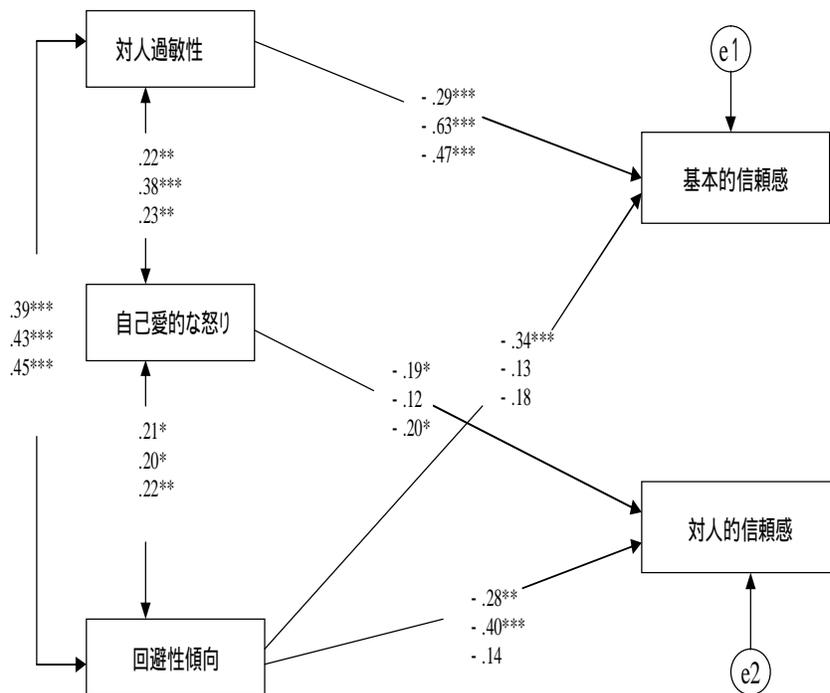
学校嫌い	高群 (n=95)	中群 (n=105)	低群 (n=100)
対人過敏性	48.6(13.5)	49.4(11.8)	44.9(11.6)
回避性傾向	31.5(8.20)	29.5(7.80)	24.8(7.60)
自己愛的な怒り	19.4(6.90)	18.6(5.90)	15.8(6.20)
基本的信頼感	12.2(3.10)	13.2(2.90)	14.8(3.10)
対人的信頼感	13.1(2.90)	14.7(2.10)	15.6(2.40)

()内は標準偏差。

それぞれの群に対して自己愛傾向を説明変数，基本的信頼感を基準変数とし，共分散構造分析(AMOS 4.0)で多母集団の同時分析を行った。Table5-1-3 に示されるように，対人過敏性と回避性傾向，自己愛的な怒りには正の相関がある。そこでモデルの検討を行う際には，対人過敏性と自己愛的な怒り，回避性傾向の間に共分散を設定した。さらに，対人過敏性と回避性傾向の共分散が全ての群で等しいという制約を入れて検討を行った。

また，各尺度間の相関結果と先行研究における自己愛者の信頼感は安定したものではないと報告されていることから，自己愛傾向 基本的信頼感という因果関係を想定した。こ

の結果は Figure 5-1-1 に示す。モデルの適合度は GFI=.982, AGFI=.926, CFI=.988, RMSEA=.030, で満足のいく数値を示し,本研究のモデルは十分に適合しているといえる。



GFI=.982
AGFI=.926
CFI=.988
RMSEA=.030

Figure 5-1-1. 自己愛傾向と基本的信頼感に関するモデル図

注1) * $P < .05$, ** $P < .01$, *** $P < .001$

注2) 上段 = 学校嫌い高群 (n=95), 中段 = 学校嫌い中群 (n=105), 下段 = 学校嫌い低群 (n=100)

注3) は直接観測される変数, は直接観測されない変数

その結果，「自己愛的な怒り」と「対人過敏性」とは，3群とも強い正の関係（高群.22, $p<.01$ ；中群.38, $p<.001$ ；低群.23, $p<.01$ ）がみられた。「自己愛的な怒り」と「回避性傾向」とは，3群とも正の関係（高群.21, $p<.05$ ；中群.20, $p<.05$ ；低群.22, $p<.01$ ）が見られた。「対人過敏性」と「回避性傾向」には，3群とも強い正の関係（高群.39, $p<.001$ ；中群.43, $p<.001$ ；低群.45, $p<.001$ ）が示されていた。この共分散構造分析における「対人過敏性」，「自己愛的な怒り」，「回避性傾向」間の相関（標準化された共分散）は高く，全体としての関連はあるが，パスの係数をみると「対人過敏性」，「回避性傾向」の数値に比較して，他の値は低かった。このことは「対人過敏性」，「回避性傾向」の基本的信頼感への影響は相対的に大きいことを示しているといえる。

次に，自己愛傾向下位尺度の「対人過敏性」から自己への「基本的信頼感」は，3群とも強い負の関係（高群-.29, $p<.001$ ；中群-.63, $p<.001$ ；低群-.47, $p<.001$ ）がみられたが，中群，低群が高群より高い値を示していた。

また，「自己愛的な怒り」から「対人的信頼感」には，高群(-.19, $p<.05$)と低群(-.20, $p<.05$)に弱い負の関係が見られたが，同程度の数値であった。これにより仮説として挙げられたうち，学校嫌い高群の「対人過敏性」と「自己愛的な怒り」が高いものは，基本的信頼感が低くなるという結果は，支持されなかったのである。しかしながら，これらの結果は，他の要因が関連することを示唆しているといえる。

さらに「回避性傾向」から基本的信頼感へのパスをしてみる。その結果，「回避性傾向」と自己への「基本的信頼感」においては，高群(-.34, $p<.001$)が中・低群よりも強い負の関係がみられた。また「回避性傾向」と「対人的信頼感」とは，高群(-.28, $p<.01$)や中群(-.40, $p<.001$)のほうが低群よりも強い負の関係を示していた。これは自己愛傾向が高い場合には，学校生活へ適応するのは難しいという先行研究（高橋,2006a）と，学校忌避感情と性格傾向とが正の関連があるという先行研究(古市,1991)に，概ね一致するものであった。

以上のことから推察されることを述べてみる。誇大性を秘めた過敏なタイプの自己愛者は，他者から特別扱いされることを期待するが，そうでない場合には極端に軽視されたように感じ，自己愛が傷つくといわれる（岡野,1998; Gabbard, 1994）。これと同様に，学校嫌い感情が高い生徒は，自己愛的な怒りの影響から，自分の気持ちを察してもらえなかったり，批判されたりした場合には，自己愛が傷つけられるという過敏な自己愛傾向が活性化される。これが強い負の要因となり，自己への信頼感が不安定になると考えられる。この

理由の一つとして、Westen(1990)が指摘する「自己愛者の自己像は著しく歪んでおり、安定していない」ことが挙げられる。さらに、Kohut(1971)や Kernberg(1975)が、自己愛人格障害の患者における臨床的特徴として「自己への不確実感」を挙げていることや、小塩(1999)が「注目・賞賛欲求の高い青年は、自分に自信を持っているが、その自信は友人など他者からの評価に依存した不安定なものである」と報告していることが挙げられる。このようなことから自己への信頼感の不安定さは、自己愛者の特徴の一つであると考えられる。そのうえ、理論的研究(Kernberg,1975)や先行研究(葛西,1989,1990)において、自己愛者は他者への不信感が強いことが指摘される。また、自己愛者の特徴に近いと思われるのが、池田ら(1983)の研究における「登校拒否願望のある生徒は、他人への不信感が強い」ことも挙げられる。

従って、学校忌避感情が強く自己愛傾向の高い生徒が持つ自己への信頼感と他者に対する信頼感は、安定性を欠いたものであることが示唆されたのである。

一方、安定した信頼感を持つ人は、他者をより支持的と感じ(Grace & Schill, 1986; Schill, et al., 1980)、対人問題を感じる事が少ないといわれている(Gurtman, 1992)。天貝(1995)も「個人の内面に安定した自己および他者に対する信頼感が存在するということは、自己探求をするときのサポート源になる」ことを報告している。つまり、信頼感とは、個人の内的発達にも直接に関わる主要因となり得るので、基本的な信頼感が不安定な場合には、今後の心理的発達に影響を与えることが懸念される。このようなことから本研究における学校忌避感情が強い生徒は、自己愛傾向が高く自己への基本的な信頼感と他者への信頼感ともに低いために、自己の価値感や自分の将来への展望が見いだせないことが推測される。このように自分自身の主体性が動揺するということは、いつも不安を感じる状態であるといえる。これが学校生活への適応にマイナスの影響を与えることになると考えられる。

この学校生活への適応については、小林・霜村(2001)が「不登校経験者は、自己概念の低さが自尊感情の低さの要因となると同時に、集団への積極的な関わりを阻害したり、神経症傾向を高めたりして深刻な集団への不適応へ移行する可能性がある」ことを報告している。それゆえに、高校生のなかに学校忌避感情が広がっている現状から、学校への忌避感情を強く持ち自己愛傾向の高い生徒が、学校不適応へ移行していかないような予防的・対応的援助を行う必要があると考えている。

(5) まとめ

本章では，実際に登校している高校生の学校への忌避感情と自己愛傾向及び基本的信頼感との関連について検討した。学校嫌い感情3群別で多母集団の同時分析を実施した結果，「学校嫌い感情」の高群や中群が低群よりも，誇大性を伴う過敏で傷つきやすい自己愛傾向と基本的信頼感とは強い負の関連を示していた。この結果から，学校への忌避感情を強く持ち，学校生活に適応できないでいる生徒は，誇大的な自己愛傾向と過敏な自己愛傾向ともに高いために，自己への基本的信頼感と対人的信頼感が低くなることが示唆された。さらに，高校生のなかに学校忌避感情が広がっている現状から，学校への忌避感情を強く持ち自己愛傾向が高い生徒について，学校不適応に移行していかないような予防的・対応的援助を行う必要があると考えている。

第6章

高校生の自己愛傾向と親子関係， 学校生活満足感の関連

文部科学省(2001)は，学校生活に適応できない生徒のなかには，不適応へ至るのに直接のきっかけとなるような事柄が見つからないものが増えていることを報告している。つまり，学校不適応には，さまざまな問題が関連することが考えられる。たとえば，[研究3]では，高校生を対象とした研究において，誇大的で過敏なタイプの自己愛傾向者は，他者からの承認を強く求めている。だが，これが得られなかった場合には自己愛が傷つけられるのか，学校生活満足感が抑制されることを明らかにしている。さらに，[研究4]では，学校生活への適応に困難さを抱く生徒たちは，誇大的な自己愛傾向と過敏な自己愛傾向とも高いために，自己への基本的信頼感と対人的信頼感が低くなるという示唆も得られている。また，谷井・上地(1994)も，親子間の情緒的に安定した関係は，学校生活への適応感にプラスの影響を及ぼすことを報告している。そして，この自己愛傾向には，早期幼児期の親の養育態度が大きく関連することが，理論的・実証的研究で明らかにされている(Kernberg,1975;Kohut, 1971,1977; Miller, A.,1981;宮下,1991;Pressman & Pressman,1994)。

一方，子どもは親との人間関係を通して成長していく。特に親との相互作用は，なかでも重要な意味を持つと考えられる。すなわち，親子関係が子どもの性格と深い関係があることは，従来から認められているのである。それゆえに，大人社会への適応という発達課題に取り組まなければならない時期にある高校生にとって，親との情緒的な関係はとくに必要なことなのかも知れない。

以上のことを背景として，本章では，自己愛と親子関係，学校生活への適応との関連について検討するものである。

6.1 高校生の自己愛傾向と学校生活満足感との関連について - 親の養育態度からの検討 - (研究5)³

6.1.1 目的

本章では、2類型の自己愛傾向に視点をおき、高校生の自己愛傾向と親の養育態度が学校生活満足感に対して、どのような影響を及ぼすのかを検討する。また、これは学校間や男女間によって相違があるのかも検討することとする。

6.1.2 方法

(1) 調査対象および調査期間

愛知県内のA公立高校1年生280名(有効回答259名,男103名,女156名)とB公立高校1年生2004年200名(有効回答176名,男73名,女103名),2005年280名(有効回答265名,男117名,女148名)を対象として、3年間にわたり授業時間を利用して一斉に調査を実施した。下記の自己愛傾向尺度と親子関係診断尺度は、2003年5月(A高校)と2004年5月および2005年5月(B高校)に実施された。また、学校生活満足度尺度は、学校生活に慣れたと思われる2003年9月(A高校),2004年10月と2005年9月(B高校)に実施された。

(2) 調査実施方法

本調査の対象者が健康的な一般高校生であり、親の養育態度には一貫性があるものと想定して、現在の両親の養育態度について想起し自己報告をしてもらった。但し、この点に関してはさらなる実証的な検討が必要と思われる。また、この調査は2回の実施であるため、学籍番号の記入を求めたが、研究以外には使用しないので、調査対象者には後々迷惑がかからないことを説明し実施された。

³ 高橋美知子 2007bより

(3) 測定尺度

自己愛傾向尺度

研究2で作成した自己愛傾向尺度 35 項目を使用した。回答形式は「まったく当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらともいえない」「だいたい当てはまる」「よく当てはまる」までの5件法で実施された。

親子関係診断尺度

辻岡・山本(1975a,1975b)は，Schaefer(1965a,1965b)のCR-PBIのForm（26尺度・260項目）とその改訂版であるForm（18尺度・192項目）の因子分析により「親子関係診断尺度(EICA)」を作成した。本尺度は自分の父（または母）が，子どもの人格を認めず，子どもの自主性を尊重していないと認知しているという「自律性否定(AU)」（逆転項目）

親からの統制やしつけの厳しさを子どもが認知しているという「統制(CO)」、自分の父（または母）が，子ども自身と一体感を持ち自分の延長あるいは分身として認知していると子どもが感じているという「同一化(ID)」、自分の父（または母）が子ども自身を支持していると子どもが感じている「情緒的支持(ES)」という4種の1次因子で構成されている。そのうえ，ESとIDおよび，COとAUをそれぞれ「受容性」「統制性」という2つの2次因子として集約することで，子どもからみた親子関係が明らかにできる項目内容からなっている。本研究では，2次因子得点（受容性，統制性）の各20項目を用いた（辻岡・山本,1976a,1976b）。回答形式は「はい」「どちらともいえない」「いいえ」までの3件法で実施された。

学校生活満足度尺度

河村(1999a)の学校生活満足度尺度 20 項目を用いた。回答形式は「まったく当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらともいえない」「だいたい当てはまる」「よく当てはまる」までの5件法で実施した。

6.1.3 結果

(1) 各尺度の因子分析結果

自己愛傾向尺度の分析

[研究3]で構成された自己愛傾向尺度の35項目にGP分析を実施したところ，全項目の上位群と下位群の平均値は5%以上の水準で有意差が認められた．

次に，この尺度の項目群を学校・男女別にして，下位分類するために各群に因子分析(主因子法，promax回転)を行ったところ，それぞれで固有値2.0以上の3因子を抽出した．これら3因子は，因子負荷量に多少の相違はあるが，因子構造はほぼ同じであった．ゆえに，全群を合わせて尺度作成時に想定された因子構造になるのかを検討するため確認的因子分析を行った．自己愛傾向尺度の全35項目に対して，3因子に対応する仮説的因子パターンとして1または0を選び，主因子解，斜交procrustes法による因子分析を実施した．その結果，仮説通りの3因子解が得られた．この仮説的因子パターンと回転後の因子パターン間の一致係数(Harman,1976)は，.99～.98であり十分な値が得られた．

この項目群の内容から，[研究3]と同様に，因子1の16項目は「対人過敏性」，因子2の11項目は「回避性傾向」，因子3の8項目は「自己愛的な怒り」とした．以上の項目により各因子に対応する下位尺度を構成し，それらの内的整合性をCronbachの α 係数で検討した結果，下位尺度1は.90，下位尺度2は.82，下位尺度3は.81であった．なお，下位尺度得点とその下位尺度を構成する各項目得点との相関係数を算出したところ「対人過敏性」で $r=.53\sim.78$ ，「回避性傾向」で $r=.53\sim.72$ ，「自己愛的な怒り」で $r=.61\sim.73$ であった(全て $p<.001$)．従って，本尺度の信頼性は比較的高いものとして全35項目を用いた．

また，各下位尺度に相当する項目の得点を合計し，それぞれ「対人過敏性」得点(A校男平均=41.6,SD=11.0,女平均=46.3,SD=12.1，B校男平均=45.1,SD=10.4,女平均=47.4,SD=11.5)，「回避性傾向」得点(A校男平均=27.6,SD=7.44,女平均=26.3,SD=7.98，B校男平均=29.3,SD=7.10,女平均=28.2,SD=6.93)，「自己愛的な怒り」得点(A校男平均=17.8,SD=5.54,女平均=18.1,SD=5.72，B校男平均=17.1,SD=5.39,女平均=17.1,SD=5.83)とした．

親子関係診断尺度の分析

父母の親子関係診断尺度項目群を学校・男女別にして下位分類するため、各群に因子分析（主因子法）を実施した。因子回転は、因子間の相関を許容する斜交回転（promax 回転）を用いた。因子数は、固有値 2.0 以上の 4 因子を抽出した。その後、40 以上を有していないものについては、十分な負荷量を示さなかった項目（項目番号母 1,2, , 父 2）として除外した。そして、見いだされた 1 次因子項目を辻岡・山本(1975a,1975b)にならい ES と ID を「受容性」、および CO と AU を「統制性」という 2 次因子項目として集約し、尺度作成時に想定された因子構造になるのかを検討するため、確認的因子分析を行った。母親 38 項目と父親 39 項目に対して、2 因子に対応する仮説的因子パターンとして 1 または 0 を選び、主因子解、斜交 procrustes 法による因子分析を実施した。その結果、仮説通りの 2 因子解が得られた。この仮説的因子パターンと回転後の因子パターン間の一致係数(Harman,1976)は、母親.99 ~ .99, 父親.99 ~ .98 であり十分な値が得られた。

因子項目の内容から、辻岡・山本(1975a,1975b)と同様、因子 を「受容性」、因子 を「統制性」とした。そして、この因子項目からなる下位尺度得点とその下位尺度を構成する各項目得点との相関係数を算出したところ、母親の統制性は.32 ~ .61, 母親の受容性は.43 ~ .71 父親の統制性は.41 ~ .57, 父親の受容性.42 ~ .72 であった（全て $p < .001$ ）。この下位尺度の内的整合性を Cronbach の 係数で検討した結果、母親の統制性は.82, 母親の受容性は.90, 父親の統制性は.84, 父親の受容性.90 であった。また、各下位尺度に相当する 2 次因子項目の得点を合計し、それぞれ母の「統制性」得点(A 校男平均=32.1,SD=6.66,女平均=32.2,SD=6.53, B 校男平均=33.5,SD=6.74,女平均=32.7,SD=6.44), 母の「受容性」得点(A 校男平均=37.3,SD=8.01,女平均=43.0,SD=7.96, B 校男平均=39.0,SD=7.75,女平均=42.8,SD=7.56), 父の「統制性」得点(A 校男平均 32.8,SD=7.17,女平均=32.5,SD=7.40, B 校男平均=33.1,SD=7.26,女平均=32.1,SD=7.09), 父の「受容性」得点(A 校男平均=35.8,SD=7.61,女平均=37.7,SD=8.55, B 校男平均=36.7,SD=8.02,女平均=38.2,SD=8.70)とした。

学校生活満足度尺度の分析

河村(1999a)によって構成された学校生活満足度尺度項目群を学校・男女別にして、下位分類するために各群に因子分析（主因子法,promax 回転）を行ったところ、それぞれで固

有値 2.0 以上の 2 因子を抽出した。これら 2 因子は、因子負荷量に多少の相違はあるが、因子構造は同じであった。ゆえに、全群を合わせて尺度作成時に想定された因子構造になるのかを検討するため確認的因子分析を行った。学校生活満足度尺度の全 20 項目に対して 2 因子に対応する仮説的因子パターンとして 1 または 0 を選び、主因子解、斜交 procrustes 法による因子分析を実施した。その結果、河村(1999b)による因子分析と同様の「被侵害・不適応」因子、「承認」因子の 2 因子構造が確認された。そして、仮説的因子パターンと回転後の因子パターン間の一致係数(Harman,1976)は、.99 ~ .96 であり十分な値が得られた。

Table 6-1-1 学校生活満足度尺度の因子分析結果 (procrustes 回転後の因子パターン; N=700)

項 目 内 容		
被侵害・不適応		
11 私はクラスの人から無視されるようなことがある。	.95	-.03
16 私はクラスの中で、孤立感を覚えることがある。	.93	-.21
12 私はクラスメートから、耐えられない悪ふざけをされることがある。	.88	.14
15 クラスで班を作るときなど、なかなか班に入れずに残ってしまうことがある。	.87	-.22
19 私は休み時間などに、ひとりであることが多い。	.84	-.10
20 私はクラスにいるときや部活をしているとき、周りの目が気になって不安や緊張を覚えることがある。	.83	.11
13 私はクラスや部活でからかわれたり馬鹿にされるようなことがある。	.81	.27
10 私はクラスの中で、浮いていると感じることがある。	.79	-.03
7 私は部活などの仲間から無視されることがある。	.74	-.06
3 私は授業中に発言をしたり、先生の質問に答えたりするとき、冷やかされる事がある。	.51	.16
承 認		
14 私はクラスやクラブの活動でリーダーシップをとることがある。	.29	.89
17 学校内に自分の本音や悩みを話せる友人がいる。	-.15	.82
8 私はクラスで行う活動には積極的に取り組んでいる。	.00	.82
2 私はクラスの中で存在感があると思う。	-.04	.81
6 学校生活で充実感や満足感を覚えることがある。	-.18	.78
4 仲の良いグループの中では中心的なメンバーである。	.07	.71
1 私は勉強や運動、特技やひょうきんさなど友人から認められていると思う。	-.11	.67
9 在籍している学校に満足している。	-.18	.65
18 学校内で私を認めてくれる先生がいると思う。	.12	.65
5 私は学校・クラスでみんなから注目されるような経験をしたことがある。	.28	.65

因子間相関

この因子項目からなる下位尺度得点とその下位尺度を構成する各項目得点との相関係数を算出したところ、「承認」得点は.40~.69,「被侵害・不適応」得点は.43~.71であった(全て $p<.001$)。この学校生活満足度下位尺度の平均値・標準偏差は「被侵害・不適応」得点(A校男平均=21.9,SD=6.95,女平均=18.5,SD=6.10, B校男平均=20.4,SD=5.78,女平均=18.3,SD=5.31)であり,「承認」得点(A校男平均=28.6,SD=5.68,女平均=30.9,SD=5.36, B校男平均=28.3,SD=6.04,女平均=30.8,SD=5.98)であった。これは[研究3]とほぼ同じ得点であり,差が大きいものでも,標準偏差内を示していた。また,この下位尺度の内的整合性をCronbachの係数で検討した結果,「被侵害・不適応」得点は.81,「承認」得点は.78であった。従って,本尺度は標準化された尺度であり,信頼性があるものとして全20項目を使用した。

(2) 各尺度得点間の関連

各尺度における学校差と性差について

各尺度に関して学校群と男女群において群間で差があるのかを検討するため, t 検定を実施した。結果として,自己愛傾向下位尺度の「対人過敏性」得点では,学校差(男 $t=2.70,p<.01$,)および男女差(A校 $t=3.22,p<.01$,B校 $t=2.15,p<.01$)が見られ,「回避性傾向」得点では,学校差(男 $t=1.90,p<.05$,女 $t=2.40,p<.01$,)および男女差(B校 $t=1.67,p<.05$)が見られ,「自己愛的な怒り」得点では,学校差(A校女 $t=1.72,p<.05$)が認められた。

Table 6-1-2 各尺度の尺度得点と標準偏差および学校差と性差

	A校		B校		t値(Welch)		性差	
	男(103)	女(156)	男(190)	女(251)	学校差		A校	B校
					男	女		
対人過敏性	41.6(11.0)	46.3(12.1)	45.1(10.4)	47.4(11.5)	2.70**	0.92	3.22**	2.15**
回避性傾向	27.6(7.44)	26.3(7.98)	29.3(7.10)	28.2(6.93)	1.90*	2.40**	1.32	1.67*
自己愛的な怒り	17.8(5.54)	18.1(5.72)	17.1(5.39)	17.1(5.83)	1.07	1.72*	0.37	0.05
統制性(母)	32.1(6.66)	32.2(6.53)	33.5(6.74)	32.7(6.44)	1.67*	0.82	0.06	1.23
受容性(母)	37.3(8.01)	43.0(7.96)	39.0(7.75)	42.8(7.56)	1.70*	0.30	5.52**	5.04**
統制性(父)	32.8(7.17)	32.5(7.40)	33.1(7.26)	32.1(7.09)	0.33	0.38	0.30	1.22
受容性(父)	35.8(7.61)	37.7(8.55)	36.7(8.02)	38.2(8.70)	0.98	0.65	1.83*	1.88*
承認	28.6(5.68)	30.9(5.36)	28.3(6.04)	30.8(5.98)	0.46	0.17	3.19**	4.30**
被侵害・不適応	21.9(6.95)	18.5(6.10)	20.4(5.78)	18.3(5.31)	1.90*	0.40	4.02**	3.90**

()内は,標準偏差

* $p<.05$,** $p<.01$

また，親子関係診断尺度の母の「統制性」得点では学校差（男 $t=1.67, p<.05$ ）があり，母の「受容性」得点では学校差（男 $t=1.70, p<.05$ ）および男女差（A校 $t=5.52, p<.01$, B校 $t=5.04, p<.01$ ）が見られた。父の「受容性」得点では男女差（A校 $t=1.83, p<.05$, B校 $t=1.88, p<.05$ ）が認められた。学校生活満足度下位尺度の「被侵害・不適応」得点では，学校差（男 $t=1.90, p<.05$ ）および男女差（A校 $t=4.02, p<.01$, B校 $t=3.90, p<.05$ ）が見られ，「承認」得点では男女差（A校 $t=3.19, p<.01$, B校 $t=4.30, p<.01$ ）が認められた。

各尺度得点間の相関

各尺度の関連を見るために，各尺度得点間の相関係数を算出した。自己愛傾向下位尺度と学校生活満足度尺度の「被侵害・不適応」得点との相関結果は，「対人過敏性」得点（A校男 $r=.27, p<.01$, 女 $r=.22, p<.01$ ，B校男 $r=.25, p<.01$, 女 $r=.30, p<.01$ ），「回避性傾向」得点（A校男 $r=.26, p<.01$, 女 $r=.33, p<.01$ ，B校男 $r=.37, p<.01$, 女 $r=.34, p<.01$ ），「自己愛的な怒り」得点（A校男 $r=.19, p<.05$, 女 $r=.42, p<.01$ ，B校男 $r=.36, p<.01$, 女 $r=.39, p<.01$ ）で弱い正の相関が見られた。「承認」得点と「回避性傾向」得点（A校男 $r=-.39, p<.01$, 女 $r=-.43, p<.01$ ，B校男 $r=-.38, p<.01$, 女 $r=-.53, p<.01$ ）は弱い負の相関があり，「自己愛的な怒り」得点（A校男 $r=-.10$, 女 $r=-.23, p<.01$ ，B校男 $r=-.11$, 女 $r=-.05$ ）とはA校女子のみ弱い負の相関が見られた。また，「承認」得点と「対人過敏性」得点とは相関がなかった。

Table 6-1-3 A校における各下位尺度得点間の相関（男=103,女=156）

	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
対人過敏性	-		-													
回避性傾向	.57**	.41**														
自己愛的な怒り	.37**	.41**	.26**	.36**												
母統制性	.07	.12	-.04	.11	-.12	.02										
母受容性	.10	.12	-.07	-.15	-.11	-.11	.15	-.20**								
父統制性	.04	.06	-.05	.11	-.13	.09	.73***	.57**	.14	-.07						
父受容性	-.01	.01	-.18*	-.24**	-.10	-.19*	.10	-.13	.79***	.63**	.08	-.22**				
承認	-.05	-.09	-.39**	-.43**	-.10	-.23**	-.12	-.07	.30**	.24**	-.01	-.02	.17	.31**		
被侵害・不適応	.27**	.22**	.26**	.33**	.19*	.42**	.17	.13	-.11	-.17	.17	.07	-.14	-.21**	-.30**	-.18*

*** $P<.001$, ** $P<.01$, * $P<.05$

「対人過敏性」得点と母親の「受容性」得点(A校男 $r=.10$, 女 $r=.12$, B校男 $r=.24, p<.01$, 女 $r=.05$)とはB校男子のみ弱い正の相関があった。

「回避性傾向」得点と父親の「受容性」得点(A校男 $r=-.18, p<.05$, 女 $r=-.24, p<.01$, B校男 $r=-.25, p<.01$, 女 $r=-.09$)とは, A校男女とB校男子のみ弱い負の相関が見られた。

「自己愛的な怒り」得点と父親の「受容性」得点(A校男 $r=-.10$, 女 $r=-.19, p<.05$, B校男 $r=-.03$, 女 $r=.03$)とは, A校女子のみ弱い負の相関が見られた。自己愛傾向下位尺度と両親の「統制性」得点との相関はなかった。

Table 6-1-4 B校における各下位尺度得点間の相関 (男=190,女=251)

	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
対人過敏性	-	-														
回避性傾向	.29**	.48**	.	.												
自己愛的な怒り	.43**	.44**	.36**	.23**	.	.										
母統制性	.06	.17	.06	.09	.05	.02	.	.								
母受容性	.24**	.05	-.08	-.09	.09	.03	-.05	-.17	.	.						
父統制性	.03	.16	.14	.16	.01	.04	.64**	.57**	-.03	.01	.	.				
父受容性	.08	.08	-.25**	-.09	-.03	.03	-.05	-.09	.69***	.60**	-.09	-.16	.	.		
承認	-.10	-.11	-.38**	-.53**	-.11	-.05	-.19*	.01	.25**	.20**	-.16	-.06	.25**	.15		
被侵害・不適応	.25**	.30**	.37**	.34**	.36**	.39**	.05	.05	-.02	-.05	.03	.17	-.12	-.03	-.25**	-.24**

*** $P<.001$, ** $P<.01$, * $P<.05$

学校生活満足度下位尺度の「承認」得点と母親の「統制性」得点(A校男 $r=-.12$, 女 $r=-.07$, B校男 $r=-.19, p<.05$, 女 $r=.01$)とは, B校男子のみ弱い負の相関が見られた。「承認」得点と母親の「受容性」得点(A校男 $r=.30, p<.01$, 女 $r=.24, p<.01$, B校男 $r=.25, p<.01$, 女 $r=.20, p<.01$)とは弱い正の相関が見られた。「承認」得点と父親の「受容性」得点(A校男 $r=.17$, 女 $r=.31, p<.01$, B校男 $r=.25, p<.01$, 女 $r=.15$)とはA校女子とB校男子のみに弱い正の相関が見られた。「被侵害・不適応」得点と父親の「受容性」得点(A校男 $r=-.14$, 女 $r=-.21, p<.01$, B校男 $r=-.12$, 女 $r=-.03$)とはA校女子のみに負の相関が見られた。

また, 「承認」得点と「被侵害・不適応」得点(A校男 $r=-.30, p<.01$, 女 $r=-.18, p<.05$, B校男 $r=-.25, p<.01$, 女 $r=-.24, p<.01$,)とは弱い負の相関が見られた。

(3) パス解析によるモデルの検討

Table 6-1-3 と Table 6-1-4 の結果と高橋(2006a,2007a)の結果から,自己愛的な怒り 対人過敏性 回避性傾向と,自己愛的な怒り 回避性傾向へ単方向の矢印をひいた。さらに,親子関係が適応感と関連するという先行研究(佐賀,1973;佐藤,1968;大坪,1989;玉井,1979;谷井・上地,1994)から「親の受容的な養育態度は,自己愛を抑制するといわれるが,過敏な自己愛傾向を介在した場合には,学校生活における満足感へマイナスの影響を及ぼしている」と仮定して因果モデル図を設定した。

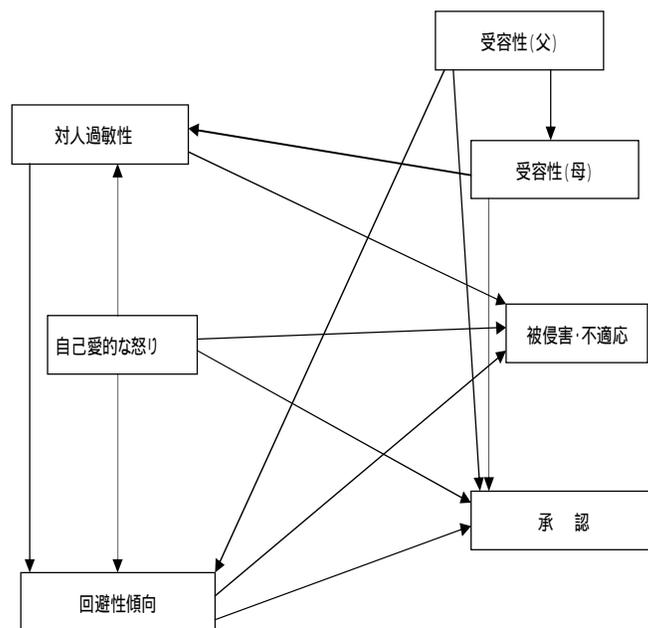


Figure 6-1-1. 自己愛傾向と親子関係, 学校生活満足感に関する因果モデル図 (誤差項省略)

また、本研究では、学校間と男女間の相違を確かめるために、A・B校のそれぞれの男女群として4群を設定し、全群に対して両親の受容性 対人過敏性 被侵害・不適応および両親の受容性 対人過敏性 承認という仮説パスモデル図を設定した。また、相関関係の結果から、父の受容性 回避性傾向および父親の受容性 承認という仮説パスモデル図も設定した。なお、この学校生活満足感を規定する2つの要因が各学校群と男女群で同じように作用しているかどうかを検討するために、多母集団の同時分析を行った。まず、パス係数を開放したモデルを検定した結果では、父親の「受容性」から「承認」へのパスはA校男-.13,女.14, B校男.02,女.02であり、「対人過敏性」から「被侵害・不適応」へのパスはA校男.15,女.00, B校男.08,女.05であり、「自己愛的な怒り」から「承認」へのパスはA校男.14,女.05, B校男.01,女.07となっており、これらは全群において因果係数が有意ではないと解釈してパスをはずした。

次に、パラメーター間の差が、母親の「受容性」から「対人過敏性」がA校男 1.641, B校女 0.683であり、「自己愛的な怒り」から「回避性傾向」がA校男 0.429, B校女 0.486となっていた。ゆえに、これらについても有意ではないと解釈され、パス係数に以下のような制約を入れて検討した。母親の「受容性」から「対人過敏性」および「自己愛的な怒り」から「回避性傾向」においてA校男子とB校女子の係数を0に固定した。

さらに、「自己愛的な怒り」から「対人過敏性」へのパスがA校男.39,女.43, B校男.42, 女.43であり、有意な差がないと思われるので、等置制約を入れて検定を行った。以上の結果はFigure 6-1-2に示した(図中の矢印は有意であったパスを表し、数値は標準化パス係数を表している)。本研究におけるモデルの適合度の結果はGFI=.974, AGFI=.942, CFI=.983, RMSEA=.023で満足のいく数値を示し、十分に適合しているといえる。

その結果、直接効果として、全群で、父親の「受容性」は「回避性傾向」へ負の影響を及ぼし、「回避性傾向」は「承認」へ負の影響を及ぼしていた。さらに、全群で、父親の「受容性」は母親の「受容性」へ正の影響を及ぼし、母親の「受容性」は「承認」へ正の影響を及ぼしていた。間接効果としては、A校女子とB校男子のみで、父親の「受容性」が母親の「受容性」へ正の影響を及ぼし、母親の「受容性」が「対人過敏性」と「回避性傾向」を介在して「承認」へ負の影響を及ぼしていた。また、間接効果として「自己愛的な怒り」から「回避性傾向」を介在して「承認」へ負の影響が及ぼされていた。もう一方の間接効果としては、全群で「自己愛的な怒り」から「対人過敏性」と「回避性傾向」を介在して「承認」へ負の影響と「被侵害・不適応」へ正の影響が及ぼされていた。直接効果として

は、全群において「自己愛的な怒り」から「被侵害・不適応」へ正の影響が及ぼされていた。

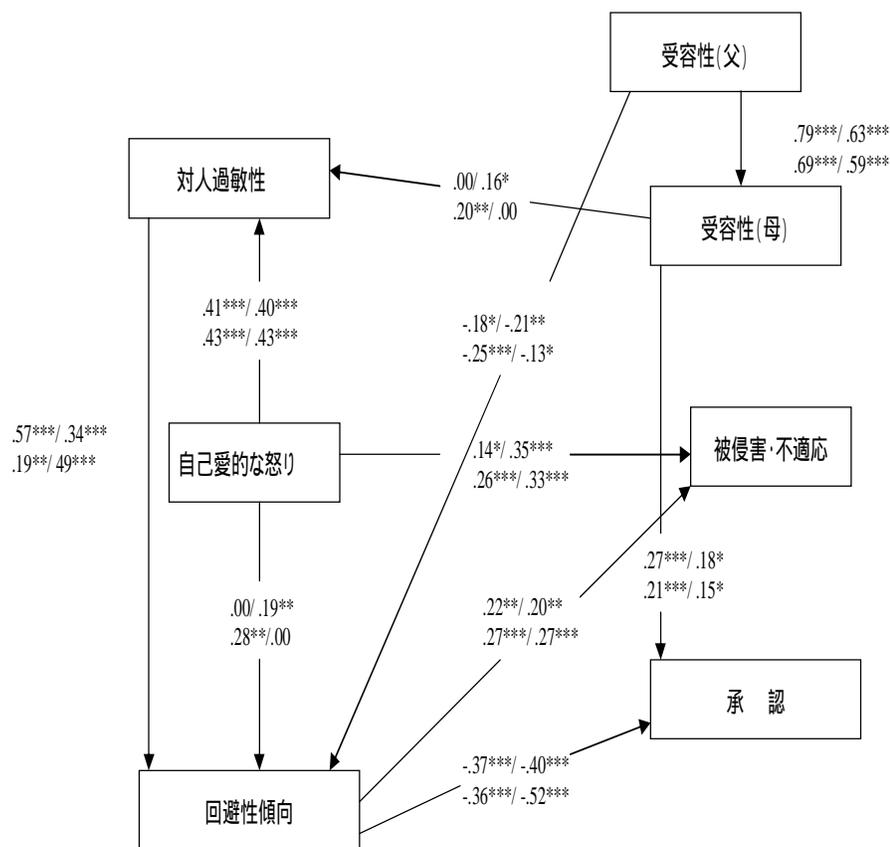


Figure 6-1-2. 自己愛傾向と親子関係、学校生活満足感に関するパス図

GFI=.974
AGFI=.942
CFI=.983
RMSEA=.023

注1) * $P<.05$, ** $P<.01$, *** $P<.001$
 注2) 上段は, A校男女, 下段は, B校男女
 注3) は直接観測される変数(誤差項省略)

6.1.4 考察

本章の目的は，親の養育態度が，自己愛傾向と学校生活満足感へ関連すると仮定して検討を行った．また，これらの関連は，学校間と男女間によってどのような違いがあるのかも検討した．

(1) 各尺度間の関連

本研究における「対人過敏性」と「回避性傾向」は，対人関係における過敏さを示す自己愛傾向を意味しており，「自己愛的な怒り」は，誇大的で傲慢な自己愛傾向を意味するものであった(Takahashi,2004,高橋,2006a)．この自己愛傾向下位尺度と学校生活満足度尺度との相関関係の結果，「被侵害・不適応」と「対人過敏性」，「回避性傾向」，「自己愛的な怒り」で有意な正の相関を示していた．つまり，自己愛傾向得点が高くなるほど学校生活での「被侵害・不適応」感が高くなるということが示された．また，「承認」と「回避性傾向」とは，男女ともに有意な負の相関があった．さらに，「承認」と「自己愛的な怒り」とは，A校女子のみで有意な負の相関があった．これは男女とも「回避性傾向」得点が高くなるほど，学校生活での承認感は低くなるということが示されたのである．したがって，本研究では，先行研究(Takahashi,2005,高橋,2006a)における誇大性を伴う過敏なタイプの自己愛傾向は，学校生活における満足感を抑制する要因になるということを追試する結果になったといえる．

また，学校生活満足感と親の養育態度との相関結果では，母親の受容的な養育態度と学校での「承認」とは，全群で正の相関が示された．父親の受容的な養育態度と「承認」とは，A校女子とB校男子が正の相関を示し，「被侵害・不適応」とは，A校女子のみが負の相関を示していた．これにより親の受容的な養育態度と学校生活満足感が正の関連をしていると考えられる．

自己愛傾向と親子関係との相関結果では，「対人過敏性」と母親の受容的な養育態度が，A校男子で弱い正の相関を示していた．父親の受容的な養育態度と「回避性傾向」では，A校男女とB校男子で弱い負の相関を示し，「自己愛的な怒り」とは，A校女子で弱い負の関連が示された．理論的な先行研究では，自己愛の障害が起きる要因として，親の養育

態度が関連することが論じられており (Kernberg, 1975; Kohut, 1971, 1977) ,最近の実証的研究でも「親の暖かく受容的態度が自己愛傾向になるのを抑制する」という結果が示唆されている (宮下, 1991) . しかしながら, 本研究においては, 母親の受容的な養育態度が, B 校の男子においては「対人過敏性」を助長することが考えられ, 父親の受容的な養育態度は, 回避的な自己愛傾向を抑制することが推測された .

(2) 親子関係と自己愛傾向および学校生活満足感との因果関係について

本研究では, 親子関係が自己愛傾向を介在して学校生活満足感へ影響するという因果モデル図を作成し検討を重ねた結果, Figure 6-1-2 のようなパスモデル図が描かれた .

先行研究で, 親が情緒的に安定して受容的な養育態度である場合には, 自己愛傾向が抑制されると指摘されている (宮下, 1991) . ところが, A 校女子と B 校男子において, 父親から母親を介在した両親の「受容性」は, 「対人過敏性」へ正の影響を及ぼしており, 過敏な自己愛傾向が助長されることが明らかとなった .

次に, この「対人過敏性」から「回避性傾向」を介在して「被侵害・不適応」と「承認」へ及ぼす影響には, 父親の「受容性」が「回避性傾向」を抑制する作用によって, 「被侵害・不適応」が抑えられる結果となった . 同様に, 父親の「受容性」は「回避性傾向」を介在して「承認」を促すように作用していた . これは相関分析でも父親の「受容性」が A 校女子と B 校男子のみにおいて「回避性傾向」を抑制する相関関係であった . ところが, パス解析における父親の「受容性」は, 全群で「回避性傾向」を抑制するように作用しているのか, 間接的には学校生活満足感にプラスの作用をしていることが明らかとなった . とくに, 女子にとって, 回避的な自己愛傾向を抑制させ学校生活を満足させるためには, 父親の受容的な養育態度が重要であることが示唆されたといえる .

これらの結果から, 両親の受容的な養育態度は, 過敏なタイプの自己愛傾向を助長するが, 父親の「受容性」は, 「回避性傾向」を抑制するように作用することが明らかとなった . しかし, ここに「自己愛的な怒り」の強い正の影響が加わることで, 過敏なタイプの自己愛傾向は増長され, 学校生活満足感が抑制されることが示唆されたのである .

この親の養育態度と過敏な自己愛の関連について、町沢(1998)が「子どもたちが過保護のもと特別扱いされ養育されてきたことが、自己愛者を生み出す要因である」と述べている。さらに、自己愛と関連する対人恐怖症患者の親子関係を調査した先行研究では「その多くが、親の養育態度に対して、愛情に欠ける一方で過保護であるとの印象を持っている」と報告されている(Paker et al.,1979)。したがって、親の受容的な養育態度が、じつは過保護なだけで愛情に欠けるようであるならば、Kohut(1971,1977)のいう早期幼児期に、親から誇大的な自己愛を承認されることなく養育されており、自己愛的憤怒を秘めることになる。このような自己愛者は、他者から特別扱いされることを期待するが、これが得られない場合には極端に軽視されたと感じ、これを恥として捉えるといわれる(岡野,1998; Gabbard, 1994)。つまり、彼らは、自己評価の保持を他者に依存しているために、過敏で傷つきやすくなっていることが学校生活満足感を抑えることになると考えられる。

一方、父親の受容的な養育態度は、回避的な自己愛傾向を抑制することから学校生活満足感にプラスの作用が示されていた。これについて谷井・上地(1994)が、親の支持的な関係に支えられた子どもは、そうでない場合に比べて心理的に安定しやすいことを指摘している。すなわち、他人や外的環境と折り合いをつけて生きていく志向性を、父親から提示される機会が多いと思われる。ゆえに、子どもも対人場面などから回避するのではなく、適応に関するスキルを見につける可能性が高いことが考えられる。

また、谷井・上地(1994)が、父親の受容は男子の適応感へプラスの作用を与えることを報告しているが、本研究において、父親の受容性は、女子のほうが学校生活の適応に対して強い正の影響を与えることが示唆されたのは大きな成果である。

以上のことから、本研究では「誇大型」と「過敏型」の混合した自己愛傾向は、過敏で傷つきやすいことから適応性が低い(中山・中谷,2006)という見解を支持する結果になったといえるのである。

本研究における男女間の相違としては、「自己愛的な怒り」から「被侵害・不適応」への正の影響が女子のほうが男子より有意な数値であった。先行研究(高橋,2006a)では、誇大的な自己愛をもつ女子は、他者からの承認欲求が得られない場合には、自己評価が低下し、恥や傷つきの感情が強くもたらされることが報告されている。これについては先に記したように、他者関係の中で自己評価を決める傾向が女子にはみられ(山本ら,1982)、他者から「誇大的な自己愛」を認めてもらえないことが外的評価と内的評価間において葛藤を生じさせることになり、これが学校生活での満足感を抑制するように作用すると考えられる。

次に，父親と母親を介在した両親の「受容性」から「承認」への正の影響は，男子のほうが女子より有意な数値であり，性差の結果と反対であった．これについて谷井・上地(1994)が，高校生における親役割と学校適応感の研究のなかで，「分離不安は母娘間に通常見られる情緒的に安定した関係の中で伝達される場合には間接効果により，適応感にマイナスの作用をしないが，情緒的に不安な関係ならば，マイナスの影響を与える」ことを示している．すなわち，自己愛傾向の母娘間では，情緒的に安定した関係と捉えられないので，母親の「受容性」のなかに「分離不安」が潜んでおり，これが学校生活満足感を抑制することになると考えられる．その反面，母親から理由もなく避けられることからくる不安を感じることなく育ってきた男子は，安定した母子関係を築いているのであろう．その場合，母親をサポート源として捉えられることが学校生活満足感を促すことになると考えられる(鈴木ら,1995)．

A校とB校との学校間の相違はほとんど見られなかったが，「自己愛的な怒り」から「回避性傾向」を介在して「被侵害・不適応」へは，A校よりB校のほうが，より有意な正の影響が及ぼされていた．そして，性差の結果でも「回避性傾向」得点の数値は，B校の生徒のほうが高く，また，「回避性傾向」と「被侵害・不適応」との相関関係の結果も，B校のほうが有意な正の相関が示されていた．つまり，A校の生徒よりB校の生徒のほうが，自己愛の怒りを伴う傷つきやすい自己愛傾向が高いことが考えられる．このような自己愛者は，人から注目されたいという欲求や有能であるという誇大感を認識することで対人恐怖的な心性を増長させるといわれている(清水・海塚,2002)．また，彼らは，自分自身の内面に目を向けることを回避し，自分自身の葛藤にも目を背ける傾向があることも指摘されている(岡田,1993)．それゆえに，A校の生徒よりB校の生徒のほうが，集団内において積極的な対人関係を持つという行動が困難となり，学校不適応へ傾斜するということが懸念されるのである．

以上のことから，両親の受容的な養育態度は，過敏な自己愛傾向を介在する場合には，学校生活満足感へマイナスの作用を与えることが明らかとなった．また，両親の受容的な養育態度が直接的な影響を及ぼす場合には，学校生活満足感にプラスの作用を及ぼすことが示されていた．さらに，回避的な自己愛傾向を抑制し，学校生活へ適応させるには，女子では父親の受容的な養育態度が重要であることが示唆された．

(3) まとめ

本章では，傷つきやすいタイプの自己愛傾向に視点をおき，親の養育態度と自己愛傾向が学校生活への適応に対してどのような影響を及ぼすのかを検討した．そして，学校生活満足感を規定する2要因が各学校群と男女群で同じように作用しているかどうかを探るために，多母集団の同時分析を行った．その結果，両親の受容的な養育態度は，過敏な自己愛傾向を介在する場合には，学校生活満足感へマイナスの作用を与えることが明らかとなった．また，両親の受容的な養育態度が直接的な影響を及ぼす場合には，学校生活満足感にプラスの作用を与えることが示されていた．さらに，回避的な自己愛傾向を抑制し，学校生活へ適応させるには，父親の受容的な養育態度が重要であることも示唆されたのである．

第7章

本論文の総括的討論

本論文の目的は、高校生の自己愛傾向の特徴を探り、これが学校生活への適応に対してどのような関連をするのかを解明することであった、そのために第1章では、さまざまな自己愛理論や自己愛に関する実証的な先行研究を概観した。そして、第3章から第6章においては、自己愛傾向尺度を用いた実証的な研究について検討してきたわけである。そこで本章では、理論的・実証的な先行研究から得られた知見に基づいて、本研究の結果を総合的に検討したうえで、今後の研究課題にしたいと考えている。

7.1 本研究で得られた知見

第1章では、自己愛の障害について Kohut の理論を中心にして、Kernberg やその他の理論も交えて先行研究を概観した。そして、自己愛障害の大枠として次のようなことが明らかになったと思われる。

自己愛の障害には、誇大的・自己顕示的で他者の反応に鈍感で、共感性の欠如がみられる。そのうえ、自己のまとまりの脆弱化・断片化と他者の反応に過敏で、それによる傷つきやすさ、空虚感および抑うつ傾向が認められることもある。

自己愛障害に至る要因として、早期幼児期に、誇大自己や本当の自己を認められたい、強い親との融合欲求を満たしてほしい、不安や感情を鎮められたいという子どもの欲求に親の応答が不十分であったと考えられる。

自己愛障害の本質を Kohut は、心理的安定や自己評価を維持する心理的機能の脆弱性といい、心的構造、自己評価、健康な野心、理想などの形成が妨げられていると

指摘している。

このような障害を抱えた自己愛者は、これらの欠損を補うために他者からの承認・賞賛を強く求めたり、理想化された外的対象との融合を求めたりする。

彼らは、自己評価を維持するための自己愛的防衛を強くする必要性があり、他者への共感性を欠くことになる。

自己愛人格障害については、以上のようなことが理論的・実証的先行研究において提唱されている。しかし、本研究では、一般的な高校生の自己愛傾向が学校生活へ及ぼす影響について検討したものである。そこで次は、第2章において本論文の問題意識を挙げて実証的な研究を実施し明らかになった結果を述べてみる。

[研究1]では、鈴木(1999)が作成した Kohut 理論に基づく自己愛の尺度を高校生 336 名(男 142 名,女 194 名)に実施して、再検討を行った。結果として Kohut(1971,1977)の唱える自己愛の誇大的な側面と過敏な側面を意味するものであることが確認されたが、大学生用であったため、高校生には回答が困難であったことと、傷つきやすさが加えられていないことから再構成し直すことにした。

そして、[研究2]では、本尺度を平易な項目群としたものに傷つきやすさの項目を加えて自己愛傾向尺度を作成した。これを高校生 344 名(男 137 名,女 207 名)に実施して、探索的因子分析を行うことで、「対人過敏性」「回避性傾向」「自己愛的な怒り」の3因子構造になることを確認した。さらに、これらの因子は男女共通に見られ、各因子が相互に正の相関にあり、内的整合性も十分に示された。また、MPI との有意な相関も見られ、傷つきやすさを伴う2類型の自己愛傾向を評価するものとして妥当であることが示された。

[研究3]では、高校生 593 名(男 229 名,女 364 名)を調査対象者として、承認欲求と傷つきやすさを伴う自己愛傾向が、学校生活満足感へどのような影響を及ぼしているかを検討した。結果として、[研究2]において構成された自己愛傾向尺度に確認的因子分析を実施し、3因子構造になることが認められた。また、誇大性を伴う過敏なタイプの自己愛傾向は、男女とも承認欲求からの影響を強く受けていることが明らかとなった。さらに、この承認欲求は、傷つきやすさを伴う自己愛傾向を介在した場合には、学校生活における満足感にマイナスの影響を及ぼすことが明らかとなった。

[研究4]では、学校には登校しているが、登校への忌避感情を抱えている不登校潜在群

の高校生に焦点をあて、彼らの自己愛傾向と基本的信頼感との関係について検討を行った。そして、高校生には学校忌避（回避）感情が広がっていることが明らかとなり、これが不登校へつながるのではないかと心配される結果であった。また、学校忌避感情の高い生徒のほうが自己愛傾向者の特徴である基本的な信頼感は不安定なものであることが示された。

[研究5]では、A公立高校1年生259名(男103名,女156名)とB公立高校1年生441名(男190名,女251名)を調査対象として、親の養育態度と自己愛傾向および学校生活満足感との関係について検討を行った。結果として、両親の受容的な養育態度は、直接的には学校生活満足感へ正の影響を及ぼしていることが明らかとなった。しかしながら、両親の受容的な養育態度が傷つきやすさを伴う自己愛傾向を介在する場合には、学校生活満足感へ負の作用をすることが明らかとなった。また、女子では、父親の受容的な養育態度が、自己愛傾向を抑制し学校生活満足感を促すために重要であることが示唆された。

7.2 本研究で得られた成果の討論

本論文の目的は、高校生を対象として、彼らの誇大性を伴う傷つきやすい自己愛傾向の特徴を明らかにし、学校生活における適応との関連を検討することであった。

そして、第一には、自己愛傾向の特徴を探るため、Kohut(1971,1977)の自己心理学に基づき作成された2種類の自己愛傾向尺度が、どのような下位側面で構成されているのかを明らかにすることであった。第二には、学校生活に対する適応感を得るための要因は多く存在するが、この要因の一つである自己愛傾向の諸特徴が及ぼす影響について検討することであった。それゆえに、他者に対する承認欲求と自己愛傾向および学校生活満足感との関連を検討した。さらに、学校忌避感情に注目して自己愛傾向と基本的な信頼感との関連を検討することから自己愛傾向者の自己と他者との関係を明らかにした。第三には、自己愛傾向と親の養育態度との関係が、学校生活への適応に対してどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることであった。

以上のような目的で1～5の研究を行った結果を前節にまとめたが、次は、これら1～5の研究で得られた成果について討論し、本論文の問題点や今後の課題について言及していきたいと考えている。

7.2.1 自己愛傾向の3つの下位側面

本論文における第1の課題は、Kohut(1971,1977)理論に基づいて作成された2種類の自己愛傾向の下位側面が、どのような特徴を持つのかを明らかにすることであった。そこで、以下において、[研究2]、[研究3]、[研究4]、[研究5]の結果から得られた成果について検討する。

(1) 対人過敏性

「対人過敏性」は、[研究2]における自己愛傾向の第1因子として見いだされ、人から嫌われること、批判されること、拒絶されることなどを極度に恐れ、傷つきやすいなどの特徴が認められた。そして、MPIの神経症的傾向との関係が強く、神経質、敏感、不安、苦労性などの情緒的な不安定さが見られ、対人関係において過敏であることが明らかとなった。[研究3]では、他者からの承認欲求が強いことが明らかとなったうえ、[研究4]でも、自己への基本的信頼感が少ないことが示されたことから、本下位尺度は、極端に否定的な評価をされている自己イメージが存在すると思われる。それにより自信を喪失し、心理的安定を維持する能力が弱くなっているなどを示す側面であると考えられた。

先行研究(清水・海塚,2002)では、「過敏型」の自己愛人格は、人から承認や賞賛を受けたいと思ったりすることで、自分自身に対しての対人恐怖的な心性を助長させるという特徴が示されていた。そして、谷(1997)や永井(1994)は、日本のように相互協調的な自己観を文化背景に持つ国では、一般的な若者においても「関係」の中で、自己の喪失に対する懸念や「関係」に対する過剰な配慮など対人恐怖の特徴がみられることを指摘する。また、Erikson(1959,小此木訳,1973)も、自我同一性が十分に形成されていない青年期には、対人関係が深まることに対して同一性の喪失を引き起こしそうな対人融合への恐れを抱き、関わりあうことに気を遣うなど、形式的対人関係にとどめようとする傾向を指摘している。

一方、この対人恐怖的な心性は、自らの低い自己評価の下で生じやすいといわれており

(岡田・永井,1990), 自己愛との関連も指摘されている。これについて岡野(1998)が, 現代的な精神分析の視点から, 対人恐怖者のもつ性格構造は自己愛の病理として捉えられると説いている。すなわち, 自己愛者が抱える「恥」と「対人恐怖心性」とは同一線上にあると考えられるのである。

また, 本研究の「対人過敏性」は, NPI-S の「注目・賞賛欲求」と有意な正の相関が示されていた(Takahashi,2004)。これは自己肯定感とも捉えられるが, 他者からの否定的な評価によって容易に崩れてしまうような不安定なものであるともいわれている(小塩,1998b)。つまり, 対人過敏性が強い人は, 抑うつ感や情緒の不安定さなどの情緒的問題や空想性, 協調性欠如などの社会不適応性が強いといえるのである(相澤,2002)。これと同様に「対人過敏性」には, 単なる自己に対する肯定的な感覚としての有能感ではなく, ある意味での自己に対する誇大的な感覚が存在するともいわれる(上地・宮下,1992)。それゆえに, 対人場面において他者からの評価を気にして自意識過剰となり, 過敏な反応をすることも考えられる。このような自己愛の障害に至った要因について, Kohut(1971,1977)は「理想化された対象である親との関係において, 突然にあるいは時期相応でない落胆に出会っており, 子どもは内的な構造を獲得出来ず, その心は太古的なままに留まっている。そして, そのパーソナリティは人生を通して, 一定の対象に依存的になる。こうした他者への依存の強さは心的構造の失われた部分の代理として探し求められる」と述べている。

すなわち, 対人関係で過敏に反応するのは, 確固たる内的構造が獲得できていないことであり, これにより情緒的安定性を欠き自己肯定感が容易に崩れてしまいそうなるため, 他者からの承認を集めたいという欲求を示すということが明らかになったといえる。

(2) 回避性傾向

「回避性傾向」は, [研究2]における自己愛傾向尺度の第2因子として見いだされ, 人とのコミュニケーションがうまくできないことや大勢の人の注目を浴びることが苦手であるなど人との関わりを避ける傾向があるという感受性の鋭さを表していた。また, 自己愛の傷つきを恐れることなどが認められた。[研究2]におけるMPIとの関連では, 神経症的傾向より内向性と強く関連しており, 控えめで気兼ねしすぎるところが強く, 抑うつ的で

他者を気にするところもあるので、社会への適応が難しいことが明らかとなった。

さらに、[研究3]では、他者からの承認欲求との強い関係が示され、[研究4]においては、自己への基本的信頼感と対人的信頼感が少ないことが示されていたことから、他人に認められたい、評価されたいという欲求がありながらも、自らの低い自己評価と他者を信頼できないことから、対人場面での傷つきを恐れ引きこもってしまうという側面であると考えられた。

そして、[研究3]と[研究4]の結果では、自己愛的な怒りとの間に正の相関が認められた。すなわち、回避性傾向には、自分自身の内面における情緒的な側面に目を向けることを避けることや自分自身の葛藤からも目を背けているところがあると考えられる。そのうえ、自己評価が低められるようなことがらに遭遇すると自己愛的な憤怒が表れ、これにより恥が喚起されることから対人関係を回避するものであると予想された。つまり、回避性傾向は、回避性人格障害における他者に受け入れてもらいたいという感情については同じであるが、自分は他人に何かをしてもらうだけの価値がないとは考えていないところに相違があるといえるのである。

これについて Kohut は、自己心理学の視点から、対人接触をさげ孤立する回避性傾向の自己愛障害を挙げ「彼らは他者に関心がないのではなく、他者への希求があまりにも強すぎるために、無意識のレベルですべてを包み込む融合体験によって自分自身の中核自己が飲み込まれ破壊されるという恐怖感もっているのであろう」と説明している。

このような対人恐怖を抱えるものにみられる精神力動として、脆弱な自己愛を保護するために、対人関係や社会的活動を回避するという特徴が認められるといわれている(近藤,1999)。また、町沢(1998)も「自己愛が強いからこそ、人と深く関わることを恐れる」と自己愛の障害には対人恐怖が絡んでおり、対人関係を回避しようとする行動することを指摘している。

なお、これは Broucek(1991)のいう対人恐怖傾向を含み引きこもりがちで恥の感覚の強い性格である自己愛人格障害の「解離型」や岡田(1993)のいう顔見知りから親密な関係に発展することに困惑を感じたりするもので、対人関係において情緒的關係が深まらず機械的形式的關係に留まってしまうという「ふれ合い恐怖心性」に類似していると考えられた。

(3) 自己愛的な怒り

「自己愛的な怒り」は、自分が批判されることや気持ちを察してもらえないことで腹が立つなど、他者からの特別な配慮や敬意を期待し、それが得られない場合には不満や怒りを生じることが示されている。[研究2]における MPI の外向性 内向性との関連は認められなかったが、神経症的傾向とは弱い関連があり、対人関係で過敏なことが示されていた。[研究3]では、他者から承認されたいという欲求は強く持っていることが示されていた。そのうえ、「対人過敏性」と「自己愛的な怒り」とは正の相関が示されていたことから、他者からの承認が得られないと対人関係で過敏になり傷つきやすくなるし、特別扱いや配慮が得られないときにも傷つきやすくなるということが推測された。

なお、この傷つきやすい人が表す激しい自己愛の怒りを、Kohut は「自己愛的憤怒」と呼んだ。この怒りは、外的対象にも容赦がなく放出されるのである。この容赦のなさ、収まらなさ、残忍さは、自己が崩壊するときのものであるから理性的な対応が出来ないともいわれており、他者への共感性を示す余裕のないことが推測される。

また、[研究4]では、この「自己愛的な怒り」と自己への基本的信頼感と対人的信頼感とは負の関連が示されていた。この結果から、自己への肯定的な評価は低く、他者への不信は強いことが明らかとなった。さて、DSM- による自己愛の賞賛の欲求は、他者に受け入れられることは当然という感覚に基づいたものであり、自己のポジティブな側面を肯定しているので、あえて自分を好ましく見せ、他者に受け入れられる必要はないといわれている(小塩,1997)。だが、Kohut 理論に基づく「自己愛的な怒り」とは、他者に受け入れられたいと思っていることが、自己のネガティブな側面を否定してよく見せようとすることに繋がっており、NPI で測定される自己愛とは様相が異なっている。これについて Kohut が「親の鏡映が不十分であつたり歪んでいたりすると子どもの自己は損傷を受け、自己愛的怒りが生じる。そして、自己を傷つけられる不安から、この欲求を意識から排除するのである」と述べている。それゆえに、彼らが自信に乏しく傷つきやすいのは、自己の底に隔絶された誇大自己と自己愛的怒りが潜んでいるからであるといわれている(上地・宮下,1992)。従って、自己評価が低められるようなことがらに遭遇すると憤怒が内在されるものと考えられるが、これは極端に軽視されたように捉える傾向であり、激しい緊張や恥を感じるものと考えられる。これは Kohut(1971,1977)のいうところの自然な自己顕示を表

せないことであり，自己愛的な傷つきによる恥を怒りという形で表出させるという誇大的な側面を示していると考えられた．

(4) 自己愛傾向全体の諸特徴

米国精神医学会(APA,1994)における自己愛人格障害の診断基準は，誇大性，承認・賞賛欲求，共感性欠如である．また，さまざまなNPI尺度で測定される自己愛も，誇大的で肯定的な一側面に焦点を当てたものが多くみられる(Raskin & Hall,1979; Emmons,1981,佐方,1986;大石,1987 など)．ところが，本研究における自己愛傾向尺度は，「対人過敏性」「回避性傾向」「自己愛的な怒り」という3つの下位尺度からなり，これらは「無関心型」と「過敏型」(Gabbard,1994)という二つの側面に焦点を当てたものである．これらの下位尺度は，ひとまとめになって自己愛傾向を構成することになるが，他の尺度との関連で明らかのように，それぞれが独自の意味内容を持っている．

たとえば，まず「自己中心型(Broucek,1982)」「厚皮の自己愛(Rosenfeld,1987)」「無関心型(Gabbard,1989)」は，誇大的で攻撃的，自己中心的で他者の反応にあまり関心を示さないうえ，他者からの評価を気にするが，他者不信のため誰にも依存できないという特徴が示されている．これは本研究の「自己愛的な怒り」に相当する特徴であると考えられた．

この「自己愛的な怒り」の意味する側面は，[研究3]の結果から，Kohut(1977)が述べる「自己をすばらしいものと感じようとして，常に他者からの承認や賞賛を求めている」という側面が認められた．その反面，[研究3][研究4][研究5]の結果では，「対人過敏性」や「回避性傾向」と有意な正の相関が示され，傷つきやすさや不安，抑うつ的な特徴を秘めているという背反する側面も示していた．これについて Miller(1979)は，自己愛者の特徴として，本当の自己の喪失に伴う「抑うつ」とそれへの防衛としての「誇大性あるいは誇大的空想」を挙げている．すなわち，この2つは表裏一体であり，誇大性の裏には抑うつが潜んでいることを指摘している．したがって，本研究の「自己愛的な怒り」は，この抑うつ的な特徴を表面化させないように否定して，自己愛的な防衛をしていることが考えられる．なお，この自己愛的な防衛は感情の否認であり，現実に対する知覚の否認ではないといわれている(上地・宮下,1992)．

この自己愛的防衛について、Modell(1975)は「子どもが自己感覚を発達させるときに、母親の側に問題があり母親があてにならないという知覚をもつと、母親からの侵入を防ぐ必要に迫られる。それゆえに、母親からの早期の分離と早熟な自己形成が起きる。ゆえに、この自律感覚を守るために自己愛的防衛が生じる」といい、Kohutと同様に早期幼児期における親の養育態度が要因となることを説いている。そのうえ、自己愛人格障害者においては「本当の感情を他者に伝えられないだけでなく、自分自身の感情の体験からも切り離されている」ことや「誇大性あるいは誇大的空想」を持つことが、彼らの不安やその他の苦痛な感情から自分自身を守る防衛的方策であることを指摘している。

さて、もう一方の「解離型(Broucek,1982)」「薄皮の自己愛(Rosenfeld,1987)」「過敏型(Gabbard,1989)」は、抑制的で引きこもりがち、他者からの評価や反応に敏感であるという特徴を持つことが指摘されている。これは本研究の「対人過敏性」と「回避性傾向」に当たると考えられる。

この2つの下位尺度は、[研究3]においてMPIの「神経症的傾向」や「内向性」と正の相関を示し、NPI-Sの「優越感・有能感」や「自己主張性」とは負の関連があった(Takahashi,2004)。つまり、これらの下位尺度は、Kohut(1971)が述べるように、自己愛に関連した精神的な苦痛や緊張をうまく処理して、心理的安定を保たせる力が弱いために、自己愛の平衡を危うくするような場面に遭遇するとそこから回避するという側面を意味していると考えられる。ゆえに、この2つの下位尺度の高い人は、不安や傷付きを体験しやすく、抑うつ的になりやすいことが示されたといえる。

また、[研究3]と[研究5]では、「対人過敏性」のほうが「回避性傾向」より、「承認欲求」との相関関係の係数も、「自己愛的な怒り」からの正の影響も高い結果であった。これは過敏なタイプの自己愛であっても「対人過敏性」のほうが承認・賞賛欲求や潜在的な誇大性をより強く秘めていることがうかがえる。すなわち、これは特別扱いや配慮が得られないときの傷つきやすさであり、有意に高い関連がみられたのはこの両者が併存することを示唆しているといえよう。

また、「回避性傾向」は、他の下位尺度と異なり[研究3]と[研究5]では、学校生活満足度下位尺度の「承認」とは負の関連がみられた。先行研究(高橋,2003)においても、NPI-Sの下位尺度の「自己主張性」や「注目・賞賛欲求」との負の相関が認められた。これらの結果から、回避性傾向が高いものは、親から共感の域を超えた過剰な賞賛を向けられたり親が子どもに対して親自身への理想化を過度に求めたりして養育されてきたことが考えら

れる。これについて Kohut(1977)は、親の養育態度がそのようであった場合には、親への接近が自己の平衡を危うくするため、子どもはこれを回避しようとするようになると述べている。そして、子どもは、承認されたいが、注目や賞賛はされたくないという矛盾する感情を持つようになることが考えられる。すなわち、子どもが偉くなるという空想をすると苦痛や緊張を生むために、これを避けるため自己顕示を抑制するように作用すると考えられる。これが積極的な活動から退いたり、対人接触を阻害したりする方向へ影響を及ぼすことが考えられる。

7.2.2 自己愛傾向と自己および他者との関係について

本論文における第2の課題としては、自己愛傾向を下位分類して、その諸特徴を明らかにすることであった。自己愛人格障害の特徴について、DSM- (APA,1994)には、自分の能力を過大評価したり自分の業績を誇張したりするなど、自己の重要性についての誇大感が記載されており、自己洞察力の欠如が診断基準の一つとなっている。さらに、NPI を用いた研究のなかでも、自己愛傾向の高いものは、自己洞察に欠けること(Emmons,1981)や自己評価における正確さに欠けること(John & Robins,1994)などが指摘されている。また、小塩(1999)の研究では、自己愛傾向の高いものは、周囲のものからそのように思われていなくても、自分は信頼されているという信念は持っているというところが、自己愛者における自己への過大評価であり、自己評価における正確さの欠如に当たると報告されている。

その一方で、理論的研究(Kernberg,1975;Kohut,1971,1977)や先行研究(葛西,1989,1990)では、自己愛者は、他者からの肯定的な評価を欲しがり、対人関係で過敏になるが、他者への猜疑的な態度は強いことが指摘されており、他者への信頼感も安定していないと考えられる。

本研究における[研究2]と[研究3]の結果で、自己愛傾向全下位尺度は MPI の神経症的傾向との正の相関から情緒的な安定性に欠けることが示されており、また、承認欲求が強いことから他者から承認・賞賛されることで自己を肯定的に定義づけようとしていることが示された。しかしながら、「誇大的」な自己愛傾向から「対人過敏性」と「回避性傾向」という過敏な自己愛傾向を介在することで、恥や傷つきやすさの意識を伴うのか他者からの承認感へは負の影響を及ぼすことが明らかとなった。つまり、他者から肯定的な評価を受けていないと感じているのである。一般的に、ある種の適応障害者は、現在の自己の姿

を、否定的・消極的に見ようとするといわれるが、[研究4]の結果では、自己愛傾向者には自己への信頼感がないことから、ネガティブな側面を否定することで自己評価を保持していることが推測された。また、高橋(2006b)は、日米大学生の自己愛傾向に関する研究のなかで、日本の青年は、表面的には過剰警戒的でうつ的なものを表しているが、内面には肯定的な他者評価を欲しており、それが期待通りでないときには傷つくことを報告している。すなわち、これが“自己愛的傷つきやすさは自己愛的憤怒と最も強い関係を示す(相澤,2002)”といわれている所以であると思われる。ところが、他者からの否定的な評価を受けた場合の自己愛的な怒りは、なるべく見ないようにしている否定的な自己イメージを定着させることに繋がり、全く予期されないものとして自己評価を低めることになると考えられる。これを Kohut(1971,1977)の論じる自己評価の維持という視点で捉えてみると「『誇大型』の自己愛傾向および『過敏型』の自己愛傾向ともに、他者による評価を重要視しているにもかかわらず、他者から自己価値が低められるような状況が起きた場合には、自分自身の中に不安感が生じ、対人関係を回避することで不安定な自己評価を維持しようとする」ことであると考えられる。

これらのことから本研究における「誇大型」の自己愛傾向および「過敏型」の自己愛傾向ともに、否定的な自己への評価を無視することで自己を肯定しているという点では、正確な自己への認識を欠いているといえる。従って自己愛に障害を持った場合には、妥当な「自己評価」としての「肯定的な自己」を捉えることができないために、これを保証してくれる他者を必要としているのである。その一方で、[研究4]の結果において、学校忌避感情が高い場合は、誇大的な自己愛傾向を伴う過敏で回避的な自己愛傾向が高く、他者への基本的信頼感もないことが示された。すなわち、先行研究で指摘されるように、心からの他者信頼はないと捉えられるのである。

この基本的な信頼感は、個人の内的発達にも直接に関わる主要因となるので、基本的信頼感が不安定な場合には、心理的発達に影響を与えられられる。ゆえに、本研究の自己愛傾向者は、[研究3]の結果から、他者からの承認を強く求める自己愛傾向は高いうえ、[研究4]における彼らの基本的な信頼感そのものが低いことから、自分のなかに揺るぎない主体性が確立されていないと思われる。これは他者との間に安定した関係が保てないということであり、対人関係で不適応に移行する可能性があると考えられる。

しかしながら、本研究における基本的信頼感は自己報告だけで、友人からの信頼感が調査されていないため、対人関係上の一つの側面からしか捉えているにすぎない。ゆえに、

基本的信頼感については、本研究からのみで明確な結論を下すのは難しいと思われる。したがって、自己愛傾向の基本的信頼感に関しては、今後も引き続き検討していく必要があると考えている。

7.2.3 自己愛傾向と親の養育態度との関連

本論文における第3の課題としては、自己愛傾向と親の養育態度について検討することであった。先行研究では、自己愛人格障害者は、母親に共感性・情緒性欠如の状態で養育されたといわれている(Kernberg,1975;kohut,1971,1977)。そして、Kernberg は、自己愛人格障害患者の家族的背景に「隠された強い攻撃性を持つ慢性的に冷たい親」「表面はよく機能しているが、冷淡さ、無関心、言葉にださない侮蔑的攻撃性を持った母親ないしは母親代理」が多く見いだされたと述べている。

さて、本論文における[研究2]、[研究3]、[研究4]、[研究5]の結果では、誇大的な自己愛傾向と過敏な自己愛傾向とは正の相関関係にあり、これらの特徴は表裏一体であると捉えられた。ゆえに、本研究における2種類の自己愛傾向とも他者からの肯定的な評価をいつも求めるのは、親から情緒的で共感的な養育をされていないと考えられる。

一方、谷井・上地(1994)は、個人の性格や対人関係能力そのものが親子関係に規定されていると述べている。ゆえに、親子間の情緒的に安定した関係は、学校生活における情緒的安定性につながり、学校への適応感が高くなることを指摘している。つまり、子どもの安定した心的構造の形成や対人関係は、堅固な親子関係を基盤とすることが重要であるといえる。この先行研究を支持するように[研究5]の結果では、両親の受容性が学校生活満足感へ直接的な影響を及ぼした場合は、親からの支持があると捉えられるのか、学校生活での満足感を促すように作用することが示されていた。

その一方で、両親の受容的な養育態度が傷つきやすく過敏な自己愛傾向を介在した場合、学校生活で適応的に作用しないことが明らかとなったのである。これについて高橋・伊藤(2003)は、回避的な自己愛傾向の生徒との面接事例のなかで、母親が保護的・受容的な養育態度であると、子どもは外的対象とのかかわりに適応できず不適応に陥ることを明らかにしている。これは小此木(1981)や町沢(1998)が指摘する“過保護のもとで特別扱いされて

養育された”ことが要因となって“他者からどう見られているかを気にする”ようになり、他者とのかわりのなかで適応的になれないことが示されたのである。また、Miller(1979)も、母親が子どもを自己対象として、自己愛的に取り扱った場合に自己愛の障害に至ることを指摘している。さらに、彼らの特徴として、自己評価の脆さ、愛情喪失への恐れによる同調傾向、強い攻撃性、過敏さ、恥や罪を感じやすい傾向、落ち着きのなさなどを挙げている。Kohut & Wolf(1978)も、自己愛障害の要因として親の応答が、子どもの本当に承認されたいこととは別の面に対して過剰な賞賛を与えたり、時期不相応なときに与えたりした場合、子どもの自己は刺激に対して過敏になることを指摘している。

また、先に記したように本研究の自己愛者は、自分自身で不快や緊張を鎮めるという自己緩和能力 *self-soothing ability* が貧困であると思われるので、いつも不安がつきまとうことになることが考えられる。その結果、自己の平衡を危うくするような緊張した場面に遭遇した場合にはこれを回避しようとするのである。

そのうえ、自己愛者は“親が自分自身を犠牲にして子どもに尽くすために、子どもは大切に養育されている(小此木 1981, 町沢 1998)”ともいわれる。しかし、この代償として親は子どもを自己愛的に同一視することで自分自身の自己愛を満足させようとしていることも報告されている(高橋・伊藤, 2003)。この母親との同一視は、分離機能が確立されないままであり、自己と他者との間に個別性の認識がないということになる。これにより自分自身を一個人として肯定的に受け止められず孤立感を強めることになり、これが学校生活への適応を抑制することになると考えられた。

さて、本研究における課題の一つに、Kohut が論じる両親の養育態度が、早期幼少期(2～3歳)におけるものということであった。だが、幼児期における両親の養育態度を回想させることは困難であると思われた。そこで健康的な一般高校生であるならば、両親の養育態度が幼少期から現在に至るまで一貫性はあるものと想定しても無理はないと思われた。そこで本研究では、現在における両親の養育態度を自己報告してもらうという調査方法を実施したのである、しかしながら、この点に関してはさらなる実証的な検討が必要と考えている。

また、この親子関係が一方からであるため、一般化は難しいことも事実であろう。これについても今後は、親側からの養育態度について調査し、検討を加える必要があると考えている。

7.2.4 自己愛傾向と学校生活への適応との関連

本論文における最後の課題は、自己愛傾向と親の養育態度との関連を明らかにし、これらが学校生活への適応に対してどのような影響を及ぼすかを検討することであった。

高木ら(1981)は、高校生が学校生活へ適応するには、「学校生活に対する満足感や成績に対する満足感によって規定されるところが大きい」と述べている。だが、これ以外にも生徒の個人的側面(性格、学力、身体的特徴)やそれを規定する家庭的側面(親子関係、家庭の物理的・経済的・文化的な環境)が学校生活への適応に大きな影響を及ぼすことが考えられる。そこで、まず、本研究では、生徒の個人的な側面について検討した。

その結果、[研究3]において、高校生の自己愛傾向は、他人に認められたい、評価されたいという強い欲求をもつことが示された。ところが、これに誇大性を伴う過敏なタイプの自己愛が介在すると、自己評価が低下し、恥や傷つきの感情が強くもたらされるのか、学校生活における満足感が抑制されることが示された。これについて小林・霜村(2001)も「不登校経験者は、自己概念の低さが自尊感情の低さの要因となると同時に、集団への積極的な関わりを阻害したり、神経症傾向を高めたりして深刻な集団への不適応へ移行する可能性がある」と説いており、自己評価の指標となる自尊感情の低さが学校不適応の誘因になることを指摘している。また、町沢(1998)も「日本の子どもたちは、親の過保護のもとで養育され、自尊心が傷つけられずに成長しているため、彼らにおいて人間関係とは、常に自分の自尊心を貶める存在でしかないと思っている」と述べ、対人場面に対して適応できないことを説いている。

[研究4]では、学校忌避感情が高い生徒は、自己愛傾向が高いことから他者からの批判などで自己愛が容易に傷つくことが考えられた。そのうえ、基本的な信頼感が不安定になることで、いずれは対人関係を回避すると予想される。すなわち、自己愛者は、自分を他人がどのように見ているか、どのように評価しているかを基準にして行動するので、自己への確実感が持てないのである。この自己を肯定的に捉えられないことが、学校集団での積極的な対人行動を抑制する要因となって、いずれは集団において承認されないことになる(粕谷・河村,2002)と考えられる。すなわち、この不登校潜在群(グレーゾーン)という状態は学校不適応の前駆症状として捉えられ、いずれは不登校に至る可能性を示唆してい

た。

また、先行研究では、登校拒否の原因または背景的要因の一つとして、親子関係が関連することが指摘されている(佐賀,1973,佐藤,1968,玉井,1979)。さらに、谷井・上地(1994)が、高校生における学校適応感と親役割行動の研究において、同性の親子間では、親の適応援助と適応感との相関が高い傾向にあることを報告している。やはり、親子関係が情緒的に安定していることは、学校生活への適応性を促すことになると解釈するのが妥当であると思われる。しかしながら、[研究5]の結果では、両親の受容性が情緒的に安定した関係ではなかったのか、「過敏型」の自己愛傾向を助長するという示唆が得られた。したがって、その特徴である過敏で傷つきやすいことが適応性を低くするため、学校生活における満足感が抑制されることが示されていたのである。

次は、この対人場面で過敏反応をする自己愛傾向者の特徴的な対人行動から適応感を検討してみる。

高校生が学校生活に満足するためには、「自分の存在や行動が、友人や教師から承認されていること、学校生活における不適応感を持っていないこと、他者からいじめ・冷やかしなどを受けていないこと」などを感じることでいわれている(粕谷・河村,2002)。すなわち、他者とのかかわりが基盤となって学校生活における満足感が得られるのである。

だがその一方で、日本における対人関係は、他人の意向や評価を中心にして行動することが求められるといわれる。もし、それを行動の原理とすると、内的なさまざまな衝動や欲求、思考、感情などは自己の価値を下げる可能性をもっているため、直接的な表現をすることができなくなると指摘されている(鑑,2003)。すなわち、このような他人の意向や評価を察して行動することは、傷つきやすさを伴う自己愛傾向者にとって対人関係での過敏性を強めることに繋がり、自己を防衛したり、保護したりするため現実場面を拒否することになるのである。つまり、このような対人関係を持つということが、いずれは不適応に繋がると考えられるのである。

以上のことから本研究の自己愛傾向は、両親の受容性が他者との関わりにおいて過敏で傷つきやすい自己愛傾向を高める要因となり、学校生活への適応を困難にしていることが明らかとなった。また、安定した基本的信頼感が持てないことで他者との成熟した関係が築けないため、学校内で非承認感や被侵害・不適応感を持つことになることが示唆された。

さて、今までの自己愛に関する理論的研究では、自己愛傾向と母親との関係が強調されてきた。また、宮下の研究では、父親の否定的な養育態度が、男子においてのみ有意な関

連が認められていた。ところが、本研究では、回避的な自己愛傾向を抑制し学校生活へ適応させるためには、父親の受容的な養育態度が重要であるという異なる結果が見いだされたという点では、本研究における大きな成果の一つであるといえよう。

7.2.5 自己愛傾向の心理的健康について

これまでに NPI で測定された自己愛傾向が心理的に健康であるか、不健康であるかという議論は、海外では幾度となくされている (Emmons, 1984; Raskin et al., 1991; Watson & Biderman, 1993)。そして、これら先行研究において自己愛傾向が「健康」か「不健康」かは、他尺度との関連を検討し、適応的か不適応的かという点で検討されてきた。

たとえば、Emmons (1984) は、自尊感情など心理的健康度の指標とされる尺度と正の相関があることで、全体として健康的な自己愛を測定していると報告している。また、国内では、佐方 (1986) が、SNPI の下位尺度のうち「自己顕示・自己耽溺」が同一性拡散感尺度と正の相関を示し、他の下位尺度は相関がなかったということから健康な自己愛が示されたと報告している。さらに、大平 (1988) は、佐方 (1986) の SNPI と不安との関連を検討しており、NPI の下位尺度「優越感・有能感」が不安とは負の相関があったことを報告している。小塩 (2001) は、「優越感・有能感」や「自己主張性」は、自尊感情全体と正の関連を示し、「自己主張性」は対人関係において、他者からの評価を気にすることなく積極的に他者とかかわる傾向と関連していた。ゆえに NPI-S の下位尺度のうち「優越感・有能感」や「自己主張性」をもつことが心理的健康につながると報告している。

ところが、本研究の自己愛傾向下位尺度の全てが NPI-S 下位尺度の「自己主張性」とは相関がなく、「優越感・有能感」と「自己愛的な怒り」とは弱い正の相関が示されていた (高橋, 2006b)。しかし、自己愛的な怒りと自己愛的な傷つきやすさとは強く関連することが指摘されており、これは“他者からの否定的な評価に対する過敏さを意味するもの”というのである (相澤, 2002)。さらに、清水・海塚 (2002) も、対人恐怖心性が必ずしも病的であるとはいえないが、「無関心型」の自己愛人格は、自分自身に対して、注目されたいとか自分が有能であることを認識することによって対人関係で恐怖感が増すことを指摘している。つまり、「自己愛的な怒り」と「優越感・有能感」とに正の関連があったとしても心理的健

康に繋がるとはいえないのである。

また，[研究3]におけるMPIとの相関結果では，神経症的傾向と本下位尺度の全てが正の関連を持っていたことから，情緒的に不安定なことが示されていた。そのうえ，「回避性傾向」および「対人過敏性」と「外向性 - 内向性」との関係では，内向性と強く関連しており，社会への適応が難しいことが明らかとなった。

さらに，高橋(2007c)が，自己愛傾向下位尺度の「回避性傾向」や「自己愛的な怒り」が高いものは，ストレス状況下で「特性不安」から「状態不安」を起こし，学校生活における対人関係のトラブルを抱えやすく，不適応に陥る可能性があることを報告している。

このようなことから本研究における自己愛傾向尺度は，情緒的に不安定で，対人関係において傷つきやすいことから適応的ではないことが示されており，心理的な健康さを表しているとは言い難いと考えられる。

7.2.6 今後の研究課題

本研究の問題点としては，調査対象者が，ある特定地域の進学校といわれる2つの高校であったために，学校間格差や学年差，地域差の検討が十分に行われていない。ゆえに，これらの結果を一般化することはできないと思われる。そこで，今後の第一の研究課題としては，大規模なサンプリングと発達段階的な調査を実施してさらなる検討をしていきたいと思っている。また，基本的信頼感と親子関係の結果についても一定の範囲で支持できるものと考えられるが，一方向からの検討にすぎなかったため十分とはいえないのである。これについても，今後の研究の中で，他の変数との関連で明らかにしていきたいと思っている。

また，研究課題の第二には，本研究の自己愛傾向が高く，学校不適応に陥っている生徒に対する援助方法について検討することである。たとえば，自己愛人格障害者の治療について，Kohut(1971)は，彼らの問題は，特定の自己愛的傷つきや自己対象からの非共感的な応答の結果から生じたものであり，分析治療で解釈されたり，治療者との共感的絆が再確立されたりすることで解消されると論じている。また，Rosenfeld(1987)は，「薄皮」の自己愛人格障害者は，幼児期から繰り返し自尊心が傷つくような体験を持ち，強い劣等感があ

るので、自分の破壊的な側面をめぐる葛藤への気づきを拡大し、自己愛の肯定的な側面を維持させるのを手助けするべきであると述べている。このように傷つきやすさを含んだ自己愛傾向者への治療態度としては、直面化や解釈よりも慎重に対応する必要があり、それにより自己愛障害の悪化や取り返しのつかなくなる状況を回避できるものと考えられる。また、[研究4]の結果からも、学校忌避感情が高い生徒は、自己愛傾向が高いうえ基本的信頼感が低いことから学校生活への適応の問題を抱えることが明らかとなった。従って、これらのことから自己愛傾向者の示す自己肯定感の不安定さをある程度まで安定させることや、他者からの評価に対して過敏な反応をしないように心がけさせることが重要であると思われる。具体的には、このような生徒への援助として、フォーカシング体験(伊藤,2002)をさせることで心の安定を保たせるということを実施していくつもりである。また、学校不適応に至る前の不安を解消するために、フォーカシングの空間作り体験(伊藤,2002)も実施していきたいと考えている。

第三の研究課題としては、外傷後ストレス障害(Post Traumatic Stress Disorder: PTSD)を抱えている生徒への治療的な援助について検討することである。なぜならば、これまでに面接を継続した生徒の何人かは、腹痛や頭痛などで保健室を頻繁に利用すること多かった。なかには、過去のいじめ体験から PTSD を抱え、対人恐怖傾向やうつ状態になっているものも見受けられた。そのうえ、いじめのフラッシュバックがしばしば起きて、パニック障害を起こすものもいた。すなわち、いじめは受けた当事者にとって過去の問題であるとはいえず、終息したからといってそれで終わりではないのである。被害者は、その後も抑うつ、自尊心の低下、心身症、対人不安などの不適応症状を引き起こすといわれている(Hawker & Boulton,2000,岡安・高山,2000)。また、学校現場で起きる犯罪(佐世保小六殺傷事件など)や同級生の自殺などを見聞きした児童・生徒が PTSD に陥ることも報道されている。このような生徒が、不登校という事態を引き起こしてからでは、その復帰までに多くの時間を要することや、なによりも生徒の心への負担が大きいことは明らかである。それゆえに、このような PTSD に陥っている生徒への心理的・教育的な援助方法について検討していくことは重要であると思われる。従って、これからは学校現場のセラピストとして、事後対応だけでなく予防・開発的な研究にも取り組んでいくつもりである。

第四の研究課題として、カウンセリングにおいては、援助の構造を設定することは重要であるが、そのためには生徒の保護者との連携を保たなければならないと考えている。しかし、教師の立場で、長期にわたり児童・生徒やその保護者とどのようなかかわりを続け

ていくのかということを示す研究はほとんど見られない。そこで、どのようなケースに、どのようにして取り組むのかを研究することは、学校教育相談のあり方を示唆することになるので、今後の研究課題として取り組んでいきたいと考えている。

要 約

本論文の目的は、Kohut 理論に基づいた自己愛の2側面に視点をおき、高校生の自己愛傾向の下位側面と親子関係との関連が、学校生活への適応状態にどのような影響を及ぼすのかを解明することである。この Kohut 理論における自己愛障害の特徴とは、自己顕示的で共感性を欠き、他者から批判的・無視的に扱われた場合に憤怒が生じるという誇大的な側面と、心氣的で、自己のまとまりの脆弱化・断片化、他者への過敏反応、傷つきやすさと抑うつが認められる側面である。この本質は、心理的安定性の欠如や自己評価を維持する心理的機能の脆弱さから生じるところの傷つきやすさであるとされている。ゆえに、自己愛者は、他者からの肯定的な評価を強く求め、他者を理想化するのである。この自己愛障害に至る要因として、早期幼児期における母親からの応答の不十分さがあると考えられている。

まず、本論文の第1章では、自己愛の理論的概念として Freud の自己愛を系統的に論じ、Freud から Freud 以後へ、そして、Kernberg の対象関係論における自己愛と Kohut の自己心理学からの自己愛を論じている。これらの自己愛の諸理論を概観して明らかとなったことは、現行の自己愛人格障害は、過度に強調された誇大性、傲慢さ、搾取性、共感性の欠如などとして定義づけられていることである。だが、近年、問題視にされている2種類の自己愛人格障害を探るには、この定義では困難さがあると思われる。最近では、DSM- (APA) の診断基準マニュアルによってその診断は可能となったといわれるが、自己愛の障害が対象関係における障害ならば、その自己愛の障害も異なると考えられる。つまり、過敏な対人関係を持つならば、自己の能力や力を抑制することが、対人関係における挑戦や傷つきからの防衛方策となっているはずである。その反面、抑圧された自己顕示や承認・賞賛への欲求は、他者評価に大きく依存することになり、自己への幻想的な全能感という自己イメージをもたらしている。さらに、彼らは理想自己像と現実自己像のずれも感じ取っているので、自己への不信感も強く持っている(鑑,2003)。この過敏なタイプの自己愛が生じる要因として過保護で密着型の養育態度が指摘されている(町沢,1998)。また、最近では希薄な対人関係も問題視されている。そして、彼らは、傷つきやすい自己愛的な万能感を維持するために、外界との現実的な接触をなるべく避けるという行動をとることになる。このよ

うなことから本論文では、Kohut 理論を基にして、自己愛が高揚する時期であるとされる高校生を調査対象として高校生の自己愛傾向と関連要因を実証的に研究する。

第2章では、本論文の全体的な目的としては、Kohut 理論に基づく自己愛障害の中核的指標は、自然な自己顕示性を表出できないことや傷つきやすさを伴うことである。そこで2種類の自己愛からなる自己愛尺度を高校生用に再構成し、高校生用自己愛尺度の信頼性と妥当性を検討する。さらに、高校生における自己愛傾向の下位側面の特徴を明らかにし、自己愛傾向と自己および他者との関係を検討する。すなわち、自己愛傾向の諸特徴が学校生活へ及ぼす影響について検討することで、学校不適応に至る一つの要因を探る。最後に、先行研究では、自己愛の障害に至る関連要因として親の養育態度が論じられており、親の養育態度が学校生活の適応に及ぼす影響について検討する。

第3章の[研究1]では、Kohut 理論を基に作成された鈴木(1999)の自己愛尺度を再検討した結果、誇大的な側面と過敏な側面を意味するものであった。さらに[研究2]では、一部の項目内容を平易なものにするとともに傷つきやすさの項目を加えて再構成し、高校生336名(男142名、女194名)の自己愛傾向を調査した。そして探索的因子分析の結果、「対人過敏性」「回避性傾向」「自己愛的な怒り」の3因子構造が確認された。これらの因子は、内的整合性も十分に示されていた。また、MPI の下位尺度との有意な正の相関も見られ、傷つきやすさを伴う2種類の自己愛傾向を測定するうえで一定の妥当性があることが確認された。この自己愛傾向の下位側面が意味するものとして、「対人過敏性」は他者からの批判や嫌われることを恐れる内容を表し、「回避性傾向」は感受性の鋭さから人とのかかわりを避けようとする内容で、これらはともに対人関係における過敏さを示す自己愛傾向であった。また、「自己愛的な怒り」は、自己愛が満たされないときの怒りを表し、誇大的で傲慢な自己愛傾向を示していた。

第4章の[研究3]では、高校1年生593名(男子229名、女子364名)の自己愛傾向と承認欲求、学校生活満足感との関連を検討している。[研究2]で作成した自己愛傾向尺度に確認的因子分析を行った結果、3因子構造になることが認められた。相関関係の結果として、男子では、「対人過敏性」得点が高いほど、学校生活での不安や緊張などの不適応感が高くなることが示された。女子では、「自己愛的な怒り」得点が高くなるほど、学校生活で不安や緊張感が高くなることが示された。また、男女とも、「回避性傾向」得点が高くなるほど、学校生活での承認感は低く、不安や緊張感が高くなることが明らかにされた。パス解析の結果からは、自己愛者の他人に認められたい、評価されたいという強い欲求は、誇大的な自

己愛から過敏な自己愛を介在することによって、恥や傷つきやすさの意識を伴うのか、男女ともに、「学校生活における満足感」を抑制する要因になることが示された。さらに、過敏な自己愛傾向の男子は、小塩(1998b)の結果と同様に、賞賛・承認欲求が強く、自分への肯定感覚とその感覚を維持したい欲求を持っていることが示唆された。

第5章の[研究4]では、高校生300名(男子104名、女子196名)を調査対象として、学校への強い忌避感情に焦点をあて、自己愛傾向と基本的信頼感との関係について検討した。学校嫌い感情の3群別(高群、中群、低群)で多母集団の同時分析を行った結果、「学校嫌い感情」の高群や中群では、誇大性を伴う過敏で傷つきやすい自己愛傾向と基本的信頼感に強い負の関連があることが明らかとなった。したがって、学校忌避感情が強くて自己愛傾向の高い生徒が持つ自己への信頼感と他者に対する信頼感は、安定性を欠いたものであることが示唆された。このように自分自身の主体性が動揺しやすいことは、いつも不安を感じる状態であり、これが学校生活への適応に負の影響を与えることになると考えられる。

第6章の[研究5]では、高校生700名(A高校259名：男子103名、女子156名；B高校441名：男190名、女251名)の自己愛傾向と親の養育態度、学校生活満足感がどのように関連しているのかを検討した。相関関係の分析から、両親の受容的な養育態度は、直接的には学校生活での満足感へ正の影響を及ぼすことが明らかになった。そして、各尺度を学校群(A高校とB高校)と男女の4群別にして多母集団の同時分析を行ったところ、両親の受容的な養育態度が、誇大的な自己愛傾向から傷つきやすさを伴う自己愛傾向を介在する場合には、学校生活での満足感へ負の作用をすることが明らかとなった。また、両親の受容的な養育態度が直接的な影響を及ぼす場合には、学校生活満足感へ正の影響を及ぼすことが示された。さらに、回避的な自己愛傾向を抑制し、学校生活へ適応させるには、女子では父親の受容的な養育態度が重要であることも示唆された。

第7章では、本論文の総括的討論を行った。[研究1]から[研究5]までで検討された高校生の自己愛は、自己愛の2側面の特徴を示すことが明らかとなった。そして、これらの自己愛は表裏一体であり、その表面化している側面の裏に、もう一方の側面が潜んでいることが推測された。したがって、妥当な「自己評価」として自己を肯定的に捉えることができないために、自己評価を保証してくれる他者を必要として、承認欲求が強いことが示されたのである。さらに、本研究における自己愛傾向者は、親から情緒的で共感的な養育をされていないことも考えられた。それは自己評価を安定させるために、他者からの肯定的な評価をいつも求めているからである。すなわち、彼らのなかに誇大性としての優越感

や特権意識があるからこそ、周囲からの特別な配慮を求めるのである、これに対して他者が否定的・無視的な態度をとった場合には、過剰な怒りを生じさせることになる。ところがその一方で、自尊心の低さ、空虚感、心氣的傾向などが存在するのか、他者に対する過敏反応や傷つきやすさとして表されていると考えられた。以上のようなことが学校生活への適応を抑制するように作用していることが示唆されたといえるのである。

本研究の今後の研究課題としては、調査対象者が特定地域の高校であったために、これらの結果をすぐに一般化することはできない。そのため、今後は、大規模なサンプリングと発達段階的な調査を実施することが求められる。また、基本的信頼感と親子関係の結果は、一定の範囲で支持されているが、一方向からの検討であるために十分とはいえないであろう。双方向からの検討は、他の関連変数の究明も含めて今後の課題である。さらに、教育現場では、自己愛傾向が高く、学校不適応に陥っている生徒に対する具体的な援助方法を明らかにすることが必要となる。

引用文献

- Abraham, K. 1969,1971 *Psychoanalytische studien* アブラハム論文集：抑うつ・強迫・去勢の精神分析 下坂幸三，前野光弘，大野美都子（訳） 1993 岩崎学術出版社
- 相澤直樹 1997 対人場面における対人恐怖的な悩みの分析 日本教育心理学会第 39 回総会発表論文集，548.
- 相澤直樹 2002 自己愛人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究,50, 215-224 .
- Akhtar, S., & Thomson, J. A. 1982 Overview: narcissistic personality disorder. *American Journal of Psychiatry*, **139**, 12-20.
- 天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究,3, 364-371.
- American Psychiatric Association 1980 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders third edition.: DSM-* . Washington, DC: Author.
- American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders. fourth edition.: DSM-* . Washington, DC: Author.
- Ammon, G. 1974 *Psychoanalyse und psychosomatik*. München : Piper 青木宏之（訳）
1979 精神分析と心身医学 岩崎学術出版社
- Atwater, E. 1992 *Adolescence* (3rd ed). Prentice Hall. : New Jersey.
- Balint, M. 1960 Primary narcissism and primary love. *Psychoanalytic Quarterly*, **29**, 6-43.
- Balint, M. 1968 *The basic fault:Therapeutic aspect of regression*. Tavistock Publication, Ltd .中井久夫（訳）1978 治療論からみた退行 - 基底欠損の精神分析 金剛出版
- Benedict, R. 1946 *The chrysanthemum and the sword: Patterns of Japanese culture*. C.E. Tuttle.
長谷川松治（訳）1950 菊と刀：日本文化の型 社会思想研究会出版部
- Block, J. 1978 *The Q-sort method in personality assessment and psychiatric research*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press. (original work published 1961)
- Blos, P . 1962 *On adolescence: a psychoanalytic interpretation*. New York: Free Press 野沢英司（訳）1971 青年期の精神医学 誠信書房
- Broucek, F. 1982 Shame and its relationship to early narcissistic developments.
International Journal of Psychoanalysis , **63**,369-378 .
- Broucek, F. 1991 *Shame and the self*. New York: Guilford Press.

- Cattell, R. B., Eber, H. W., & Tatsuoka, M. 1970 *Handbook for the sixteen personality factor questionnaire*. Champaign, Illinois : Institute for Personality and Ability Testing.
- Cooper, A 1981 *Narcissism*, in American handbook of psychiatry, Vol 4. Edited by Arieti S, Keith H, Brodie H. New York :Basic Books. Pp 297-316. In *Disorders of narcissism - Diagnostic, clinical, and empirical implication* - . American Psychiatric Press, Inc. , Washington, DC. 1997 佐野信也 (監訳) 2003 自己愛の障害 - 診断的, 臨床的, 経験的意義 金剛出版 Pp. 62-78.
- Cooper, AM & Ronningten, E. 1992 *Narcissistic personality disorder*, In American Psychiatric Press Review of Psychiatry, Vol 11. Edited by Tasman A, Riba MB. Washington, DC, American Psychiatric Press. 佐野信也(監訳) 2003 自己愛の障害 - 診断的, 臨床的, 経験的意義 金剛出版 Pp. 80-97.
- Edwards, A. L. 1959 *Manual for the edwards personal preference schedule*. New York: Psychological Corporation.
- Elkind, D. 1980 *Strategic interactions in early adolescence*. In J. Adelson, ed. Handbook of adolescent psychology. New York : Wiley and Sons, **13**, 432-444.
- Ellis, H. 1898 Auto-erotism: A psychological study. *Alienist and neurologist*, **19**, 260-299. (Akhtar & Thomson, 1982 による)
- Emmons, R. A. 1981 Relationship between narcissism and sensation seeking. *Psychological Reports*, **48**, 247-250.
- Emmons, R. A. 1984 Factor analysis and construct validity of the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality Assessment* , **48**, 291- 300.
- Emmons, R. A. 1987 Narcissism: Theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 11-17.
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle (selected papers of E.H. Erikson)*. Int. Univ.Press, New York 小此木啓吾(編訳)1973 自我同一性 誠信書房
- Exner, J. E. 1969 Rorschach responses as an index of narcissism. *Journal of Personality Assessment*, **33**, 324-330.
- Exner, J. E. 1973 The self focus sentence completion. A study of egocentricity. *Journal of Personality Assessment*, **37**, 437-455.

- Eysenck, H.J. 1959 *Maudsley Personality Inventory*, University of London Ltd, London MPI 研究会編 1969 新性格検査法 - モーズレイ性格検査 誠信書房
- Eysenck, H. J. 1967 *The biological basis of personality*. Springfield, : Charles C. Thomas.
- Eysenck, H. J., & Eysenck, S. B. G. 1968 *Manual of the Eysenck Personality Inventory*. San Diego, CA: Educational and Industrial Testing Service.
- Federn, P. 1936 On the distinction between healthy and pathological narcissism. In *Ego psychology and the psychoses*. New York: Basic Books, 1952.
- Ferenczi, S. 1924 *Thalassa : A theory of genitality* : Psycho – anal. Quarterly Inc. New York 1938.
- Ferenczi, S. 1930 Autoplastic and alloplastic adaptation. In: *Final contributions*. New York: Basic Books, 1955, P 221.
- Fitts, W. H. 1965 *Tennessee self-concept manual nashville*: Counselor Recording and Tests.
- Frankenberger, K. D. 2000 Adolescent egocentrism: A comparison among adolescents and adults. *Journal of Adolescence*, **23**, 243-254.
- Freud, S. 1911 *Psychoanalytische bermerkungen psychoanalytische bermerkungen über einen autobiographische beschriebenen fall von paranoia (Dementia Paranoides)* 小此木啓吾 (訳) 1983 自伝的に記述されたパラノイア (妄想性痴呆) の 1 症例に関する精神分析的考察 フロイト著作集 9 人文書院 Pp.283-347.
- Freud, S. 1914 *On narcissism: An introduction*. 懸田克躬・吉村博次(訳) 1969 ナルシシズム入門 (フロイト著作集 5) 人文書院 Pp. 109-132.
- 福井 敏 1998 誇大的な自己 - 自己愛性障害 *こころの科学*, **82**, 75-86.
- 福島 章 1989 性格と適応 本明寛他編 *性格心理学新講座 3 適応と不適応* 金子書房, 3-37.
- 福島 章 1992 青年期の心 - 精神医学からみた若者 - 講談社.
- 古市裕一 1991 小・中学生の学校ぎらい感情とその規定要因 *カウンセリング研究*, **24**, 123-127.
- Gabbard, G.O. 1989 Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, **53**, 527-532.

- Gabbard, G.O. 1994 *Psychodynamic psychiatry in clinical practice : The DSM - edition*. Washington,DC: American Psychiatric Press. 館哲朗(監訳)1997 精神力動的な精神医学 - その臨床実践 [DSM- 版] 臨床編; 軸障害 岩崎学術出版社
- Gersten, S. P. 1991 Narcissistic personality disorder consists of two distinct subtypes. *Psychiatric Times*, **8**, 25-26.
- Goldberg, A. 1980 *Advances in self psychology*. International Universities Press, Inc. 岡 秀樹 (訳)1999 「自己心理学とその臨床」 - コフ - トとその後継者たち」岩崎学術出版社
- Gough, H. G. 1956 *California Psychological Inventory*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- Gough, H. G. 1957 *Manual for the California Psychological Inventory*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- Gough, H. G. 1978 *Administrator's guide for the California Psychological Inventory*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- Gough, H. G., & Heilbrun, A. B. 1983 *The adjective check list manual.1980 edition*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- Grace, G D., & Schill, T. 1986 Social support and coping style differences in subjects high and low in interpersonal trust. *Psychological Reports*, **59**, 584-586.
- Graham,J.R., 1977 *The MMPI : A practical guide*. Oxford University Press, Inc. 田中富士夫 (訳) 1985 「MMPI - 臨床解釈の実際」 三京房
- Grayden, C. 1958 The relationship between neurotic hypochondriasis and three personality variables. Feeling of being unloved, narcissism, and guilt feelings. *Dissertation Abstracts International*, **18**, 2209-2210.
- Gurtman, M.B. 1992 Trust, distrust , and interpersonal problems: a circumplex analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 989-1002.
- Harder, D. W. 1979 The assessment of ambitious-narcissistic character style with three projective tests, The Early Memories, TAT, and Rorschach. *Journal of Personality Assessment*, **43**, 23-32.
- Harman, H. H. 1976 *Modern factor analysis. 3rd ed.* Chicago: University of Chicago press.
- Hawker, D. J., & Boulton, M. J. 2000 Twenty years' research on peer victimization and psychosocial maladjustment: A meta-analytic review of cross-sectional studies. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **41**, 441-455.

- Hendin, H. M., & Cheek, J. M. 1997 Assessing hypersensitive narcissism: A reexamination of Murray's narcissism scale. *Journal of research in Personality*, **31**, 588-599.
- Hibbard, S. 1992 Narcissism, shame, masochism, and object relations: An exploratory study. *Psychoanalytic psychology*, **9**, 489-508.
- 細井啓子 1978 女性におけるナルシシズムの傾向 - ナルシシズムの研究3 - . 日本心理学会第42回大会発表論文集, 978-979.
- 細井啓子 1981 ナルシシズム的傾向に関する発達的研究(1) - 妊産婦について - 心理学研究, **52**, 38-44.
- 細井啓子 1984 ナルシシズム的傾向に関する発達的研究(3) - 成人期中期の女性について - 心理学研究, **55**, 113-116.
- 細木照敏・板垣文彦 1990 自己愛人格と自我機能 日本大学人文科学研究所紀要, **40**, 79-91.
- 井上果子 1992 対人関係の病い 松井豊(編)対人心理学の最前線 サイエンス社, Pp. 188-196.
- 池田由子・上林靖子・河野洋二郎・西川祐一 1983 登校拒否と社会病理 - 中学生の精神衛生調査から 社会精神医学, **9**, 3-8.
- 石川信一・大田亮介・坂野雄二 2003 児童の不安障害傾向と主観的学校不適應の関連 カウンセリング研究, **36**, 264-271.
- 伊藤 洸 1992 コフォートの自己心理学 心理臨床大事典 培風館, Pp.107-110.
- 伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **64**, 115-122.
- 伊藤義美 2002 フォ - カシングの実践と研究 ナカニシヤ出版
- Jacobson, E. 1964 *The self and object world*. New York : International Universities Press.
- John, O. P., & Robins, R. W. 1994 Accuracy and bias in self – perception : Individual differences in self – enhancement and the role of narcissism. *Journal of personality and social psychology*, **66**, 206-219.
- 角田 豊 1994 共感経験尺度改訂版(EESR)の作成と共感性の類型化の試み 教育心理学研究, **42**, 193-200.
- 角田 豊 1998 共感性と自己愛傾向の関連 共感経験尺度改訂版(EESR)と自己愛人格目録(NPI)を用いて 心理臨床学研究, **16**, 129-137.

- 上地雄一郎・宮下一博 1992 自己愛の発達と障害およびその測定に関する研究の概観
 [1] 岡山県立短期大学紀要, 37, 107-117.
- 上地雄一郎・宮下一博 2005 コフ - トの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成
 パ - ソナリティ研究, 14, 80-91 .
- 笠原 嘉 1984 アパシ - ・シンドロ - ム - 高学歴社会の青年心理 岩波書店
- 葛西真記子 1989 Narcissistic personality における対人関係(1)日本教育心理学会 第31回
 大会発表論文集, 235 .
- 葛西真記子 1990 Narcissistic personality における対人関係(3) 日本教育心理学会 第32回
 大会発表論文集, 219 .
- 粕谷貴志・河村茂雄 2002 学校生活満足尺度を用いた学校不適應のアセスメントと介入の
 視点 - 学校生活満足度と欠席行動との関連および学校不適應の臨床像の検討 - カウ
 ンセリング研究, 35, 116-123.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究,
 2, 33-42.
- 加藤隆勝・石川 透・田中祐次・落合良行・高木秀明・堀 啓造 1981 現代青少年の人
 間関係と適應感(1) - 研究の目的・方法 - 日本教育心理学会第23回総会発表論文集,
 566-567.
- 河上亮一 1999 学校崩壊 草思社
- 河村茂雄 1999a 楽しい学校生活を送るためのアンケート(Q-U)実施・解釈ハンドブック
 (高等学校編) 図書文化社
- 河村茂雄 1999b 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発 - 学校生活満足度尺度(高
 校生用)の作成 岩手大学教育学部研究年報, 59, 111-120 .
- 河村茂雄 2003 学校適應とソ - シャル・スキルとの関係の検討 カウンセリング研究, 36,
 121-128.
- 河村茂雄・田上不二夫 1997 いじめ被害・学級不適應児童発見尺度の作成 カウンセリ
 ング研究, 30, 112-120.
- Kernberg, O. F. 1970 Factors in the treatment of narcissistic personalities. *Journal of American
 Psychoanalytic Association*, 18, 51-85.
- Kernberg, O. F. 1974 Further contributions to the treatment of narcissistic personalities. In
Borderline conditions and pathological narcissism. 1975 New York : Jason Aronson.

- Kernberg, O. F. 1975 *Borderline conditions and pathological narcissism*. New York : Jason Aronson.
- Kernberg, O. F. 1976 *Object relations theory and clinical psychoanalysis*. New York : Jason Aronson. 前田重治(監訳) 岡秀樹・竹野孝一郎(訳)1995 対象関係論とその臨床 岩崎学術出版社
- Kernberg, O. F. 1984 *Severe personality disorders: Psychotherapeutic strategies*. New Haven: Yale University Press. 西園昌久(監訳) 重症パーソナリティ障害 1996 岩崎学術出版社
- Kernberg, O. F. 1989 *Narcissistic personality disorder in childhood*, *Psychiatric Clinic of North America*,12(3) , 671-694. In disorders of narcissism - diagnostic, clinical, and empirical implication - .American Psychiatric Press, Inc. , Washington DC 1997 佐野信也(監訳) 自己愛の障害 - 診断的, 臨床的, 経験的意義 金剛出版 Pp.102-116.
- Kernis, M. H., Brown, A. C., & Blody, G. H. 2000 Fragile self-esteem in children and its associations with perceived patterns of parent-child communication. *Journal of personality*, **68**, 225-252.
- 菊池章夫 1994 KISS - 18 のこと 菊池章夫・堀毛一也(編著) 社会的スキルの心理学 川島書店 Pp.177-183.
- 北西憲二 1998 自己の心理学 自意識過剰 - 対人不安 - こころの科学 , **82**, 37-41.
- 小林正幸・霜村 麦 2001 不登校経験者の自己概念の変容に関する研究 - 不登校経験者の回復期に必要とされるソ - シャル・サポ - トを中心に - 東京学芸大学紀要 1 部門, **52**,287-299.
- Kohut, H. 1971 *The analysis of the self*. New York : International Universities Press. 水野信義・笠原 嘉(監訳) 1994 自己の分析 みすず書房
- Kohut, H. 1977 *The restoration of the self*. New York : International Universities Press. 本城秀次・笠原 嘉(監訳) 1995a 自己の修復 みすず書房
- Kohut, H. 1984 *How does analysis cure ?* The University of Chicago Press. 本城秀次・笠原 嘉(監訳) 1995b 自己の治癒 みすず書房
- Kohut, H., & Wolf, E.S. 1978 The disorder of the self and their treatment, An outline. *International Journal of Psycho-analysis*, **56**, 413-425.

- 近藤直司 1999 引きこもりケ - スにおける自己愛の精神病理について 思春期青年期
精神医学誌, **9**(2), 201-202.
- 栗原 彬 1996 やさしさの存在証明 - 若者と制度のインタ - フェイス 増補新版 新曜
社
- Lapan, H. & Patton, M.J. 1986 Self-psychology and adolescent process : Measures of
pseudo-autonomy and peer-group dependence. *Journal of Counseling Psychology*, **33**,
136-142.
- Larsen, K.S., Martin, H.J., Ettinger, R. H., & Nelson, J. 1976 Approval seeking, social cost, and
aggression: A scale and some dynamics. *Journal of Psychology*, **94**, 3-11 .
- 町沢静夫 1998 現代人の心ににひそむ「自己中心性」の病理 双葉社
- Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. 1975 *The psychological birth of the human infant*. Basic
books. New York. 高橋雅士・織田正美・浜畑紀(訳) 1981 乳幼児の心理的誕生 黎明
明書房
- Martin, H. J. 1984 A revised measure of approval motivation and its relationship to social
desirability. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 508-519 .
- Masterson, J. F. 1981 *The narcissistic and borderline disorders*. New York : Brunner / Mazel.
- 松井 豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, **33**, 355-370.
- Mayman, M. 1974 *Early memories test manual*. Unpublished manuscript.
- 三船直子・氏原寛 1991 青年期の自己愛人格について - 実証的研究を中心にして - 大
阪市立大学生生活科学部紀要, **39**, 199-213.
- Miller, A. 1979 Depression and grandiosity as related forms of narcissistic disturbances.
International Journal of Psycho-Analysis, **60**, 61-76.
- Miller, A. 1981 *The drama of the gifted child*. New York: Basic Books. 野田 倬(訳) 1984
才能ある子のドラマ 人文書院
- Millon, T. 1981 *Disorder of personality . DSM - axis* . New York : John Wiley & Sons.
- Millon, T. 1987 *Millon Clinical Multiaxial Inventory manual. 3rd ed.* Minneapolis, National
Computer Systems.

- Millon, T. 1995 *Disorder of personality: DSM- , axis and beyond*. New York, Wiley. In *disorders of narcissism - diagnostic, clinical, and empirical implication - American Psychiatric Press, Inc. , Washington DC*. 1997 佐野信也 (監訳) 2003 自己愛の障害 - 診断的, 臨床的, 経験的意義 金剛出版 Pp.79-101.
- 宮下一博 1991 青年におけるナルシズム (自己愛) 的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係 教育心理学研究, 39, 455-460.
- 宮下一博・上地雄一郎 1985 青年期におけるナルシズム (自己愛) 的傾向に関する実証的研究 (1) 総合保健科学, 1, 51-61.
- Modell, A.H. 1975 A narcissistic defence against affect and the Illusion of self- sufficiency. *International Journal of Psycho-Analysis, 56*, 275-282.
- 文部科学省 2001 2000 年度 「生徒指導上の諸問題の現状」(問題行動白書)
- 森田洋司 1991 「不登校」現象の社会学 学文社
- Mullins, L.S., & Kopelman, R. E. 1988 Toward an assessment of the construct validity of four measures of narcissism. *Journal of Personality Assessment, 52*, 610-625.
- Murray, H. A. 1938 *Explorations in personality*. New York: Oxford University Press. 外林大作 (訳) 1961 パーソナリティ 誠信書房
- Näcke, P. 1899 Die sexuellen perversitäten in der irrenanstalt. *Psychiatrische en Neurologische Biaden, 3*. (Akhtar & Thomson, 1982 から)
- 永井 徹 1994 対人恐怖の心理 - 対人関係の悩み分析 - サイエンス社
- 中川泰彬・大坊郁夫 1985 日本版 GHQ 精神健康調査票手引 日本文化科学社
- 中里至正・松井 洋 1997 異質な日本の若者たち - 世界の中高生の思いやり意識 ブレーン出版
- 中山留美子・中谷素之 2006 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討 教育心理学研究 54 , 188-198.
- 西平直喜 1973 対他存在としての青年の対人関係 塚田 毅 (編) 青年心理学 共立出版社, Pp.92-105.
- O'Brien, M. L. 1987 Examining the dimensionality of pathological narcissism: Factor analysis and construct validity of the O'Brien Multiphasic Narcissism Inventory. *Psychological Reports, 61*, 499-510.

- O'Brien, M. L. 1988 Further evidence of the validity of the O'Brien Multiphasic Narcissism Inventory. *Psychological Reports*, **62**, 879-882.
- 大淵憲一 2003 満たされない自己愛 - 現代人の心理と対人葛藤 ちくま新書
- 大平英樹 1988 自己愛人格と不安の関係 - 自己愛人格目録(NPI)の検討 - 日本心理学会第 52 回大会発表論文集, 110.
- 大石史博 1987 ナルシシズム的人格に関する研究(2) - YG 性格検査との関係について - 日本心理学会第 51 回大会発表論文集, 535.
- 大石史博 1988 ナルシシズム的人格に関する研究(3) - CMI, MMPI との関係について - 日本心理学会第 53 回大会発表論文集, 109.
- 大石史博 1989 ナルシシズム的人格に関する研究(4) - 共感性との関係について - 日本心理学会第 53 回大会発表論文集, 155.
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男 1987 ナルシシズム的人格の基礎的研究(1) - ナルシシズム的人格目録の信頼性と妥当性について - 日本教育心理学会第 29 回総会発表論文集, 534-535.
- 大澤真幸・町沢静夫・香山リカ 1998 心はどこへいこうとしているのか マガジンハウス
- 大坪靖直 1989 青年期における不適応感と両親の養育態度に関する研究 広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集, **15**, 79-83.
- 岡田 努 1987 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, **35**, 116-121.
- 岡田 努 1993 現代大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖心性」との関係 発達心理学研究 **4**(2), 162-170.
- 岡田 努 1999 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究, **9**, 21-31.
- 岡田 努・永井 徹 1990 青年期の自己評価と対人恐怖的心性の関連 心理学研究, **60**(6), 386-389.
- 岡野憲一郎 1998 恥と自己愛の精神分析 岩崎学術出版社
- 岡安孝弘・高山 巖 2000 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, **48**, 410-421.
- 小此木啓吾 1981 自己愛人間 朝日出版
- 小此木啓吾 1985 現代の精神分析 - フロイトからフロイト以後へ - 講談社

- 小此木啓吾・平島奈津子 1998 対象喪失とモーニング 小此木・深津・大野(編著)心の臨床家のための精神医学ハンドブック Pp.142-156. 創元社
- 小塩真司 1997 自己愛傾向に関する基礎的研究 - 自尊感情, 社会的望ましさとの関連 - 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **44**, 155-163.
- 小塩真司 1998a 自己愛傾向の二側面に関する検討 - 3つの自己愛尺度を用いて - 名古屋大学大学院教育学研究科教育心理学専攻大学院生(編)教育心理学論集, **26**, 19-32.
- 小塩真司 1998b 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290.
- 小塩真司 1999 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, **8**, 1-11.
- 小塩真司 2000 自己愛的な青年の面接調査 - 対人関係に着目して - 日本心理学会第64回大会発表論文集, 970.
- 小塩真司 2001 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, **10**, 35-44.
- 小塩真司 2002 自己愛傾向によって青年を分類試み - 対人関係と適応 友人によるイメージ評定からみた特徴 - 教育心理学研究, **50**, 261-270.
- Phares, E. J., & Erskine, N. 1984 The measurement of selfism. *Educational and Psychological Measurement*, **44**, 597-608.
- Piaget, J. 1926 *The language and thought of the child*. New York: Routledge & Kegan Paul.
- Pressman, S. D., & Pressman, R.M. 1994 *The narcissistic family - Diagnosis and treatment*. 岡堂哲雄 監訳 竹前ルリ・山口恵美子・真板彰子(訳) 1997 自己愛家族 - アダルトチャイルドを生むシステム - 金剛出版
- Prifitera, A., & Ryan, J. J. 1984 Validity of the narcissistic personality inventory(NPI) in a psychiatric sample. *Journal of Clinical Personality*, **40**, 140-142.
- Pulver, S. E. 1970 Narcissism - The term and the concept. *Journal of American Psychoanalytic Association*, **18**, 319-341.
- Raskin, R., & Hall, C. S. 1979 A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.

- Raskin, R., & Hall, C. S. 1981 The narcissistic personality inventory: alternate form reliability and further evidence of construct validity. *Journal of Personality Assessment*, **45**, 159-162.
- Raskin, R., & Novacek, J. 1989 A MMPI description of the narcissistic personality. *Journal of personality Assessment*, **53**, 66-80.
- Raskin, R., Novacek, J., & Hogan, R. 1991 Narcissism, self-esteem, and defensive self-enhancement. *Journal of personality*, **59**, 19-38.
- Raskin, R., & Terry 1988 A principal-components analysis of the narcissistic personality inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of personality and Social Psychology*, **54**, 890-902.
- Rasmussen, J. E. 1964 The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, **15**, 815-825.
- Reich, A. 1960 Pasologic forms of self- esteem regulation. *The Psychoanalytic Study of the child*, **15**, 215-232.
- Reich, W. 1933 *Character Analysis*. London : Vision Press. 小此木啓吾(訳) 1964 「性格分析」 岩崎学術出版社
- Robbins, S. B., & Patton, M. J. 1985 Self- psychology and career development : Construction of the Superiority and Goal Instability Scales. *Journal of Counseling Psychology*, **32**, 221-231.
- Ronningstam, E.F. 1998 Disorders of narcissism - Diagnostic, clinical, and empirical implications. John Scott & Company. 佐野信也 監訳 2003 自己愛の障害 - 診断的, 臨床的, 経験的意義 - 金剛出版
- Rorschach, H. 1923 The application of the form interpretation test. Published posthumously by E. oberholzer. *Zeitschrift fur der gesamte Neurologie und Psychiatrie*, **82**, 1-47.
- Rosenfeld, H 1987 *Impasse and interpretation: Therapeutic and anti-therapeutic factors in the psychoanalytic treatment of psychotic, borderline, and neurotic patients*. London: Tavistock Publications.
- Rosenzweig, S 1948 住田勝美・林 勝造・一谷 彊(改訂): PF スタディ成人用, 京都, 三京房
- 佐賀明子 1973 登校拒否を生む原因 小泉英二編著 登校拒否 - その心理と治療 - 学事出版, 29-42.

- 佐方哲彦 1986 自己愛人格の心理測定 自己愛人格目録(NPI)の開発 和歌山県立医科大学進学課程紀要, 16, 63-76.
- 佐方哲彦 1987 自己愛人格目録(NPI)の妥当性に関する研究 - YG 検査および MPI, MMPI との相関から - 日本教育心理学会第 29 回総会発表論文集, 538-539.
- 佐藤修策 1968 登校拒否児 国土社, 46-91.
- 千石 保 1985 現代若者論 - ポスト・モラトリアムへの模索 - 弘文堂
- Schaefer, E. S. 1965a Children's reports of parental behavior: An inventory. *Child Development*, 36, 413-424.
- Schaefer, E. S. 1965b A configurational analysis of children's reports of parent behavior. *Journal of Consulting Psychology*, 29, 552-557.
- Schill, T., Toves, C., & Ramanaiah, N. 1980 Interpersonal trust and coping with stress. *Psychological Reports*, 47, 1192.
- 清水健司・海塚敏郎 2002 青年期における対人恐怖的心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, 50, 54-64.
- 下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究 - アイデンティティの発達との関連で - 教育心理学研究, 40, 121-129.
- 秦 一士 1990 敵意的攻撃インベントリ - の作成 心理学研究, 61, 227-234.
- Solomon, R. S. 1982 Validity of the MMPI narcissistic personality disorder scale. *Psychological Reports*, 50, 463-466.
- Stolorow, R. D. 1975 Toward a functional definition of narcissism. *International Journal of psychoanalysis*, 56, 179-185.
- 鈴木綾子 1999 自己の障害と親子の関係 - 大学生を対象とした実証的研究 - 1999 年度 愛知淑徳大学大学院コミュニケーション研究科修士論文 (未公開)
- 鈴木敏城・嶋田洋徳・富家直明・神村栄一・国分康孝 1995 高校生の中途退学指向性の研究 日本カウンセリング学会第 28 回大会発表論文集, 146-147.
- 諏訪哲二 1998a ただの教師に何ができるか 洋泉社
- 諏訪哲二 1998b 学校に金八先生はいらない 洋泉社
- 庄司知明・藤田尚史 1999 親の価値観が子どもの価値観に及ぼす影響 高知大学教育学部研究報告, 2, 58, 1-12.

- 高橋美知子 2003 高校生の自己愛傾向に関する研究 - 回避的傾向と誇大的傾向の観点から - 日本性格心理学会第 12 回大会発表論文集, 120-121.
- Takahashi Michiko 2004 Relationship between school adjustment and narcissistic tendency in high school students. 28th International Congress of Psychology ICP 2004 Abstract book, 957.
- Takahashi Michiko 2005 Relationship among parents' attitudes, narcissism and school maladjustment in high school students. 9th European congress of Psychology ECP 2005 Abstract book, 168.
- 高橋美知子 2006a 高校生における自己愛傾向と学校生活満足感の関連 承認欲求からの影響についての検討 カウンセリング研究, 39, 28-39.
- 高橋美知子 2006b 日米大学生の自己愛傾向に関する比較研究 承認欲求との関連についての検討 日本教育心理学会第 48 回総会発表論文集, 545.
- 高橋美知子 2007a 高校生の学校忌避感情と自己愛傾向, 基本的信頼感との関連 カウンセリング研究, 40, 257-266.
- 高橋美知子 2007b 高校生における自己愛傾向と学校生活満足感との関連について - 親の養育態度からの検討 - カウンセリング研究, 投稿中
- 高橋美知子 2007c 高校生の自己愛傾向と不安, 学校不適応の関連 日本人間性心理学会第 26 回大会発表論文集, 84-85.
- 高橋美知子・伊藤義美 2003 回避的な自己愛傾向の生徒との面接事例 - 教育現場における支持的アプロ - チを中心として - 名古屋大学大学院人間情報学研究科・情報文化学部紀要 情報文化研究, 17, 139-154 .
- 高橋智子 1998 青年期のナルシズムに関する研究 - ナルシズムの 2 つの側面を測定する尺度の作成 - 日本教育心理学会第 40 回総会発表論文集, 147.
- 高橋 芳 1998 ナルシズム的人格特性について その下位カテゴリ - の検討と防衛機制との関係 日本心理臨床学会第 17 回大会発表論文集, 470.
- 高木秀明・加藤隆勝・石川透・田中裕次・落合良行・堀 啓造 1981 現代青少年の人間関係と適応感(5) - 適応感の規定要因 - 日本教育心理学会第 23 回総会発表論文集, 574-575.
- 玉井収介 1979 登校拒否 教育出版

- 田中康裕・穂刈千恵・福田 周・小川捷之 1994 青年期における対人不安意識の特性と構造の時代的推移 心理臨床学研究, 12, 121-131.
- 谷 冬彦 1996 基本的信頼感尺度の作成 日本心理学会第 60 回大会発表論文集, 310.
- 谷 冬彦 1997 青年期における自我同一性と対人恐怖心性 教育心理学研究, 45, 254-262.
- 谷井淳一・上地安昭 1994 高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係 教育心理学研究, 42, 185-192 .
- Tatara, M 1993 Pattern of narcissism in Japan. In narcissism and the interpersonal self, edited by Fiscalini J, Grey A. New York, Columbia University Press, Pp. 223-237.
- 鑪 幹八郎 2003 恥とナルシズム - ひきこもりについての省察 鑪 幹八郎著作集 : 心理臨床と精神分析 ナカニシヤ出版, Pp. 261-270 .
- Taylor, J. A. ・阿部満州・高石 昇 1943 日本版 MMPI-MAS , 京都 , 三京房
- 辻岡美延・山本吉廣 1975a 斜交軸回転による因子構造の交叉妥当化 - 親子関係診断テストについての一結果 - 関西大学社会学部紀要, 6(1),53-66.
- 辻岡美延・山本吉廣 1975b 親子関係の四次元 - Schaefer の CR-PBI の分析 - 関西大学社会学部紀要, 7(1),146-160.
- 辻岡美延・山本吉廣 1976a 親子関係診断尺度 EICA の作成 - 因子的真实性の原理による項目分析 - 関西大学社会学部紀要, 7, 1-4.
- 辻岡美延・山本吉廣 1976b 親子関係診断尺度 EICA 検査用紙および同実施手引き 日本・心理テスト研究所
- 植田 智・吉森 護 1990 日本版 MLAM 承認欲求尺度作成の試み 広島大学教育学部紀要, 第 1 部, 39, 151-156 .
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究 , 42, 21-28.
- 内田裕之 1995 大学生の世間意識と対人恐怖的心性との関連 心理臨床学研究 , 13, 75-84.
- Urist, J. 1977 The Rorschach test and the assessment of object relations. . *Journal of Personality Assessment*, 41, 3-9.
- 和田秀樹 1999 <自己愛>の構造 - 「他者」を失った若者たち - 講談社

- Watson, P. J., & Briderman, M. D. 1993 Narcissistic personality inventory factors, splitting, and self-consciousness. *Journal of personality Assessment*, **61**, 41-57.
- Watson, P. J., Grisham, S. O., Trotter, M. V., & Briderman, M. D. 1984 Narcissism and empathy :Validity evidence for the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 301-305.
- Westen , D. 1990 The relations among narcissism, egocentrism, self-concept , and self-esteem: Experimental, clinical, and theoretical considerations. *Psychoanalysis and Contemporary Thought: A Quaterly of Integrative and Interdisciplinary Studies*, **13**, 183-239.
- Wink, P. 1991 Two faces of narcissism. *Journal of personality and Social Psychology*, **61**, 590-597.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 **30**, 64-68 .
- Young, M. F. 1959 An investigation of narcissism and correlates of narcissism in schizophrenics, neurotics, and normals. *Dissertation Abstracts*, **20**, 3394.
- 矢田部達郎・辻岡美延・園原太郎 1951 矢田部ギルフォード性格検査手引 竹井機器工業株式会社

付 録

付録 1

自己愛傾向尺度

高校生を対象に、自分のことを、どのように考え、感じているか、お聞きしています。

なお、調査された回答は、コンピュータによって分析し、研究以外には使用しませんので、あとあと迷惑をかけることはありません。

また、テストではありませんので、成績にもいっさい関係ありません。

	年 組 番				
	まったく	あまり	どちら	だいたい	よく
	あてはまらない	あてはまらない	ともいえない	あてはまる	あてはまる
1 人から変な目でみられないかいつも気になる。	1	2	3	4	5
2 人からきらわれないかということばかり気になる。	1	2	3	4	5
3 人と話をするとき、自分が軽蔑されていないか、批判されていないかと常に注意している。	1	2	3	4	5
4 人から批判されることがとても恐ろしい。	1	2	3	4	5
5 人からどう思われているか、いつも気にしている。	1	2	3	4	5
6 無理してでも人に合わせようとする。	1	2	3	4	5
7 人から拒絶されないように、あらゆる努力をする。	1	2	3	4	5
8 人に対して、いつも遠慮がちである。	1	2	3	4	5
9 人から求められるような自分を演じてしまう。	1	2	3	4	5
10 人と衝突することがとても恐ろしい。	1	2	3	4	5
11 自分の考えに自信が持てない。	1	2	3	4	5
12 人の反応を、いつも敏感に観察している。	1	2	3	4	5
13 自分を責めてしまいがち。	1	2	3	4	5
14 私は、他の人と簡単にうち解けて話せない。	1	2	3	4	5
15 自分のことはなるべく話ないようにしている。	1	2	3	4	5
16 なるべく目立たなくして、自分を出さないようにしている。	1	2	3	4	5
17 人見知りが多い。	1	2	3	4	5
18 自己主張できない。	1	2	3	4	5
19 自分は社会に適さない人間だと思う。	1	2	3	4	5
20 人間関係を煩わしく感じる。	1	2	3	4	5
21 周りの人に対して腹を立てることが多い。	1	2	3	4	5
22 大勢の人の注目を浴びようということが苦手である。	1	2	3	4	5
23 人といると疲れるので、一人でいる方が好きである。	1	2	3	4	5
24 人が自分の期待通りに動かないことで、猛烈に腹が立つことがある。	1	2	3	4	5
25 周りの人がくだらない人間に思えることがある。	1	2	3	4	5
27 周りの人が自分に対して気が利かないと、腹を立てることがよくある。	1	2	3	4	5
28 気持ちを察してもらえないことで、猛烈に腹をたてることがよくある。	1	2	3	4	5
29 周りの人が、常に自分の期待に従ったらいと思う。	1	2	3	4	5
30 自分を批判する人間を敵対視してしまう。	1	2	3	4	5
31 人に対して影響力を持ちたいという気持ちが強い。	1	2	3	4	5
32 特別に有利な取り計らいをされる事を期待している。	1	2	3	4	5
33 人とコミュニケーションをとることが苦手だ	1	2	3	4	5
34 私の心は、とても傷つきやすく、もろい。	1	2	3	4	5
35 何かにつけてよくよ心配する事が多い。	1	2	3	4	5
36 すぐ感情を傷つけられやすい。	1	2	3	4	5
37 友達から怒りを向けられると、自分が駄目な人間のように感じる。	1	2	3	4	5
38 他人からの批判には、ぐさっと感じるほうである。	1	2	3	4	5
39 自分は、人から近づきにくい存在だと思われている。	1	2	3	4	5
40 自分の噂ばなしは、適当に聞き流している。	1	2	3	4	5
41 少しでもうまくいかないことがあると泣きたくなる	1	2	3	4	5
42 他人に馬鹿にされると惨めな気持ちになる。	1	2	3	4	5

付録 2

自己愛人格目録短縮版(NPI-S)

高校生を対象に、自分のことを、どのように考え、感じているか、お聞きしています。

なお、調査された回答は、コンピュータによって分析し、研究以外には使用しませんので、あとあと迷惑をかけることはありません。

	年 組 番				
	まったく	あまり	どちら	だいたい	よく
	あてはまらない	あてはまらない	ともいえない	あてはまる	あてはまる
1 私は、才能に恵まれた人間であると思う。	1	2	3	4	5
2 みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある	1	2	3	4	5
3 私は自分の意見をはっきり言う人間だと思う。	1	2	3	4	5
4 私は周りの人たちより優れた才能を持っていると思う	1	2	3	4	5
5 私は、みんなからほめられたいと思っている	1	2	3	4	5
6 私は、控え目な人間とは正反対の人間だと思う	1	2	3	4	5
7 私は、他人より有能な人間であると思う。	1	2	3	4	5
8 どちらかといえば注目される人間になりたい	1	2	3	4	5
9 私はどんな時でも、周りを気にせず自分の好きなように振る舞っている	1	2	3	4	5
10 私は、周りの人が学ぶだけの値打ちのある長所を持っている。	1	2	3	4	5
11 周りの人が私のことを良く思ってくれないと、落ち着かない気分になる	1	2	3	4	5
12 私は、自分で責任を持って決断するのが好きだ。	1	2	3	4	5
13 周りの人々は、私の才能を認めてくれる	1	2	3	4	5
14 私は、多くの人から尊敬される人間になりたい	1	2	3	4	5
15 私はどんなことにも挑戦していくほうだと思う	1	2	3	4	5
16 私は周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている	1	2	3	4	5
17 私は、人々を従わせられるような偉い人間になりたい。	1	2	3	4	5
18 これまで私は自分の思う通りに生きてきたし、今後もそうしたいと思う	1	2	3	4	5
19 私が言えば、どんなことでもみんな信用してくれる	1	2	3	4	5
20 こというときには、私は人目につくことを進んでやってみたい。	1	2	3	4	5
21 いつも私は話しているうちに、話の中心になってしまう	1	2	3	4	5
22 私に接する人はみんな、私という人間を気に入ってくれるようだ	1	2	3	4	5
23 私は、みんなの人気者になりたいと思っている	1	2	3	4	5
24 私は、自己主張が強いほうだと思う。	1	2	3	4	5
25 私は、どんなことでも上手くこなせる人間だと思う	1	2	3	4	5
26 私は、人々の話題になるような人間になりたい	1	2	3	4	5
27 私は自分独自のやり方を通すほうだ	1	2	3	4	5
28 周りの人たちが自分のことを良い人間だといってくれるので、自分でもそうなんだと思う	1	2	3	4	5
29 人が私に注意を向けてくれないと、落ち着かない気分になる。	1	2	3	4	5
30 私は、個性の強い人間だと思う	1	2	3	4	5

付録3

自己の障害目録

高校生を対象に、自分のことを、どのように考え、感じているか、お聞きしています。
 なお、調査された回答は、コンピュータによって分析し、研究以外には使用しませんので、あとあと迷惑をかけることはありません。
 また、テストではありませんので、成績にもいっさい関係ありません。

	年 組 番				
	まったく	あまり	どちら	だいたい	よく
	あてはまらない	あてはまらない	ともいえない	あてはまる	あてはまる
1 人から変な目でみられないかといつも気にする	1	2	3	4	5
2 人からきられられないかということばかり気になる	1	2	3	4	5
3 人と話をするとき、自分が軽蔑されていないか、批判されていないかと常に注意している	1	2	3	4	5
4 人から批判されることがとても恐ろしい	1	2	3	4	5
5 人からの評価をいつも気にしている	1	2	3	4	5
6 何でも人に合わせようとする	1	2	3	4	5
7 人から拒絶されないように、あらゆる努力をする	1	2	3	4	5
8 いつも遠慮がちである	1	2	3	4	5
9 人から求められるような自分を演じてしまう	1	2	3	4	5
10 人と衝突することがとても恐ろしい	1	2	3	4	5
11 自分の考えに自信が持てない	1	2	3	4	5
12 人の反応を、いつも敏感に観察している	1	2	3	4	5
13 自分を責めてしまいやすい	1	2	3	4	5
14 いつも他の人が優れていて、自分は劣っていると思ってしまう	1	2	3	4	5
15 人とコミュニケーションをとることが苦手だ	1	2	3	4	5
16 自分は人に対して心を閉ざしている	1	2	3	4	5
17 自分を出さないようにしている	1	2	3	4	5
18 人見知りが多い	1	2	3	4	5
19 人と深く関わると傷つくので、あまり関わらないようにしている	1	2	3	4	5
20 自己主張できない	1	2	3	4	5
21 自分は人から距離を置かれる存在だと思う	1	2	3	4	5
22 自分は社会に適さない人間だと思う	1	2	3	4	5
23 人間関係を煩わしく感じる	1	2	3	4	5
24 周りの人に対して腹を立てることが多い	1	2	3	4	5
25 少数の友人としか付き合えないようにしている	1	2	3	4	5
26 大勢の人の注目を浴びることが大の苦手である	1	2	3	4	5
27 人に自分の気持ちを簡単に分かれてたまるかと思う	1	2	3	4	5
28 賞賛されると居心地が悪くなる	1	2	3	4	5
29 人といると疲れるので、一人になると心底ほっとする	1	2	3	4	5
30 人が自分の期待通りに動かないことで、猛烈に腹が立つことがよくある	1	2	3	4	5
31 とても恥ずかしがり屋である	1	2	3	4	5
32 適当に軽く扱われるのが許せない	1	2	3	4	5
33 同じ人がよく見えたり悪く見えたり、極端である	1	2	3	4	5
34 周りの人がくだらない人間に思えることがよくある	1	2	3	4	5
35 バカにされることがとても恐ろしい	1	2	3	4	5
36 周りの人が自分に対して気が利かないと、腹を立てることがよくある	1	2	3	4	5
37 気持ちを察してもらえないことで、猛烈に腹をたてることがよくある	1	2	3	4	5
38 周りの人が、常に自分の期待に従ったらいいと思う	1	2	3	4	5
39 人から忠告されると腹が立つ	1	2	3	4	5
40 自分を批判する人間を敵対視してしまう	1	2	3	4	5
41 人に対して影響力を持ちたいという気持ちが強い	1	2	3	4	5
42 特別に有利な取り計らいをされる事を期待している	1	2	3	4	5

付録 4

日本版MLAM承認欲求尺度

下記の文章を読み、それが自分自身にどの程度当てはまっているかを答えてください。

なお、調査された回答は、コンピュータによって分析し、研究以外には使用しませんので、あとあと迷惑をかけることはありません。

また、テストではありませんので、成績にもいっさい関係ありません。

	年 組 番				
	全(当て	あまり当て	どちらともいえない	たいがい当て	よく当て
	はまらない	はまらない		はまる	はまる
1 人を喜ばせるために、自分の意見や行動をかえることがある。	1	2	3	4	5
2 人とうまくやったり好かれるために、人が望むように振る舞おうとする傾向がある。	1	2	3	4	5
3 他人からの励ましがなければ、何事でも続けることが困難である。	1	2	3	4	5
4 私は、自分の考えがグループの意見と異なるとき、自分の考えを言いにくい。	1	2	3	4	5
5 私は、友人が自分を支持してくれることがわかっているときだけですんで議論に加わる。	1	2	3	4	5
6 私は、人からよく思われるために自分を変えようとは思わない。	1	2	3	4	5
7 自分の進む道を必ずしも自分で決めていないと思うことが、時々ある。	1	2	3	4	5
8 他人の嫌がることをしたり、言ったりしないように注意している。	1	2	3	4	5
9 自分の行動を弁解したり、謝罪する必要を感じることはない。	1	2	3	4	5
10 人との様々な交流の場で、上手に振る舞うことは重要ではない。	1	2	3	4	5
11 私はたいがい、人が反対しても自分の立場を変えない。	1	2	3	4	5
12 重要人物に取り入るのは賢明である。	1	2	3	4	5
13 どれほどよい人間かで、友人の数が決まる。	1	2	3	4	5
14 最もよい人の扱い方は、相手の考えに同意したり、相手の喜ぶような事を言うことである。	1	2	3	4	5
15 たとえ自分のほうが正しいと分かっているても他人から見れば間違っていると思われるようなことは、人前ですべきではない。	1	2	3	4	5
16 人と接するときは、積極的であるより控えめな方がよい。	1	2	3	4	5
17 私は、同じ状況であっても、相手が違えば異なる行動をとる。	1	2	3	4	5
18 誰かが私のことを余りよく思っていないことが分かったら、次にその人に合ったとき印象を良くするためにできるだけのことをする。	1	2	3	4	5
19 私に対してどんな批判があろうと、私はそれを受け入れることができる。	1	2	3	4	5
20 私は、同じ状況であっても、相手が違えば異なる行動をとる。	1	2	3	4	5

付録5

基本的信頼感尺度

高校生を対象に，自分のことを，どのように考え，感じているか，お聞きしています。

なお，調査された回答は，コンピュータによって分析し，研究以外には使用しませんので，あとあと迷惑をかけることはありません。

また，テストではありませんので成績にも関係ありません。

	年 組 番			
	全(当て	あまり当て	思い当て	よ(当て
	はまらない	はまらない	はまる	はまる
1 普通，人はお互いに誠実にかかわりあっているものだと思う。	1	2	3	4
2 自分が困ったときには，まわりの人々から援助が期待できる。	1	2	3	4
3 一般的に，人間は信頼できるものであると思う。	1	2	3	4
4 私には頼りにできる人がほとんどいない。	1	2	3	4
5 周囲の人々によって自分が支えられていると感じる。	1	2	3	4
6 私は自分自身を十分に信頼できると感じる。	1	2	3	4
7 失敗すると，二度と立ち直れないような気がする。	1	2	3	4
8 自分自身のことが信頼できないと感じることもある。	1	2	3	4
9 人から見捨てられたのではないかと心配になることがある。	1	2	3	4
10 物事がうまくゆかなくなると，自分のなかに引きこもってしまうことがある。	1	2	3	4
11 人生に対して，不信感を感じることもある。	1	2	3	4

付録6

学校生活満足度尺度

下記の質問に対して、今の学校生活を振り返り、自分の気持ちにいちばん近いと思われる数字に をつけてください。

なお、調査された回答は、コンピュータによって分析し、研究以外には使用しませんので、あとあと迷惑をかけることはありません。

また、テストではありませんので、成績にもいっさい関係ありません。 年 組 番

	まったく あてはまらない	あまり あてはまらない	どちら ともいえない	だいたい あてはまる	よく あてはまる
1 私は勉強や運動、特技やひょうきんさなど友人から認められていると思う。	1	2	3	4	5
2 私はクラスの中で存在感があると思う。	1	2	3	4	5
3 私は授業中に発言をしたり、先生の質問に答えたりするとき、冷やかされる。	1	2	3	4	5
4 仲の良いグループの中では中心的なメンバーである。	1	2	3	4	5
5 私は学校・クラスでみんなから注目されるような経験をしたことがある。	1	2	3	4	5
6 学校生活で充実感や満足感を覚えることがある。	1	2	3	4	5
7 私は部活などの仲間から無視されることがある。	1	2	3	4	5
8 私はクラスで行う活動には積極的に取り組んでいる。	1	2	3	4	5
9 在籍している学校に満足している。	1	2	3	4	5
10 私はクラスの中で、浮いていると感じることがある。	1	2	3	4	5
11 私はクラスの人から無視されるようなことがある。	1	2	3	4	5
12 私はクラスメートから、耐えられない悪ふざけをされることがある。	1	2	3	4	5
13 私はクラスや部活でからかわれたり馬鹿にされるようなことがある。	1	2	3	4	5
14 私はクラスやクラブの活動でリーダーシップをとることがある。	1	2	3	4	5
15 クラスで班を作るときなど、なかなか班に入れずに残ってしまうことがある。	1	2	3	4	5
16 私はクラスの中で、孤立感を覚えることがある。	1	2	3	4	5
17 学校内に自分の本音や悩みを話せる友人がいる。	1	2	3	4	5
18 学校内で私を認めてくれる先生がいると思う。	1	2	3	4	5
19 私は休み時間などに、ひとりであることが多い。	1	2	3	4	5
20 私はクラスにいるときや部活をしているとき、周りの目が気になって不安や緊張を覚えることがある。	1	2	3	4	5

付録7

親子関係診断尺度

高校生を対象に、自分の父親（母親）のことをどのように感じているか、お聞きしています。下記の質問に、父親（母親）について考えながら、はい・いいえ×・どちらでもないで答えてください。

なお、調査された回答は、コンピュータによって分析し、研究以外には使用しませんので、あとあと迷惑をかけることはありません。

また、テストではありませんので、成績にもいっさい関係ありません。

- 1 なんでも私がやりたいようにさせてくれる
- 2 私が家の手伝いをしないと腹を立てる。
- 3 私にいろいろ気をつけてくれる。
- 4 私の言うことに耳を傾けてくれる。
- 5 私のやりたいときに宿題をやらせてくれる。
- 6 私が年長者に口答えするのを許さない。
- 7 いつも私を喜ばすことを考えている。
- 8 一緒にいると気持ちが楽になる。
- 9 好きなだけ外に行かせてくれる。
- 10 いつも私の性格を改めさせようとする。
- 11 他の誰とよりもわたしと一緒にいたがる。
- 12 私が困っているときには元気づけてくれる。
- 13 私がしたいことはどんなことでもさせてくれる。
- 14 私が何をすべきか、いつも注意したがる。
- 15 私にたびたびほほえみかける。
- 16 私の悩みや心配事を理解してくれる。
- 17 私が友達の家で一晩泊まるのを許してくれる。
- 18 「なぜそんなことをしたのか説明しなさい」としつこくいう。
- 19 私を喜ばそうといろいろなことをする。
- 20 いつも私の考えや意見に耳を傾けてくれる。
- 21 学校が終わった後は、私の好きなことをさせてくれる。
- 22 私がいいつけ通りにするまで自由にさせてくれない。
- 23 暇さえあれば、私に話かけたり、一緒にいたがる。
- 24 私には友達が大事だということを理解してくれる。
- 25 夜や週末は私の好きなように過ごさせてくれる。
- 26 私に何か言いつけるとそれを守るまでやかましく言って聞かせる。
- 27 私が暇なときにはたいてい、一緒に過ごして欲しいと思っている。
- 28 私がどんな物の見方をしているのか理解しようとする
- 29 私が外に行くときに、何時に帰りなさいとは言わない。
- 30 私のためにたかさんの決まりや規則を作り、家の秩序を守ろうとする。
- 31 友達と出かけるよりも私と一緒に家にいる方が好きだ。
- 32 私といっしょに仕事をするときには私の意見を聞いてくれる。
- 33 夜でも私が行きたいときにはいつでも外へ出してくれる。
- 34 私が悪い事をすればすべて何らかの方法で罰しなければならないと思っている。
- 35 私のことが好きだということを態度で表すべきだと思っている。
- 36 心配事をじっくり聞いてくれるので気持ちが楽になる。
- 37 私の行きたいところならどこへでも何も聞かずに行かせてくれる。
- 38 私が学校の勉強や家での雑用を怠けると私を罰するのを当然のことだと思っている。
- 39 私が大きくなって家の外で過ごす時間が増えてきたことを残念がっているようだ
- 40 私が喜ぶ本や雑誌を買ってくれたり学校で役立つことを教えてくれたりする。

付録 8

学校嫌い感情尺度

高校生を対象に、自分の学校生活についてどのように感じているか、お聞きしています。
 なお、調査された回答は、コンピュータによって分析し、研究以外には使用しません
 ので、あとあと迷惑をかけることはありません。

	年 組 番			
	全(当て はまらない)	あまり当て はまらない	だいたい当て はまる	よく当て はまる
1 私は学校に来て何も楽しいことがない。	1	2	3	4
2 朝、何となく学校に行きたくないと思うことがある。	1	2	3	4
3 学校さえなければ、毎日楽しいだろうと思う。	1	2	3	4
4 学校にいるとき、よくゆううつになってくる。	1	2	3	4
5 学校では嫌なことばかりある。	1	2	3	4
6 日曜の夜、また明日から学校かと思う気が重くなる。	1	2	3	4
7 学校をやめたいと思うことがある。	1	2	3	4
8 学校にいるのがいやで、授業が終わったらすぐに家に帰りたくなる。	1	2	3	4
9 私はこの学校が好きだ。	1	2	3	4
10 今のクラスは良くないので、他のクラスに変わりたいと思う。	1	2	3	4
11 今の学校が嫌で転校したいと思うことがよくある。	1	2	3	4
12 出来れば学校なんかなくなればよいのにと思う。	1	2	3	4

付録9

モーズレイ性格検査(MPI)

下記の文章を読み、それが自分自身にどの程度当てはまっているかを答えてください。
 なお、調査された回答は、コンピュータによって分析し、研究以外には使用しませんので、あとあと迷惑をかけることはありません。
 また、テストではありませんので、成績にもいっさい関係ありません。

	年 組 番		いいえ	どちらとも いえない	はい		
1 自分が気に入ったわずかな人としか付き合わない方だ。	1	1	2	3
2 計画を立てるよりも実行する方が好きである。	2	1	2	3
3 自分についてとやかく言われたときははたいていすぐ言い返すことができる。	3	1	2	3
4 まったくおこりそうもないことを、空想することがよくある。	4	1	2	3
5 子どものとき、いつも言われたことを、すぐすなおにやり直した。	5	1	2	3
6 動作は(どうき)は、てきばきすばやいほうである。	6	1	2	3
7 新しい友達をつくるのに、骨がおれる(苦労したり時間がかかたりする)。	7	1	2	3
8 その日のうちにやらなければならないことを、翌日までのばすことがある。	8	1	2	3
9 普段やっている仕事(手伝いなど)を、当たり前のこととして気軽に考えている。	9	1	2	3
10 気分がぐしゃくしゃすることがよくある。	10	1	2	3
11 すんだことを、くよくよ考えるほうである。	11	1	2	3
12 いちど約束したら、どんなに都合が悪くても必ずそれを守る。	12	1	2	3
13 社交的な(遊びなど、他人との)つきあいをするのが好きである。	13	1	2	3
14 異性のまえでは、はずかしがるほうである。	14	1	2	3
15 時々、むしのいどころが悪くなって、むっとすることがある。	15	1	2	3
16 ひとりぼっちだと思ふことがよくある。	16	1	2	3
17 いろいろなことに、神経過敏になっている。	17	1	2	3
18 決心するのが遅すぎた、くよくよすることがある。	18	1	2	3
19 自分の考えは、いつも完全に公平である。	19	1	2	3
20 生真面目(きまじめ)すぎる方である。	20	1	2	3
21 パーティ(友人との集まり)などで、とても楽しいと思ふことがある。	21	1	2	3
22 たいした理由もなく、楽しくなったり、悲しくなったり気分が変わることがある。	22	1	2	3
23 人をからかうのが好きである。	23	1	2	3
24 下品な冗談をおもしろいと思ふ。	24	1	2	3
25 気持ちを集中しようとしても、いつも気が散ってしまう。	25	1	2	3
26 気持ちをゆったりさせることがなかなか出来ない方である。	26	1	2	3
27 過ぎ去ったことについて、こうすれば良かったのといつもあれこれ考える。	27	1	2	3
28 勝負事には、負けるよりも勝ちたい。	28	1	2	3
29 人とすぐ知り合いになれる。	29	1	2	3
30 今の自分と昔の自分は、同じ人間でないかも知れないという奇妙な感じをもったことがある。	30	1	2	3
31 いつも自分で話すよりも、聞き手にまわるほうである。	31	1	2	3
32 会話のさいちゅうになにかほかのことなど、考えるにふけることがよくある。	32	1	2	3
33 いやな相手がすばらしいことをしたとき、いつでも素直に喜べる。	33	1	2	3
34 社交的な活動(友人との遊びや部活動など)に、たいへん満足を感じている。	34	1	2	3
35 いろいろな考えが、つぎつぎと頭に浮かんで、眠れないことが多い。	35	1	2	3
36 時には、ちょっと自慢話をすることがある。	36	1	2	3
37 陽気なパーティ(友人との集まり)などで、いつものびのびとふるまってすばらしく楽しいときを過ごすことが出来る。	37	1	2	3
38 空想にふけることが好きである。	38	1	2	3
39 はっきりした理由もないのに、なにをするのも面倒で疲れた感じがすることがしばしばある。	39	1	2	3
40 私の習慣は、どれもこれもよい習慣だと思ふ。	40	1	2	3
41 社交的な集まり(みんなで集まっているとき)で静かに黙っている方である。	41	1	2	3
42 元気いっぱいいる時があるかと思うと、ひどく気がめいっているときもある。	42	1	2	3
43 手紙(メール)を受け取ったら、いつもすぐ返事を書いている。	43	1	2	3
44 自分は話し好きなほうだと思ふ。	44	1	2	3
45 人に言えないような考えがときどき心に浮かぶことがある。	45	1	2	3
46 いろいろな人との交際ができなくなったとしたら、つらいと思ふ。	46	1	2	3
47 活動的な事(身体を動かすこと)に参加しているときが一番楽しい。	47	1	2	3
48 楽しかったときの思い出に、長い間ふけていることがしばしばある。	48	1	2	3
49 よく知らないことでも、知ったふりをすることがある。	49	1	2	3
50 何の役にも立たない考えが、くりかえしくりかえし頭に浮かんで困ったことがある。	50	1	2	3
51 他人から、元気のよい人間だと思われている。	51	1	2	3
52 時には、人の悪口をいうことがある。	52	1	2	3
53 いつもだいたい同じ気分である。	53	1	2	3
54 どちらかといえば、すぐ気を悪くする方である。	54	1	2	3
55 うそをついたことがある。	55	1	2	3
56 みんなで集まって何かをする時は、先頭に立つのが好きな方である。	56	1	2	3
57 自分は陽気な人間だと思ふ。	57	1	2	3
58 お金の心配をすることがある。	58	1	2	3
59 座ってられないほど、いらいらすることがある。	59	1	2	3
60 普段、人づきあいのよいほうである。	60	1	2	3
61 自分は元気のよい人間だと思ふ。	61	1	2	3
62 約束の時間や仕事の時間に遅れたことがある。	62	1	2	3
63 全く理由もないのに、とてもみじめだと感じたことがある。	63	1	2	3
64 自分が悪かったと悩むことがよくある。	64	1	2	3
65 怒りっぽいほうである。	65	1	2	3
66 社交的な集まり(友人との集まり)に、顔を出すのが好きである。	66	1	2	3
67 腹を立てたり、かんしゃくをおこしたりすることがある。	67	1	2	3
68 はっきりした理由もないのに、楽しくなったりゆううつになったりする。	68	1	2	3
69 陽気なパーティ(楽しい集まり)でも、夢中になることはなかなかできない。	69	1	2	3
70 新しい場所や新しい環境などにすぐなれる。	70	1	2	3
71 陽気になったりするなど気分がよく変わる。	71	1	2	3
72 学校などに届けを出すときに、絶対にばれないと分かっているにもかかわらず、必ず全部届ける。	72	1	2	3
73 細かいところに注意を、集中しなければならない仕事が好きである。	73	1	2	3
74 一人きりでいたいと思ったり、人と一緒にいるのがまんできないことがある。	74	1	2	3
75 大勢の人が集まったところでは、後ろのほうに引っ込んでいる。	75	1	2	3
76 心配事で眠れないことがよくある。	76	1	2	3
77 知っている人のなかで、どうしても好きになれない人がいる。	77	1	2	3
78 いつまでも元気になるほど、ひどく失望することがよくある。	78	1	2	3
79 たいいてい自分のほうから進んで新しい友達をつくる。	79	1	2	3
80 みんなとワーワー騒いで楽しめる。	80	1	2	3

業績一覧

1. 学術誌

- ・高橋美知子・伊藤義美 2003 回避的な自己愛傾向の生徒との面接事例 - 教育現場における支持的アプローチを中心として -
名古屋大学大学院人間情報学研究科・情報文化学部紀要,情報文化研究,第17号, P139-154.
- ・高橋美知子 2006 高校生における自己愛傾向と学校生活満足感の関連について - 承認欲求からの影響についての検討 -
カウンセリング研究 第39巻 1号, P28-39.
- ・伊藤義美・栗野理恵子・小畑豊美・金慶美・高橋美知子他3名 2006
「ことばや語句」と「絵や写真」についてのフォーカシング体験の比較検討
カウンセリング研究 第39巻 2号, P143-151.
- ・高橋美知子 2007 高校生における学校忌避感情と自己愛傾向, 基本的信頼感の関連
カウンセリング研究 第40巻 3号, P257-266.

2. 国際学会発表 (ポスタ -)

- ・Takahashi Michiko 2005 Relationship between school adjustment and narcissistic tendency in high school students.
28th International Congress of Psychology ICP2004 Abstract book P966. Beijing.
- ・ Ito Yoshimi ,Okada Atsushi ,Kozuka Chie ,Makishima Izumi ,Takahashi Michiko 2005 A comparison of the focusing experiences with words and pictures.
28th International Congress of Psychology ICP2004 Abstract book P967 .
Beijing.
- ・Takahashi Michiko 2006 Relationship among parents' attitudes, narcissism and school maladjustment in high school students .
9th European Congress of Psychology ECP Abstract book P168. Granada

3. 国内学会発表（口頭発表）

- ・高橋美知子 2003 回避的な自己愛傾向の生徒との面接事例
東海相談学会第 36 回総会研究発表大会抄録集 P8. 名古屋大学
- ・高橋美知子 2007 高校生の自己愛傾向と不安，学校不適應との関連
日本人間性心理学会第 26 回大会発表論文集 P84-85. 仁愛大学

4. 国内学会発表（ポスタ - ）

- ・高橋美知子 2003 高校生の自己愛傾向に及ぼす親の養育態度の影響について - 親子関係診断尺度(EICA)との関連から -
日本教育心理学会第 45 回総会発表論文集 P423. 大阪教育大学
- ・高橋美知子 2003 高校生の自己愛傾向に関する研究 - 回避的傾向と誇大的傾向の観点から -
日本性格心理学会第 12 回大会発表論文集 P121-122. 同志社大学
- ・高橋美知子 2004 高校生の学校生活への適応に影響する自己愛傾向について - 親子関係診断尺度 (EICA) との関連から -
日本教育心理学会第 46 回総会発表論文集 P99. 富山大学
- ・伊藤義美・栗野理恵子・小畑豊美・高橋美知子他 4 名 2004 大学生のフォーカシング体験の研究 - 言葉を用いたフォーカシングと絵・写真を用いたフォーカシングによる確認と気づきの比較検討 -
日本教育心理学会第 46 回総会発表論文集 P99. 富山大学
- ・高橋美知子 2005 高校生の自己愛傾向と学校環境への適応との関連の検討 - 基本的信頼感とアイデンティティの確立との関係から -
日本カウンセリング学会第 38 回大会発表論文集 P391-392.
栃木カウンセリングセンター
- ・高橋美知子 2006 日米大学生の自己愛傾向に関する比較研究 - 承認欲求との関連についての検討 -
日本教育心理学会第 48 回総会発表論文集 P545. 岡山大学